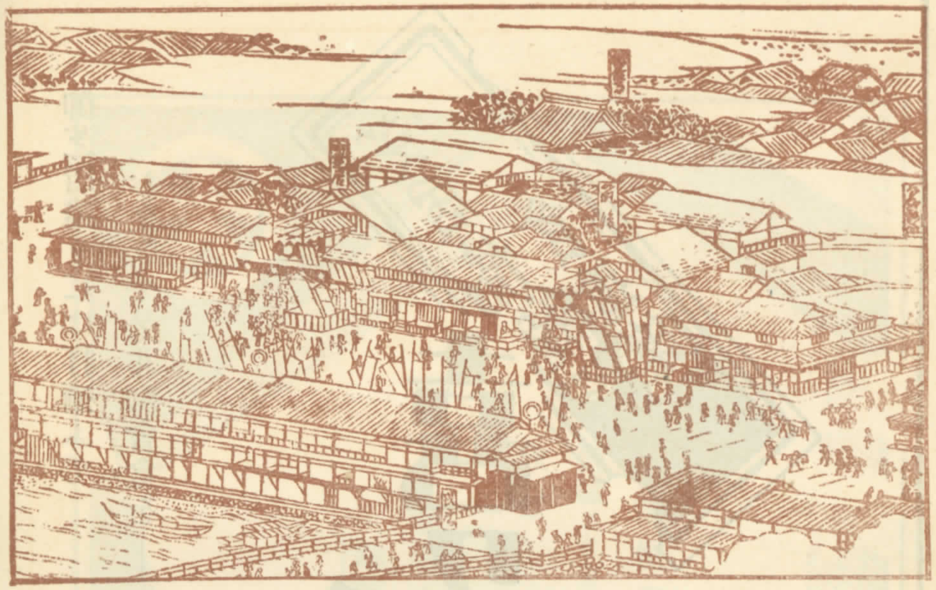
昭和元年十二月三十日印刷　昭和二年一月一日發行

芝居情緒と食道樂
御芝居歸りには打揃ふて
お坐席で是非御會食を――
喜久屋食堂
味は必ず御氣に召す
天ぷら　季節御料理　日本御料理
道頓堀戎ばし北詰
支店
大阪支店　北新地裏町
京都支店　木屋町ドングリ橋

大
四海恒春の元旦を
皆樣とともに迎へることを
欣ばしく存じます
新春の
お買物は大丸にて
大阪　心齋橋
大丸呉服店
月曜休業
夜間營業

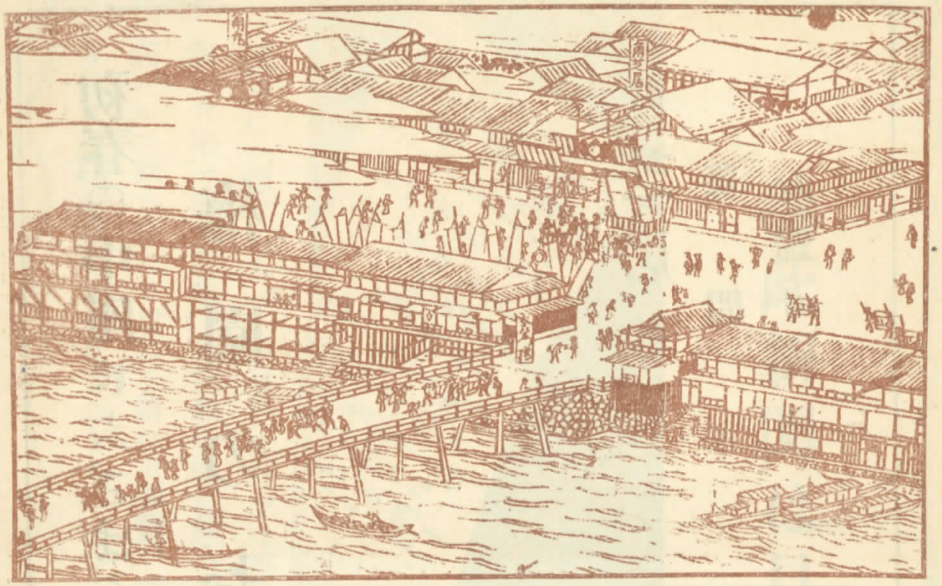
昭和二年一月一日發行
月刊雜誌 演劇研究 道頓堀 初春號 第五輯



口繪寫眞

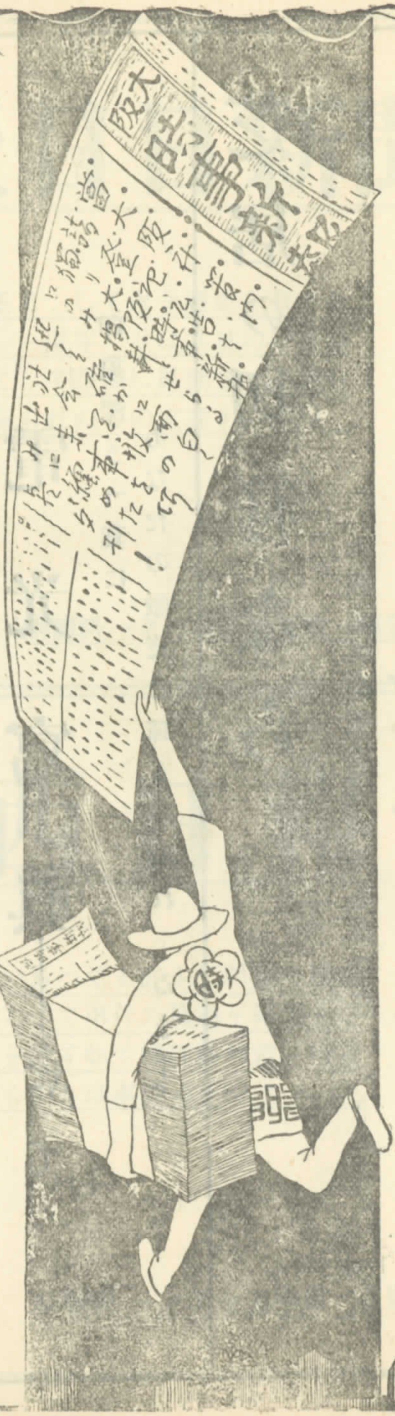
◇「中座敵討襤褸錦」中村鴈治郎の春藤治郎右衛門◇浪花座「近江源氏先陣舘」實川延若の盛綱首實檢◇中座「椀久末松山」中村鴈治郎の椀屋久兵衛と中村福助の松山◇中座「關ヶ原」中村魁車の淀君と中座「敵討襤褸錦」林長三郎の春藤新七◇文樂座燒失を惜む佛國大使クロウデル氏より白井松竹合名會社々長に寄する書翰◇中座へ出勤の中村雀右衛門と市川市藏と浪花座へ出勤の嵐巖笑の近影◇趣味生活に親しむ市川右團治と嵐吉三郎◇久振りで中座出勤の片岡我童◇角座初春興行に出演喜多村綠郎と花柳章太郎◇辨天座に引越興行の文樂座人形淨瑠璃「合邦」の舞臺面と津太夫、土佐太夫、古靭太夫の近影

浪花情緒の誕生 白井松次郎 2
道頓堀 成瀬無極 4
道頓堀の今昔 高安月郊 7
人形淨瑠璃と道頓堀 木谷蓬吟 10
歌舞伎と新劇に對する 諸家の感想と所感 五十餘名氏 12
如是觀劇 山本修二 21
歌舞伎の將來 竹内勝太郎 23
明日の演劇 豐岡佐一郎 27
左傾劇の眞實性 山上貞一 30
關ヶ原に就て 朝生順三 32



敵討襤褸錦（上演臺本） 34
青海波と卯の花（臺詞） 39
椀久末松山（芝居物語） 南蘇生 40
喫煙室 高橋蓼雨 43
嫗山姥に就て 鯱之助 44
定式幕に就て 食滿南北 木谷蓬吟 46
竹本座の假屋興行 南木萍水 48
道頓堀の初春興行 油屋久二 50
大正十五年度の道頓堀 中井泰孝 52
「椀久」と「夕霧」の斷片 石割松太郎 55
大晏寺堤漫談 富田泰彦 58
新年劈頭の俳優觀 野村治郎三郎 61
芝居の新年（俳句） 川尻清潭 64
角座初春興行上演脚本 墨水十二夜 小春髪結 吉井勇原作 瀬戸英一脚色 65
中座初春興行役割一覽・浪花座初春興行役割一覽

編輯 姥谷生
表紙・カット 大塚克三



◎此新聞は見るべからず!!

試みに一讀せらるべし、見た丈けでは眞味は判らぬ然し一度讀むだが最後！今度新機軸を開いた第一面第二面、各活動俳優似顔入の新講談面、超越した婦人と家庭欄、時事獨有の經濟面、マア欺されたと思ふて讀むで御覧、倘其外に大阪府管内諸登記廣告は**大阪時事新報**より外には絶對掲載せられてゐませぬ。見る新聞でなく、眞に讀む新聞は近頃評判のこの新聞!!!

初春の中座にふさはしい

梅園のお獻立……

お芝居の
幕間と
お歸りには

お芝居での御食事は食堂にておかへりには白鷹にて一寸一ぷく江戸すしを

梅園

中座食堂

本店 太左衞門橋北一丁
電話南六二二七番

大阪日日新聞

夕刊王として永き歴史を有する
もの、一度手にせば其日の世情は
髣髴として眼前に展開す一度讀む
だら忘られぬとの定評ある所以

購讀料一ケ月金五拾五錢・廣告料一行金壹圓

關西日報

何事があつても直ちに問題の核心
に突入つて事件の眞相を報ずるこ
と掌を指す如く情理整然常に讀者
を誤らざるは本紙の一特色

購讀料一ケ月金五拾五錢・廣告料一行金壹圓

初春のお姿を……中座三階の電光寫眞――にて

印象深き一葉に
あなたの微笑と輝きが溢れてゐます。

芝居の切符なら………

道頓堀の各座の切符
其他觀覽切手前賣券
を取揃へてあります

大阪東區高麗橋通南入心齋橋筋

プレイガイド

電本三三〇九　三九九五

本社の發行する大阪毎夕新聞は純然たる經濟新聞であります故に財界の實情は本紙によつて明瞭にされてゐます

大阪毎夕新聞

大阪毎夕新聞の米界欄は既に世の定評ある如く正鵠精微斯界の權威であります故に米界の實勢は本紙によつて明晰にされてゐます

發行所

株式會社 大阪毎夕新聞社

大阪市堂島中一丁目

電話北 一八〇九・二六四〇
六〇五〇・六六〇〇

振替口座大阪三五四二四番

劇場緞帳
幕のぼり
各國々旗
優勝旗
染物一式
旗附屬品

大阪市南區日本橋南詰

綿庄旗店

電話南二二七三番

松竹合名社
各劇場用達
劇場用提燈
傘販賣

大阪市南區道頓堀黒門筋南

登記商號

今津屋

ミナハヒヤクシナイ
ヤスイシナ

電話南八一四七番

中座初春興行「敵討襤褸錦」大晏寺の場
中村鴈治郎の春藤治郎衛門

新刊圖書雜誌

新知識を得られるには
新らしい圖書雜誌を御愛讀下さい

御客樣本位で皆樣から御愛顧を享けてゐる
當店には

新刊の書籍雜誌が
豊富に揃つてゐます

大阪道頓堀中座前

明文堂書店

電話南七七五〇番
振替大阪二六七二五番

演劇研究雜誌
「道頓堀」
特約販賣

中座初春興行の「椀久末松山」

（圓）は中村鴈治郎の椀屋久兵衞 （下） 中村福助の遊女松山

浪花座初春興行の

「近江源氏先陣館」

實川延若の首實檢

初春興行の中座へ出勤の
市川市藏の近影

中座初春興行へ出勤の
中村雀右衛門の近影

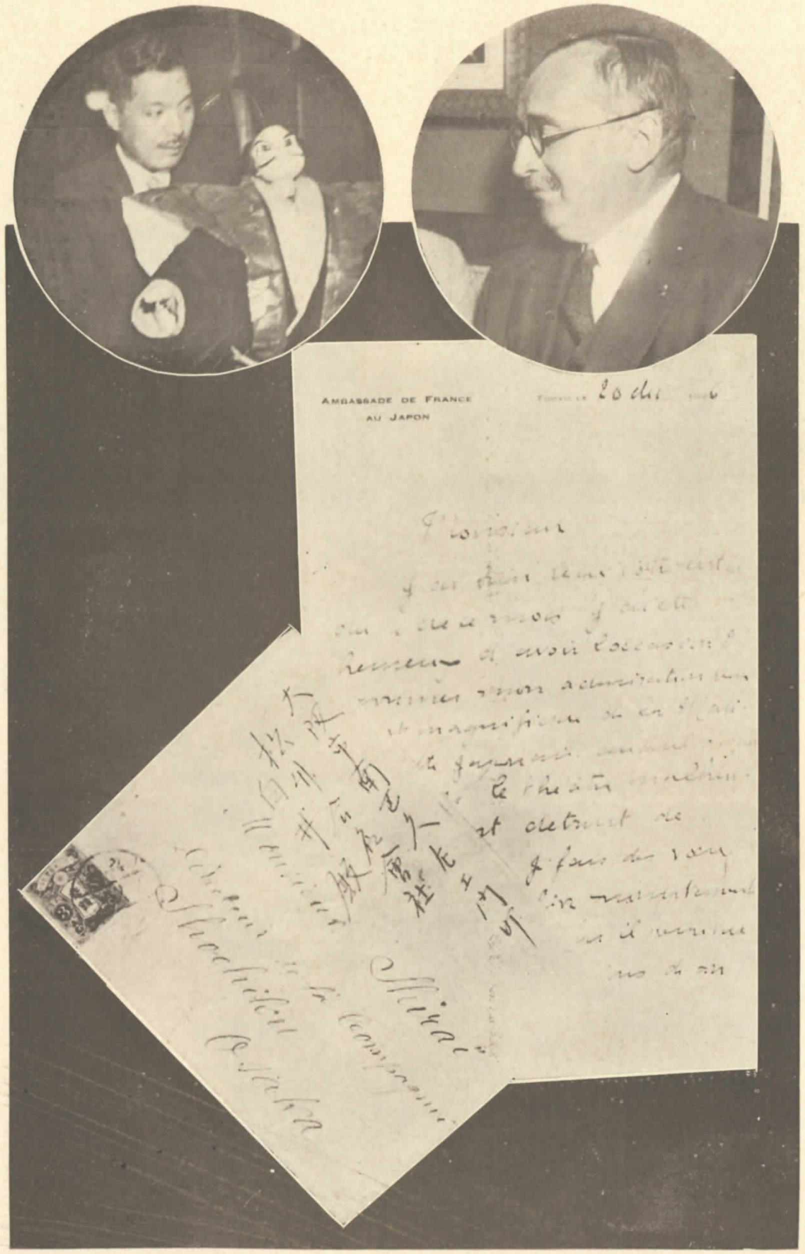
浪花座初春興行へ出勤の
嵐巌笑の近影

（上）は中村魁車の淀君
中座初春興行「關ヶ原」

（下）は林長三郎の春藤新七
中座初春興行「敵討襤褸錦」

中座初春興行出勤の二俳優の趣味生活

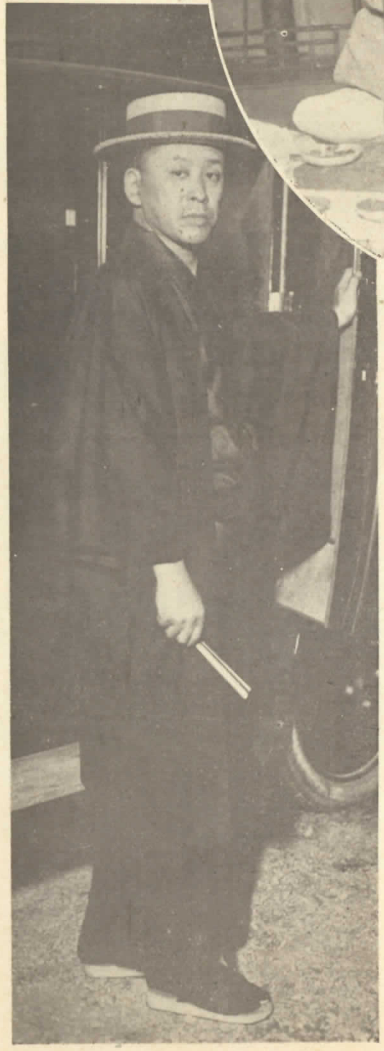
（上）は市川右團治の點茶の嗜み　（下）は愛藏の鳴物を手にした嵐吉三郎



佛國詩人大使クロウデル氏より松竹白井社長に贈られたる書簡

右はクロウデル大使・人形を手にせるは白井社長（本文參照）

久方振で
中座初春興行へ出勤の
片岡我童の近影



(圓)は角座初春興行へ出勤の
花柳章太郎が趣味の人形造りに餘念のないところ

(左)は角座初春興行へ出勤の
喜多村綠郎の外出姿

奉悼

松竹座
電話南（自六二七一 至六二七四）
前賣切符専用 三一二七

浪花座
電話南（一四五九 二七〇九 五七八三）
前賣切符専用 六三六一

中座
電話南（一一四六 一五一一 三八二二）
前賣切符専用 一二七九

角座
電話南（一一〇七 五五三〇）
前賣切符専用 六九五六

辨天座
電話南（二七八 八四二）
前賣切符専用 六九七八

朝日座
電話南 三一七

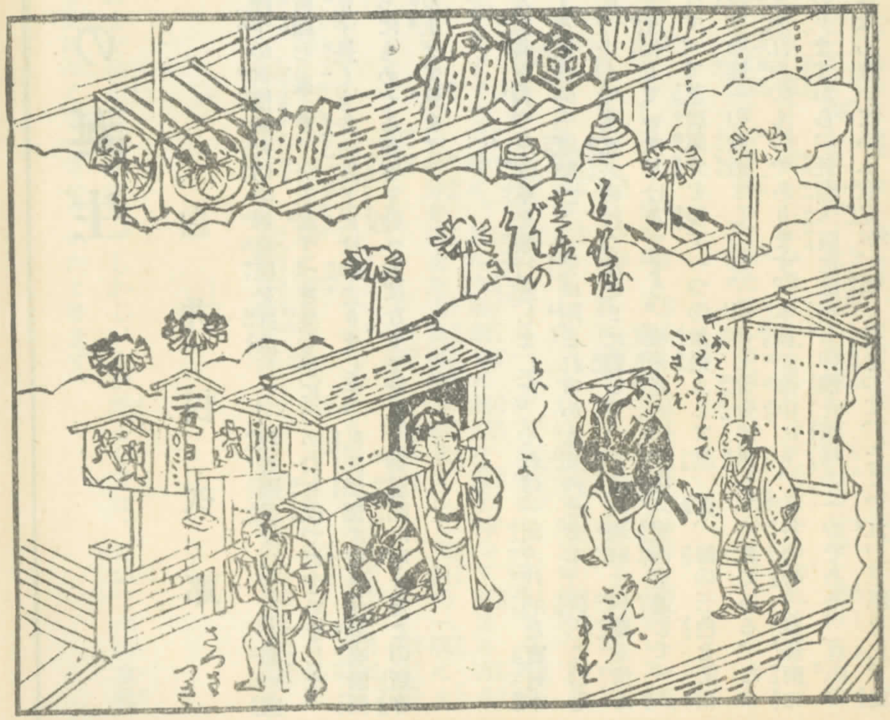
樂天地
電話戎 三五三三

辨天座初春興行
文樂座の人形淨瑠璃
舞臺面の（上）は合邦（下）は尼ヶ崎の段
（圓）寫眞の上は津太夫 中は土佐太夫 下は古靭太夫

月刊・演劇研究・雑誌

道頓堀

初春號
第五輯



寶暦十年辰正月刊行『役者段階子』大阪巻より

折紙附の御贈答品は

松竹共通觀覽切手

この切手一枚で全國何處へ往つても松竹經營の劇場のお芝居が見られます。

お手頃の種類

一圓・二圓・三圓・五圓
十圓・十五圓・廿圓・五十圓 の八種

御觀劇代のほかに御召上り物、各賣店の御買上品、本家茶屋直營の案内所等一切の御支拂に通用致します

様式は十圓券は一圓券十枚、一圓券は二十錢券五枚にて離れるやうになつてゐますから至極御便利です。

お手近の發賣所

大阪南區久左衛門町八 松竹合名社（電南一二四〇・六六八五）
大阪道頓堀 角座（電南六九五六）
大阪東區高麗橋心齋橋筋 プレイガイド（電本三三〇九・三九九五）
京都市河原町蛸藥師上ル 松竹合名社（電中二三五二）

其他各座にては三日前より場席の取れる指定番號入前賣切符も發賣してゐます

浪花情緒の誕生

白井松次郎

大正十五年十二月中旬、恐れ多くも　先帝陛下の御惱御大切の御模様を拜承して、我等國民はひとしく御憂慮申上げ、只管一日も早く御平癒あらんことを祈願し奉り、全く爲すべき業も手につかぬ有様でございました。同月二十五日只管祈願し奉りし御平癒も見ず畏くも先帝陛下には神去りまして、私共恐懼に堪えず悲嘆慟哭して止まざる次第にございます、かうしたうちにもめぐる新春を迎へねばなりません、御諒闇に明けたこの新春を迎へましたに就て私の劇界に對する小感を申上げて見ます。

×

本年劈頭の大阪劇界に取つて、一つの大きな意義を持つた改革を斷行致しました。それは一面近代的な實質本位から云へば、或は無價値な無用の長物に對する私共の「道樂」と一笑に附されるかも知れません。併しこれを全てが傳統的な劇場裝飾とか、又は演劇史的に、少しでも私共の行つたことに對して、正當な理解と判斷を惜んで下さらない方ならば、そこに何らかの意義を見出していただけるでせう。從來私共の劇場（東西を通じて）多く歌舞伎劇の場合、引幕とか或は一文字、又はすべて芝居氣分を現す一つの象徴として黑、茶、綠の三色を使用して來ました。この色彩は殆ど芝居情緒を表現する唯一の象徴としての、使命を充分に果してくれてゐる、なつかしい氣分の漂つたものです。だが、これは元來江戸のものであります。本號記事中にも、木谷蓬吟、食滿南北兩氏が、定式幕に就て語つてゐられる如くでありますから、此際大阪には特有の浪花情緒の一つである、五座の櫓の並んだ道頓堀を象徴化したものがなければならないといふ意見が、偶々持上つて、そこで江戸三座を色で表

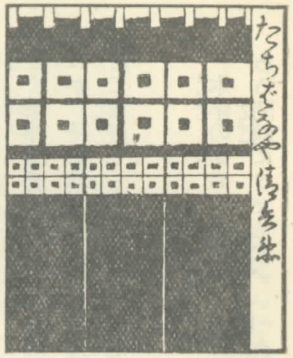
した三色幕を當地では全廢し、藍、臙脂、紺、茶、綠の五色、即ち浪花座、中座、角座、朝日座、辨天座と、傳統の櫓を持つた劇場を一括した五色幕を創始することに致しました。定式幕が出現した當時の意義を繼承してこの改革を行つたのであります。定式幕とは一說に定引幕とも云ふと云ひますが、この方が妥當かも知れません。江戸ツ兒はヒの發音をシと云ふ所から、定引幕を定式幕と云ひ傳へて來たものではないかと思ひます。

×

かうしてその結果の御批判は、これから皆様に仰ぐとしても、兎に角、大阪には大阪特有の色彩を創始いたしました。これが浪花情緒の一つとして永久に保存されるなら、私の本懷これに過ぎません。しかし、こゝに一つの「浪花情緒の誕生」に前後して、皆様と共に哀惜に堪えぬ問題が起りました。それは御靈文樂座の燒失です。人形淨瑠璃文樂座の名は、東西は愚、海外からも追慕される日本固有のたつた一つの古典藝術であります。私はこの文樂座を必ず復興さすべく皆様に誓つておきます、と同時に、眞に大阪劇界に熱烈な愛を持つて下さる方々に、どうか、この文樂座がもう一度、あのいみじくも床しい氣分を湛えた古典藝術の殿堂として大阪の一隅に永劫に存在し得る樣に、私共と一所に御考へ下さらんことを切望いたします。本年の初春興行は、ともかく道頓堀辨天座に引越し興行をいたしました。これと申しますのも、不幸中の幸と申しませうか、古來の人形衣裳等が全く無事であつたが故であります。あの出火と同時に文樂座が消滅期に達したかの如く云はれた方々もありましたが、それは謬見であります。私は何百年以前から今日迄現存した人形淨瑠璃が、今後も何等かの藝術的方面に於て發展して行くものと信じて止みません。

×

本年の始めに私の申しあげたいことは、他にまだ澤山ございます。しかし、この際としては、この二つの意義ある問題にとゞめて、いづれ號を逐うて皆樣と共に深く考へさせていたゞきます。



道頓堀

成瀬無極

「中座」が道頓堀と改題せられて新春から華々しく世間へ出るやうになつたのは誠に祝す可きことである。東京の「歌舞伎」に對して「中座」は餘りに狹い題名であつた。「道頓堀」となつて始めて關西の劇壇及び廣く演藝界を代表するに應はしいものとなつた。定めて内容も追々刷新せられ、範圍も擴張せられることゝ思ふが、私の希望としては、本誌は飽までも「演劇」中心のものでありたいと思ふ。

それは歌舞伎に限る必要はなく、新劇でも現代劇でも差支無いが、映畫の方面まで雜然と組み入れることは考へものだ。今日、映畫に關する雜誌は演劇のそれに比して倍以上もあるであらう。それほど映畫の勢力は演劇の方へ喰ひ入つて來たのだ。關西唯一の純演劇雜誌とも云ふべき本誌の内容を餘りに雜駁なものとはしたくない。映畫を全然排斥するにも當るまいが記事や寫眞を特に嚴選し、藝術的價値のあるものに限りたいと思ふ。飽迄演劇中心であり、一二篇は研究的な重味のある記事を必ず載せるといふやうな點で特色を作つた方が販賣政策から見ても悧巧なやり方だと考へられる。假へば「歌舞伎」に連載せられつゝある青々園氏の「京阪歌舞伎年代記」のやうな記事はそれだけで一つの呼び物になるだらう。また、演劇雜誌の特色の一つとして看客のために投書欄を設けるのは適切であるが、俳優も亦かゝる機關を利用して素顔で看客、否讀者に見えるやうにしたい。「歌舞伎」所載の左團次の「蔦の門」などは筆者に親しませると共に劇術史上有益な資料を提供するものと思ふ。また同じ號の、猿之助の筆に成る「研辰の手紙」の如きは洒脱輕妙で頗る氣が利いてゐる。要するに、研究家、批評家、作家、看客、俳優、それに經營者までが顏を出して、毎月眞面目な趣味のある談話會を催す心地で編輯せられゝば結構である。どの意味でも「保存」に値するのを作るのが理想でなければならない。「理想」であるから必ず毎月それが實現せられるといふわけにも行くまいが、筋書代りに、又は幕間の退屈凌ぎに頁をめくつて、歸りには場へ置いて來ると云ふやうなものにはしたくない。「電車文藝」式のものを作るのもジャーナリズムの一つの方針かも知れないが、「道頓堀」の立場はそれとは違ふだらうと思ふ。

以上は面目一新の本誌に對する一個の讀者としての希望に過ぎないが、今度は看客として二三の感想と註文とを記さう。道頓堀といふ、あの獨特の色彩を持つた、濃厚な空氣の漂ふ、華やかな一區劃が大阪に殘つてゐるといふ事を私は嬉しく思ふ。中座、浪花座、角座といふやうな劇場が櫓を並べて旗や幟に包まれ、美しい繪看板を戴き、向ひ側には芝居茶家の軒燈が點りその裏を水が流れ、向ふ岸が宗右衛門町になつてゐるなどは何と云つても廣い世界にさう例のある圖取りではない。遊蕩的氣分と云つてはよくないが、耽美享樂の別世界がともかくもあすこに形られてゐることは事實だ。そして道頓堀の持つ魅力が千日前や新京極や仲店の持つそれと異つてゐるのは何故であらう。それは傳統的美の有無であり、特に歌舞伎のそれが染み込んでゐる點で前者は一種獨特の味はひを保ち微妙な雰圍氣を薰醸するのだと思ふ。江戸の猿若町に中村市村、河原崎の歌舞伎三座と操り兩座とが軒を並べ役者連の住ひもあつて特殊の一廓地を成してゐたのとは比較にならないが、兎も角もあの通りへ入ると何となく浮き浮きしたやうな、そして懷かしいやうな心地になるのは全く華やかな傳統が生み出す牽引力だと思ふ。(この意味で文樂座を是非とも御靈の地に再建したいといふ座主の心もちにも十分同感が出來る)それは新開地には到底求められないものだ。

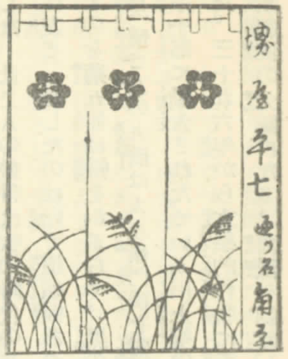
ところで・傳統を離れてみても「芝居の區廓」といふやうなものが少くとも大都市には欲しいものだと思ふ。劇場そのものが完全に一つの假象の國を形づくるためには之に調和した環境を作ることも亦必要になつて來る。帝劇と警視廳とが並んでゐるなどはどうも面白くない。劇場のすぐ傍を電車が走るなどは、氣分を壞すどころではなく、直接に鑑賞を妨げるものだ。都市の發達上自からういふ不都合が生じて來たのであらうが、新に區劃整理といふやうな事が企てられる時にはかういふ點も顧

慮せらる可きだと思ふ。華府が純粹な政治都市として全く獨特の世界を形づくつてゐるのは、見る眼にも快よい。猿若町が一廓を成したのは遊廓が隔離せられたのと同じ樣な意味からであつたのだが、吾々は全く別の意味から「芝居街」または「芝居通」を持ちたく思ふのである。この點で道頓堀の存在は私を喜ばせる。伯林なども、劇場の在り場處が今では一般に極めてよくない。ラインハルト系統の「獨逸座」「カムメルシュピーレ」「大劇場」などは最早中心を外れた荒廢しかけた部分に在つて出入の氣分がよくない。（新に出來た「コメエディエ」はずつと西部に位するやうだ。）「民衆座」の在る「アレクサンデルプラッツ」の如きはハウプトマンの「鼠」でも分るやうに今では貧民窟に近く、芝居の歸り途が不安に思はれる程だ。その爲めにどれだけ享樂的氣分が亂されるか分らない。

最後に劇場内の設備の點であるが、二三時間位の興行を普通とする歐米の劇場でも、看客の休憩所、散歩場、所謂Foyerは競つて善美を盡してゐる。一つには綺羅を飾つた淑女連に觀せ場を提供する意味でもあらうが、ともかくも、日本の歌舞伎劇のやうに長時間の興行法を取るなら看客席の設備は勿論、周圍も出來るだけ餘裕を見て、ゆつくり寛げるやうにして欲しい。徒らに看客席を廣くとる詰め込み主義は不贊成である。少々狹過ぎる位で賣切れ札を出す方が、大きく取つて穴が明いたり割引券を濫發するよりも、第一體裁が宜からうぢやないか。また、歌舞伎劇の將來を考へてみても、大劇場主義一點張りでは持てなくなる時期が來はしまいかと思はれる。

新春の出し物に就て書く代りに私はこんな雜感でお茶を濁すことにした。

・關ヶ原・
福助の石田三成
中座初春興行上演



道頓堀の今昔

高安月郊

昔の道頓堀の圖を見ると、西の端に筑後、（通稱大西）それから中の芝居、角の芝居、角丸　豐竹、竹田と六座並んで、筑後と豐竹は人形芝居、延享、寛延頃は歌舞伎より盛であつた。

それは筑後の方で近松、竹田等、豐竹の方で並木等が毎回新作を出して、歌舞伎にまで移されたのもある位、先づ作者に創作の才のある人々があつたのが第一の長所で、其頃の歌舞伎にはそれほどの作者をもたなかつた。次に淨瑠璃には義太夫始め名人が續出し道行などはそれ丈けにまねしたので道行本が出、全體でも讀む爲の細字シラミ本、語る爲の七行、五行本が出たが、歌舞伎では讀むに足る脚本も無く、役者の物眞似は行はれても、鸚鵡石の出たのはずつと後である。そして人形つかひにも辰松吉田など新工夫に當たものがあつて、人形だけに思ひ切つた動作が時の單純な見物を驚かせた。それが明和頃から段々衰へたのは、作者の缺乏、半二位では技巧の末に馳て、根本の情味を濫用し、太夫の節、人形のつかひ方も行きづまつた爲もあらう。見物の趣味も追々複雜になつた爲もあらう。役者に上手が續出して來た爲もあらう。狂言作者に正三、五瓶と稍才能ある者が出た爲もあらう。明和二年に豐竹座は歌舞伎に變つて、人形は北堀江へ移つた。竹本座も根城を離れて、道頓堀は歌舞伎ばかりになつた。

明治の始めでは大西は戎座となり、中、角と三座が大芝居、役者では先代延若、中村宗十郎が戎と中、先代右團次が角に立

籠つた、八年頃の番附を見るご、先代多見藏が中央に据えられてあるが、最早老年で、達者過ぎる腕も、時代に伴はず、七賀助が勸進元でも、老役で、座頭役に向かず、先代璃寛が大關でも、粘り過ぎて、味のある藝で無かつた。東から先代彥三郎が下つたのは、江戸式藝風を輸入したが、も一つ効果を留めるまでも無く、十年に土に入つた。それご入れ代りの樣に宗十郎が東上して、丁度同じ役所を團十郎等を相手に練つて歸つて、時代物でも上方傳來の臭氣を脫し、活歷式や、近世史の人物になつたのは、川竹に清新の流れを灑いだ。右團次も多く新作を出したのは多ごすべきものであるが、作者が能進、諺造位で、默阿彌ほごも土地の特色を捉へず、多く創作こいふより脚色であつたから、痕跡を留めなかつたが、兎に角新脚本の續出したのは今より盛で、延若は多く舊作に依つたが、それでも散髮になつた事もある。彼等に次いで先代雀右衞門、橘三郎、福助、翫雀、駒之助、花形では生代の延三郎、璃笑、飛鶴、壽三郎、三五郎など、女形は既に乏しく、多賀之丞、三右衞門、蘆鴈、正朝みてし位、老役で琥珀郎、荒五郎、八百藏ご揃うてゐた。恐らく幕末より盛で、歌舞伎劇が傳統の惰力を緊張したご共に、其中から一歩を轉じ樣こしたのである。

×

延若、宗十郎の死は團十郎、菊五郎の死ほご打撃にならず、同じ頃歸つた我童は宗の意氣を次ぎ、鴈治郎は二人の藝風を調合した。此二人の競爭は次の時代の花くらべであつた。そこへ二十五年に菊五郎ご左團次が同時に乘込んで來て、鴈は菊ご、我は左ご一座したのは殆ご道頓堀あつて以來の競爭、私は芝居茶屋で見てゐたが、寸地も無い位つめかけた群集を附人が突飛ばすのを菊五郎は帽をかぶらず、黑の羽織袴で、例の手つきで制しながら入つて來た。もう頭は薄く晩年の冬枯、然し舞臺での戾橋ご左の丸橋は太左衞門橋を震動した。然し其特長が認められたのは二度目に來て、權太ご清心を出した時である。

宗十郎に勸告されたこいふ川上等の新派が起つて　成美團が朝日座を根城にし、既に歌舞伎派に迫つて來たのは一異彩であつた。三十五六年から文學的作物に手をつけて、未來を占めるかご思ふご、自然主義の弊ご、先輩の凋落に行きつまつたが後の新劇團の先驅になり、舊派を刺戟したにはちがひない。

其後樂屋より多く見物が變つた。もう横堀から船に乘つて、芝居茶屋の裏へつけ、幾度も衣裳を着替て、一日を見たり、見せたり、飲食で過ごす人は二昔も三昔も前、夜の明けぬ中から車を走らせて、木戸で呼ぶ茶屋の名にぞつこし、歸りにも三味線の音が耳につく樣な氣持は一昔前。役者の紋のついた糸巻をうれしがる縫物屋通ひの子は斷髮洋裝、船場でも贔屓役者の出入する家は稀になつたこいふ。役者の顏より芝居を見る樣になつた、飲食の肴にするより眞面目に藝術を味はれんこする樣になつた。耳目の娛樂より生活の勞を忘れる爲になつた。現實の模寫より現實を徹した美の快感を求める樣になつた。歌舞伎劇でも唯古い型こして辛抱しては見ず、新作でも、總て新に見直ほす樣になつた。眞に藝術こして好いもの、それは急に一般に分らずこも、おのづから選ばれてゆくのである。道頓堀の水は餘りに混濁、洗練の時が來た。人形淨瑠璃の盛期に對し、明治初年の盛期に對し、人形より深い人間の魂、役者の顏揃ひより作品揃ひで、眞に盛な時期に入る樣に望まねばならぬ。

×

今度文樂座が燒失の爲に人形淨瑠璃を辨天座でするのは豐竹座の舊地へ戾つたので、矢張緣があつた。中座では「關ケ原」「大安寺堤」こ「椀久」が出るこいふ。「末松山」は寶永五年豐竹座で出したが作者不明、私はまだ今度のご比較して居ぬからごれ丈け轉化されたか判斷出來ぬが、其外でも「元日金年越」、「狂亂笠」、「由來の十德」なご色々にあつかはれたのは、唯の色情狂も藝術の藥で生命を續けた。「繿褸錦」は元文元年、繪模樣を主こした文耕堂がいつもの反對に陰慘な色を出したのが不思議に其塲丈け出されるのはまたその反對色の爲もあらう。「關ケ原」は泥に埋もれた石田の骨が出た時、それを洗つて　魂を吹込んだが、始めは帝國劇塲、次いで京の南座、其後神戸、名古屋、東京の歌舞伎座なごで出した、前田利家の死から始めて五幕八塲であるが、今度はごれ丈け、兎に角小人視された汚名を清めてあの戰ひの裏面こ、淀君にも同情すべき所が見え、それも大阪丈けに一層深かつたら喜ばしい。

人形淨瑠璃と道頓堀

——光秀の人形に贈る——

木谷蓬吟

文樂座の人形淨瑠璃が、御靈社内の本陣を失うて、當分のうち道頓堀に移つて、東の端の辨天座に、九枚笹の櫓幕を上げると聞いて、道頓堀と人形淨瑠璃の關係を、記憶から喚び起して見る。

×

×

虎屋や井上の古淨瑠璃の昔は措いて、新派義太夫節を唱へ創めた竹本義太夫の旗上げは、道頓堀の西端、西の芝居である、後に竹本座、筑後座とも云ひ、現今の浪花座のあたりに當る。薩摩治良右衛門が大阪城廓の十七ケ所の櫓下を勤めた故例に倣うて、大板に『太夫竹本義太夫』と大書して、芝居の櫓の下に立てた。これが『櫓下』なるものゝ中興であつて、由來久しい古式である。

これに次いで、義太夫の門人若太夫が、師の了解を得て、別に豐竹の一派（義太夫の壯音に對しこれは美音を基調とした一流）を起し、師の西の芝居に對し、道頓堀の東の端に櫓幕を張つた。東の芝居と稱し、後に豐竹座又は若太夫座と呼んだ、現在の地に當てると、日本橋南詰を西へ一丁餘りの場所となる。

序に云ふが、今度文樂座の移つて來た辨天座は、其昔、からくり專門の竹田の芝居の跡だと記憶する。

道頓堀に、人形淨瑠璃の全盛時代を築き上げたのは、享保から寶暦に至る四十餘年の間で、東に豐竹座、西に竹本座と、兩々相並んで不斷の競爭を試みた時代である。私は假に『出雲時代』と稱してゐる。それは竹田出雲が興行主として作者として驚く可き大活躍を試みた一期間に屬し、作者も太夫も三味線も人形遣ひも、名人輩出の盛觀を呈したものである。

この當時の狀況を『淨瑠璃譜』によつて窺ふと、

『此頃 操 流行して歌舞伎はなきが如し、芝居表は數百本の幟、進物等數を知らず、東豐竹、西竹本と相撲の如く、東西に別れ、町中近國ヒイキをなし、あやつりの繁昌言はん方なし』

『竹豐故事』には又こんな記述が見へてゐる。

『あやつり繁昌し、東は西に負けまじ、西は東に勝らんと互に勵み出來、益々芝居繁昌し、淨瑠璃の作者種々樣々の趣向を工み出し、道具立衣裳に金銀を惜まず美麗を盡くし、町中の若い衆、豐竹講、竹本講と號し毎月掛け錢を集め置き、替り淨瑠璃の節、進物の入用に仕給ふとかや、扨々奇特千萬なる御心中、益々信仰なさるべし』

これで、當時の盛況の、說明に代へて置く。

歌舞伎は顏色なし……とまで、竹豐二座の隆盛は殆ど絕巓にまで達した。蓋し此盛運は人形淨瑠璃の著るしい歌舞伎化であつて、寧ろこれあるが爲に人形淨瑠璃の失脚を速からしめたものだとも考察する（私見は省略する。）果して寶暦の中頃から川竹の秋風は 操 幕を冷たく吹きそめ、豐竹座を先きに、竹本座も相次いで、道頓堀から退轉するの止むなき否運に陷ちた。そして歌舞伎が之に代つた。

×

今春、文樂座の道頓堀移動興行は　竹豐二座の退轉後、百三四十年ぶりの久濶である。樂屋に置かれた十段目の人形、三日天下の明智光秀！その魚の如き瞳にも、多少の涙なき能はずであらう。

諸家の感想と希望（順序不同）

◇本年度に於ける最も印象と感銘の深かつた東西劇壇の狂言と俳優に就て。

◇今後の演劇に對する御希望と所感。

毎號ながら御叮重に御回答下さいまして誠に有難うございます。好評につき毎號とものつゞけて行きたいと思つてゐます。倘今後共に御執筆の程偏にお希申上ます　（姥谷生）

永田龍雄

◇隨分見たが、さて考へて見ると片ッ端から忘れてゐる。小劇場の「役の行者」それから小さなものでは「奈落」はとにかく覺えてゐる三月の歌舞伎座の楳茂都君の「羽衣」の天女の舞はいゝものだつた。役者では羽左衛門と秀調が僕はすきだ、理窟ぬきにして前者などは或る歌舞伎の味をもつてゐるからだ。これは平素からすきなので、今年に限つたわけではない。記憶のわるい僕だからゆつくり考へればまだ出てくるであらうが、まあことしの劇はこのくらゐである。

◇味のある新鮮なもの、上演を希望する、場代のやすいことも要求する。

富田泰彦

◇鴈治郎、吉右衛門兩氏の「石切梶原」の異つた演出。「菅原」車曳の場の錦繪のやうな舞臺面——

井上正夫氏の「酒中日記」など。

◇歌舞臺趣味を滿足せしむる古劇の復興、鴈治郎氏の典型的な舞臺、福助、魁車兩氏を中心とする型物劇の上演など。

津村京村

◇大阪の方は澤山見て居りませんので知りませんが、東京では井上正夫一座の「或る畫室の主」が矢張り印象を止めたものだつたと思ひます。

◇何んと言つても大多數の見物を有する大劇場の方に、より新時代的思潮の浸淤を希望して止まないものです。新劇運動が小劇場のみの手に依つて行はれるべきでは無いと思ひます。

田中芳哉園

◇東都のは見なかつたから知らず、大阪では

鴈治郎や、中車や、幸四郎で演じた菅原と吉右衛門の石切。

◇極めて新らしいのと、極めて古典味のあるのと、際立つた二つを奬勵したい、なま半着なのは劇を毒し觀客を惱ますものだ。

井東憲

◇「礫茂左衛門」——井上正夫一座

「東京の眠る時」——同——

築地小劇場、心座等のもの。

◇新らしいプロレタリア劇の出現を望みます全國的に、凡てのところに、小劇場運動の起る事を希望します。

野島辰次

◇築地小劇場での「毆られる彼奴」や「大鹽平八郎」など、いろんな意味で印象の深かつたもの。歌舞伎の方は、取立てゝ云ふほどのものを觀てゐませんので……。

◇歌舞伎——徒らに盛り澤山の愚を止め、もつと實のあるものだけを上演して、誰にも容易に觀られる興行法が採れたなら結構だがと思ひます。新劇——飜譯劇から創作劇へ、もつと活潑に歩き出して貰ひたいものです。

井手蕉雨

◇今年は半ば病臥の爲め、比較的筆硯に親しむの機は得ましたが、外出不可能で芝居は吉右衛門丈の「石切」をみた丈けです、それを唯一の印象深かりしものと致します。大正十五年中で最も悲しむべき出來事は「文樂」の燒失した事です。

◇此問題は非常に大きな、そして廣い〳〵ものでで數行の文字にあらはし切れませぬ。私は今年はラヂオドラマの研究に沒頭して他を顧るのいとまがありませんでした。猶ほまたよく考へて見たいと思つて居ります。

顯考與一

◇鴈治郎の新作と云ふものが常に氣にかゝつてゐる。從來のそれは二度と見る氣がしない「あじろ舟」なんかいゝ方だが、それでも顔見世の上演は鼻につく、もつと文壇の大家その他に廣く脚本を求めて、優の老役を飾るべく「間に合せ物」を止して貰ひたい。

水谷幻花

◇餘り感服したもの、無いのは遺憾でしたが併し菊五郎の舞踊劇だけは、皆んな感銘しました。

◇歌舞伎劇に大して希望もありませんが、新劇はお若い者のみなれらはず、中爺さん大爺さんをアッと云はせるものを、精々お願ひしたいと思ひます。

中山生

◇鴈治郎の「室津の歌」を擧げたいと思ひます、いつも鴈治郎に書卸されるものは、大概義理と人情とに絡んだ心中物が落ちです。それをすつかり目先を變へて、大詰にきたないをそゝりました、つまり常套を破つた意外の鴈治郎を見せて繩付にするなどは大いに興味點に於て印象と感銘とがありました。

◇何の持合せもないといふ事にしておきます從來の歌舞伎や新劇の上から打算しまして。

齊藤龍太郎

◇十二月の歌舞伎座に於ける「森有禮」は、最近最も感銘の深かつたものです。小山内氏の老功な演出がまだ腦裡を去らずに殘つてゐます。殊に序幕公議所内議場の如きは、本年度に於ける特筆される可き芝居を作つてゐま

した。俳優としては、左團次の森有禮が印象に殘つてゐます。

◇歌舞伎が今後も現在のまゝの狀態で續けられて行つたら、やがては滅びてしまふにちがひない。歌舞伎の本質は顧られないで、その形骸のみが殘されてゐる有樣です。若手の人人は、そこを考へて然るべきです。ノホホンとしてゐると、いまに民衆に置いて行かれてしまひます。惰氣に滿ちた芝居內の雰圍氣から脫出して、自分の敎養に努めるのが目下いちばん肝要なことだと思ひます。私は歌舞伎を救ふものは、若手の敎養された力以外にはないと思つてゐる。

豐岡佐一郎

◇一 角座「磔茂左衛門」主演井上正夫氏

二 中座「風鈴そば屋」主演吉右衛門氏

三 國民座「地藏敎由來」主演森英次郎氏

四 同「月光の下に」主演三好榮子氏

五 顏見世「毛谷村」梅幸氏

◇改めてみつしりと書かせて貰ひませう。

畑耕一

◇菊五郎氏と猿之助氏の演伎に敬意を拂ひます。

◇戲曲の藝術價値と興行價値とは、決して相反馳するものではない筈です。難問題にはちがひありませんが、それだけに缺點を考慮して進んで頂きたいと思ひます。

桂田曉香

◇池田氏の男達ばやり、眞山氏の江戸城總攻め、小山內氏の森有禮、以上脚本演出共に本年度の收獲と云つてよろしい。又澤正の白野富岡先生も演出脚本共によく、金子氏の劍なども演出では惡くなかつた。吉右の盛綱は月並だつたが、籠釣瓶は脚本はくだらないが、新らしい解釋の演出で拾へると思つた。

◇しつかりした指導者附きで、青年歌舞伎が欲しい、そして埋れた院本物を掘り起して行つて欲しい。

それから新劇の演出者に——リアリズム一點張りから少しぬけ出して頂きたいと思ふ。どんな美くしい戀人でも毎日見てゐればいやになる——。

木蘇穀

◇六月松竹座に上演された藤森成吉氏の「磔茂左衛門」にはその際立つた內容の光輝と、主役を勤めた井上正夫の自然な中に深味を表現する優れた藝にすつかり感激した。

◇歌舞伎劇にしろ新劇にしろ、優れた新作をどん／＼上演してくれるといゝと思ふ。飜譯劇や、古典的な歌舞伎劇も惡くはありませんが、演劇の新生命は主としてそれによつて助長されると思ふ。

濱村米藏

◇好評だつた築地小劇場の「愛慾」を見なかつたのを殘念に思ひます。私の見たうちでは歌舞伎座の「紙治」、帝劇の「入谷の寮」築地小劇場の「役の行者」「聖ジョウン」等、俳優だけに就て言へば、菊五郎、友田恭助の兩氏

◇これは、主として見物に對する註文ですがこれからは、歌舞伎劇を古典として取扱ふこと、そこに今日の生活がないからといつて亂暴な難題を持ちかけないこと、又新劇に對しては、もう變なハンデキヤツプを付けないで嚴正な態度で向ふこと、あまやかしは立派な今日の演劇を生む所以でないと思ひます。

國枝史郎

◇左團次一座の「尾上伊太八」でした。充分に手に入つた得意の藝を思ふまゝに發揮し、芝居といふより「眞實」そのものを見せられた感がありました。

◇漸進的に新作を上演するより仕方ありますまい。作者を驅つて現在の演劇に上演可能の臺本を作つて貰ふことですれ。レーゼドラマで無くて。

河野義博

◇「森有禮」「合邦辻」の左團次

「風鈴そば屋」の吉右衛門

築地小劇場の「役の行者」など。

◇十年一日の如く創作劇の上演を望んでゐます。その點で去年などは曉光の見へた年と言へると思ひます。今年は一層この傾向を深めたいものです。それから新劇壇にも次第に悶が甚だしくなりました。これをなくしたいと思ひます。

江澤春霞

◇歌舞伎狂言にも、印象と感銘の深かつたものはないでもありませんが、其の最も深かつたのは、東京では正月に邦樂座、大阪では二月に中座で演じた、新國劇澤田正二郎一座の「白野辨十郎」であります。楠山君の譯も可いが、澤田の演出も佳く、大詰洛外金光院境內に、己の戀を淨明尼に向つて打明け兼ねるせつない胸を懷いて、トボ／＼と僑居に歸る辨十郎の憫れな姿は、既に一年、今猶深く眼に殘つて居ます。澤田もこんな事をすると好い役者で、丙寅劇壇第一の收獲だと思ひます

◇歌舞伎狂言の型物の佳いのと、同じく二番目物の面白いのを見て、舞臺に向ひ頭を低げて見たいと思ひます。これを吉右衛門に、所作劇を三津五郎に期待します。

山崎紫紅

◇本鄕座、吉右衛門と菊五郎の「忠臣藏」とながら團十郎と五代目菊五郎の盛時の觀ありこんなことを喜ぶのは老境に近づいたかと、少し悲觀の心持もいたします。

◇新らしいものを何んでもやること、歌舞伎劇の型を尊重した演出。

北村喜八

◇さて申し上げる程のこともありません。私の見たもの丶うちでは、井上正夫一座の出し物を面白く拜見しました。個々の俳優については、舊劇畑の名人型と言はれる人が、やつぱり藝がうまいと思ひます。

◇現代人の生活と深い交渉のある劇が、盛んになるべきであり、又、盛になつてゆくだらうと思ひます。

白石實三

◇テクストが、これだけよくなつてきたのですから、よい俳優が、もつと／＼出てほしいと思ひます。

阪本清雄

◇關西に住むと東京の劇壇を見る機會が尠いので最も印象の深いものといふ事には苦しい記憶の鞭韃を要する。强いて云へば近い過去であつただけ中村吉右衛門と大谷友右衛門の「風鈴蕎麥屋」（中座十一月興行）の又七家の場の輕いやりとり等であらうか、新劇に對しては遺憾乍らお答へする何物もない。

◇舞踊を主としたもの（特に茨木とか船辨慶とか）、さなくば極めて輕い味の新作ものが殘つて行く、その外ではぐつと自然的な新劇其中間にある世話もの、所謂新派ものは日に

日に顧られなくなつて行く、同時に西洋ものの飜譯劇も飽きられて行く、築地の小劇場が日本作家のものを上演した時の方が期待を多く持ち得るのがこれを證する。今後若いそして理解のある俳優がもつと社會と澤山の交渉を持ち、もつと覺醒していゝものを上演すること、それから時折は〇〇一座が離れて芝居をして見ること等が必要ではなからうか、希望と云つたところで實現されそうにないものですから、これは又の機會に……。

大木雄三

◇藤森成吉氏作「礫茂左衛門」など。しかし井上の演技には感心しませんでした。

◇新劇團がぞくぞく現はれることに今後の期待をかけます——とだけ。

鈴木善太郎

◇藤森成吉氏作「礫茂左衛門」と茂左衛門に扮した井上正夫（特に今年七月東京淺草松竹座上演の場合を指す。大阪角座の上演、京都南座の上演はいろ〳〵の點で不備の點あり。）

◇マンネリズムを離れる事が歌舞伎劇にも一番大切な事だと思ひます。

大久保作次郎

◇中村吉右衛門の「石切梶原」を白眉とします。

◇京都の劇壇をもつと賑かにしたいと思ひます、中村鴈治郎もせめて一年に二度は來て下さい。

高原慶三

◇御質問の範圍が少し廣過ぎるので回答のしやうに困りますが、小生が純大阪人であり、多少大阪の劇壇にかゝわりのある關係から始終鴈治郎、福助、魁車級の次に來る劇壇の主流が那邊にあるかゞ念頭にありましたが、八月伎藝座の公演で「鯨波夢の松風」を見て、政治郎を見出したことは大きな感銘です。又ひさし、延太郎、右若といふやうな女形が相當見込のあることにます〳〵前途に光明を感じました。

◇政治郎を座頭に、扇雀を書出しに、成太郎を姿形にひさしを若女形に、延太郎を二枚目に、右若を輕い女形に　莚藏卯之助を老役にした座組を一つこしらへて、年に二三回正統的な歌舞伎劇をやらせて、いゝ指揮者のもとにミッチリ勉強させたいと思ひます。無論その節には最貧の引倒し風な連中の狩集めなんかやめてもらつて……。

小牧近江

◇全然知られなかつたマルセル・マルチネのものが一躍築地小劇場で問題となつたこと。これには五年の歳月がかゝつてゐる。

◇何故俳優が「勅選」になれぬか？、僕はいつもこのことを考へる。それには俳優そのもの、藝術家としての自覺が先づ第一。

小寺融吉

◇見物した數は少ないが、今でも忘れず、明日も忘れないだらうと思はれるのは八月歌舞伎座で見た文樂の人形です、特に玉藏、榮三文五郎の紙治は、玉藏歿してもう見られぬかと思へば實に殘念です。

◇若い作家の新作をドシ〳〵やらなければだめだと信じます。それが凡てを解決しませう他を語るに及ばずです。

大森眠歩

◇將來を期待したい意味から前衛座第一回公演に於ける小野宮吉君のドン・キホーテ、村山知義君のムルチオ伯、水野澄子君のマリアステラ等を擧げ、舊劇に就いては別の機會に詳しく書いて見度いと思つてゐます。

◇劇場の內外、形式の新古、力感の輕重を問はず、生々潑溂とした歡喜を呼び起して吳れるもの。と、ないものをねだる。

鳥居清忠

◇一ツ幕へ、東西俳優入れまじりの出演は面白く無いと存じます。

◇歌舞伎劇（舊式ナ）にも舞臺監督がほしいものです。

高澤初風

◇歌舞伎の方では菊五郎の「半七捕物帳」と吉右衛門の「風鈴そばや」猿之助の「硏辰の討たれ」鴈治郎の「心中宵庚申」新劇の方では築地小劇場に上演された坪內博士の「役の行者」などです。

◇歌舞伎劇では特殊の古典劇の研究的上演、新劇では內容に深味のある創作劇の上演で、是は新舊俳優ともに對して上場を望みます。

柳原白蓮

◇今年はあまりいそがしくかつ子供が小さいのでつひ芝居を見る機會をもちませんでした それ故にお返事の出來ないのを殘念に存じます。

南部修太郎

◇あんまり廣く見てゐません。築地小劇場の「櫻の園」に「愛慾」、個々の俳優では何役と云はずに左團次や吉右衛門などの努力が頭に殘つてゐます。

◇現在の行き詰まりきつた演劇を打開する唯一の道は結局優れた劇作家の出現以外の何物でもないでせう。この意味で劇作家にもつとほんたうの仕事をしてもらふやうな用意が劇壇全體に必要です。

今東光

◇解放されたドンキホーテ（前衛座）（但し之にも注文なき能はず）

◇歌舞伎には希望を持ちません。新劇も同樣です。（尤も好い脚本さへあれば）

林久男

◇吉右衛門の風鈴蕎麥屋と木內宗吾。中車の松王と本藏。梅幸のお石。大阪福助の戸無瀬乳人淺岡。築地小劇場の「横面を擲られる彼」中の汐見の主人公。

◇一言にして申しがたし。

石割松太郎

◇十五年度の興行年表を繰返して、今更見ないで、思浮べるが、最も感銘の深かつた役々だと思ひます。私にとつてのそれは、歌舞伎では菊五郎の判官（本郷座所見）と澤正の白野辨十郎（浪花座）の二つです。前者は「今日のかぶき」だ「大正の判官」だと感じた點で菊五郎の力を買ひます。後者は嘗て歐外氏の飜譯口述を讀んで面白いと思ひながら「何を澤正が」と思つてみると、案外な出來に、全く澤田の腕に感心しました。前者は俳優の藝に後者は俳優の腕に感心したのです。

◇この問題はとても葉書の一枚や二枚では、書き盡せません。が、一言申しますと、歌舞伎は過去の藝である、新劇はこれからのものである、よろしくこれを忘れず　進んでもら

ひたい。新劇がかぶきの眞似描くするのも見つともないが、歌舞伎が新劇まがひに、「私が私自分のために」などちよん髷男のいつてゐるのに氣がさしませんでせうか。

藤森成吉

◇處女作として、又初演として、井上一座の拙作「礫茂左衛門」上演を擧げさせて頂きたい。

◇無內容の、馬鹿々々しい芝居の上演を、早く大劇場でやめる事。

額田六福

◇大阪は知らず、東京では少し手前味噌乍ら澤田君の白野辨十郎に富岡先生。高島一派の權三と助十、吉右衛門の風鈴そばやと重太郎岸田國士君の作の驟雨に出た律子、田之助、菊枝君。

◇今までの樣なみどり主義でなく、少くとも三幕以上の堂々たる作を主として上演される事を望みます。一幕物はやつぱり本當に感銘が少い樣です。

新居格

◇多病の一年であつた故、殆ど芝居をみてはゐません。綠牡丹を見たのと、聖ジョンと舞踊のデニションを見ただけ、そんなですからお答へする資格がないものです。來年は大にみたく思つてゐます。

◇僕は歌舞伎劇に殺人、殺傷、自殺等の多いので近頃はきらひです。そんなことのない、でなければ少ない歌舞伎がのぞましい。それと新劇の盛んであることはのぞましい。築地小劇場の上演目錄の近頃の傾向はすきになれます。あゝした傾向が望ましい。

佐藤紅綠

◇中座に於て歌、鴈、仁の合同劇を見ました鴈の若やかで元氣なのに引替へて歌、仁の老衰をひどくいぢらしく感じました、俳優は見物人を前に置かなければ表白の出來ない藝術を有つて居るものだから、あの年になつても舞臺へ出なければならない二人の心持につくづく同情しました。

一、劍劇を驅逐する事

一、西洋劇を驅逐する事

一、創作本位に立復る事

秋元柳風

◇井中の蛙である私には東都の劇壇丈けないはさせて下さい○帝劇一月の「鬩の屛」で榮三郎の小町姬、十一月の「白縫譚」で梅幸の秋篠に宗十郎の犬千代、十二月の「驟雨」で田之助、律子、菊江 ○歌舞伎座七月の羽左衛門、左團次の「權三助十」、十月仁左衛門の「壽門松」十一月鴈の「封印切」十二月左團次の「森有禮」○本鄉座十月吉右衛門の「風鈴蕎麥屋」○市村座五月、梅幸、菊五郎の「お化師匠」○邦樂座の五月、澤田の「富岡先生」十一月五郎の「雪の夜の街」○松竹座十月猿之助の「研辰の討たれ」○新橋演舞場十二月菊五郎、三津五郎の「芋堀長者」

◇默阿彌其他の世話劇を希望します。そして延若や猿之助等の中堅所を働せて昔の面白い狂言を復活して貰ひたいと思ひます。新劇では帝劇の當興行女優劇に上演されてゐる「驟雨」のやうな如實的な世相描寫が感銘を惹きます。尠くもそれが淺薄な技巧でなく有り得る事柄を取材したもの――でありたいと思ひます。

新谷誠太郎

◇印象の深かつたものとして、三津五郎の喜撰。

◇歌舞伎として別に無之、新派はウント大がかりに黃金時代を復活させたくと存じ候。

小林愛雄

◇多忙と病氣とに送つた一年の間にあまり多くの芝居を見ませんでしたが、羽左衛門と梅幸と松助と三人寄つての世話狂言が凡て面白く思ひました。

◇歌舞伎劇に於ては世話物の通し狂言が見たく思ひます。新劇に於ては依然として名脚本難ですから、先づ新大作の出現を要望する外ありませぬ。

楠田敏郞

◇何うも、おたづれの反對のことばかりが多くて困りました。面白くない芝居と、うまくない役名に苦しめられたやうにおもひます。しかし六月歌舞伎座で見た「清正誠忠錄」及びその吉右衛門、「佃の夜嵐」及びその菊五郎は、いまも忘れないでゐるほど好いものでした。輕いものでは「權三と助十」を面白いと思ひ、そこでは羽左、吉、左團次、猿之助に感心しました。それ位なものです。新劇では「役の行者」はすこし原作に不滿、大鹽平八郞は殘念乍らみませんでした。

◇今後の演劇と云つても當分どうにもなりはしないとあきらめてゐます、新作ものと新劇に期待して何だか裏切られたやうにさへおもつてゐますが、築地小劇場の運動に刺戟されてもつと小劇場が出來、そこによい脚本が上演されゝばその時はまた別の話になります。

森川舟三

◇仁左衛門と彼の當り藝とする狂言數種。仁左衛門のゐなくなつた後の我が劇壇で「堀川」の與次郎や「沼津」の平作などを誰にやらせるか――この問題に觸れてみて實は慄然と致しました。

◇ロマンチシズムとリアリズムとシムボリズムとを程よく調和した芝居を望みます演劇は結局觀る者にとつての「よろこび」であることに間違でありますまいが、所謂娛樂としてでなく、又觀劇を單なる慰安會としてでなく健全にしかして正當に發達せしめたいものです。これは俳優、見物双方が覺醒し、更に劇そのもの、內容も制度習慣も一樣に革める必要があると思ひます。

伊藤悌二

◇市村座五月興行「お化師匠」の梅幸の歌女壽。歌舞伎座同月興行「男達ばやり」の左團次の朝日奈三郞兵衛。帝劇六月興行「玄朴と長英」の勘彌の長英。歌舞伎座同月興行「佃夜嵐」の菊五郎の靑木貞次郞。歌舞伎座七月興行「權三と助十」吉右衛門の家主六郎兵衛歌舞伎座十二月興行「森有禮」の左團次の森有禮。……等

◇一、腹藝の出來る俳優の輩出を切望致します。

二、本年度に於ける私の感銘の深い大部分のものは新作でありました。

劇道の不振はよい脚本の無い事に起因します。勿論舊いものにも價値はありすが此の際名脚本の多く世にあらはれる事を祈る者であります。

三、若き俳優の方々に、眞劍に時代物を研究して上演して貰ひたいものであります。

戸川貞雄

◇先日一寸歌舞伎で「森有禮」を覗きましたが、左團次の主役「森有禮」には、さすが自由劇場以來の作者との深い交渉が思はれて、おぼえず作者と俳優との間のイキといふやうなものを考へさせられました。

◇門外漢ですから別にこれといふこともありませんが、歌舞伎の今後はいよ〱所作本位であつて欲しい、またさうあるべきだと思ひます。新劇は新劇で破格をおそれざれです。

土屋充

◇何處も御無沙汰がちで餘り見てをりませんので口はゞたい事は申上げられませんが、十一月中座「石切梶原」の吉右衛門丈のデリカシー。狂言としては「風鈴そばや」の(惡人でない)凡人さ加減が心にのこつて居ります。

尙八月に寳塚で見たロシヤオペラの「カルメン」になつた女優の肉體の強さも忘れられません。

◇自分の趣味からは、凡人をとり扱つた、日常茶飯的なもの——謀反人や特異性情又は犯罪を動機とせぬものを望むのではありますが興業方面から云へば、それの丁度反對のものがハヤルことでせう。そして大時代なものと反對に(即ち中康ぬきで)輕いものとの兩極點に向くのでないかと思ひます。

◇前號三十六頁「人魚の唄」終から二行目「公西國寺にみどりの噂」は「みどり兒」の誤植

竹内勝太郎

◇關西の分より見てゐませんから關東のことは云へませんが、先づ第一に大阪中座如月興行一番目「菅原傳授手習鑑」の道明寺と車引鴈治郎の菅相亟、中車の松王、幸四郎の梅王雀右衛門の立田。同京都南座、顏見世の時の寺小屋。鴈治郎の源藏、中車の松王、梅幸の千代、魁車の戸浪。南座彌生興行「盛綱」吉右衛門。中座彌生興行一番目「金閣寺」中車の大膳、羽左衛門の藤吉、雀右衛門の雪姬。中幕「茨木」梅幸。中座霜月興行中幕「石切梶原」吉右衛門の梶原、時藏の梢、友右衛門の六郎太夫。これだけを私の日記から拾ひました。

川柳

道頓堀

杉村蚊象

春衣裳中座へ這入る褄をとり

スケールを見て待ち合す松竹座

戎橋行くも歸へるも連まかせ

入れ込みの浪花座前は雨に濡れ

御店から電話に走る芝居茶屋

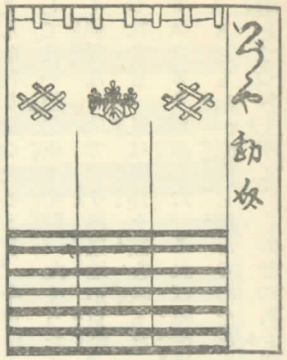
ボート屋を出ると角座の果太皷

寒風に幟のぼりは春の色

辨天座つひお使の出來心

朝日座へ行く相談の店火鉢

晝通る道頓堀に知らぬ店



如是観劇

山本修二

私の所へ來る若い人達の趣味を聞いて見ると、大抵スポーツか映畵であつて、演劇が好きだといふ人は珍しい。スポーツは暫く論外として、映畵の演劇に及ぼす脅威は今や殆ど疑ふべからざる事實だ。そこには無論入場料が廉いとか、日本にゐてもいゝものが見られるとか、いろ〱複雜な原因があるだらうが、一番顯著なものは、極めてイージーな心持で、映畵の見られる點だらうと思ふ。

日本にも西洋にも映畵論を組織しようといふ仕事は、多くの人によつて企てられてゐるとしても、それは依然として暗中模索であり、今日の理論が明日の映畵にあてはまるかどうか、もとより疑はしい次第である。卽ち映畵は今やロマンチツク時代にある。理論よりは實行だ。ある意味では實行卽ち理論である。

×

三千年の歴史を有する演劇は、そこに永久不動の理論といふやうなものは、多く求め難いとしても、約束とか常識とかいふものが、かなり多く出來上つてゐて、それを一と通りのみこむだけでも、全く容易の業ではない。演劇が敎化を主眼にするか娯樂を主眼にするかは、もとより決し難い問題だが、とにかく今日の現狀からいへば、芝居を見て樂む前に、いろいろ本を讀んで勉强せねばならぬことは、全く以て億劫である。これが映畵の方だと、理論なんかは一切拔きにしても、面白いものは面白いと、誰しもハツキリいひ切れるに反して

演劇といふものは、モリエエルもいつたやうに、面白いといふまへに、一度法則にあてはめて、面白いといつてもよいかどうか考へて見ねばならないのである。

これは全く馬鹿々々しいことだ。馬鹿々々しいところではない。芝居を面白くなくする最大の原因だ。かういふことは案外の方面に、いろ〳〵影響してゐることで、假へば私なんかも、近頃芝居を見ても、ちつとも面白くなくなつた。それには年の故もあるのだらうが、何より先に觀賞の前に理論が出シャバルのがいけないのだと思ふ。本當に芝居の中に魂を打込むことを忘れて、理屈で物を見るからいけないのだと思ふ。

×

こんな判り切つたことを、今更いふのは恥しい譯だが、私としては一種の悟りを開いたやうなものである。この悟りは全く偶然なもので、今秋築地が京都で『なぐられる彼奴』をやつたとき、私は原作を讀む暇もない中に、芝居を見た。そしてスッカリ感激した。これは無論演出も巧かつたのだらうが、もしも私が原作を讀んでゐたなら、頭の中で變な風にあの劇をでつち上げて、そのでつち上げたものと、演出されたあの劇とを、比較研究してゐるうちに、感激はなくなつたらうと思ふ。澤正の『富岡先生』と同じ意味で、私は感激した。

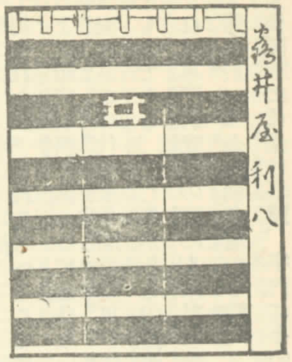
原作を讀んで行かない方が感興が大きいか否か、これはいろ〳〵の場合があるだらうが、原作を讀んでゐると「すじ」の判るところが一等いけない。劇作術の方では不安とか意外とかいふことが、かなり大切なことになつてゐるが、筋がハツキリ解つてゐれば、不安も意外もないのである。不安も意外もないところ、劇的興味の起る譯がない。

×

私としては劇評家として臨む場合にも、やはり原作とか演劇の定則とかいふものを捨てかゝつていゝかどうか、これはまだ解つてゐない。たゞ、苟くも素人として、劇場へ行く場合、下らない法則ばかりを考へて、本物の芝居を見ないのは損だと思ふ。近頃私はかういふ悟りを開いてからは、芝居を見ても一般の民衆とゝもに泣き、そして笑つてゐる。お蔭で芝居に對する久しぶりの興味を取り戻して、非常に幸福を感じてゐる。若い人は別問題として、私と同じ年配の人で、芝居を餘り見すぎて、面白くなくなつたといふ人がかなり多いやうに思ふので、御參考までに私の見方を書いて見た。

歌舞伎の將來に就て

竹内勝太郎



歌舞伎の將來と云ふ問題であるが、一體歌舞伎に將來があるのかないのかからして考へてかゝらねばならない。甚だパラドックスを好んで用ふるやうだが、若し歌舞伎に將來がないものとすれば、最早何事もこゝで論ずる必要はない。歌舞伎は亡びる。簡にしてつくしてゐるではないか。が又反對に歌舞伎に將來があるものとすれば、之れ又今更とやこうと暇をつぶしてあげつらふには及ばぬ。歌舞伎の前途は春光洋々たり矣。千秋萬歳樂と、めでたく手打ちが出來やうと云ふものである。

所が世の中は凡てのことがそう單純にはゆかぬやうに出來てゐる。歌舞伎にも將來があるかも知れぬしないかも知れない。然らばどう云ふ風になつたら歌舞伎に將來があるかも知れぬと思はれるか、その點を考へて見るのが私達の目的だと云ふことになる譯である。

歌舞伎に對して比較研究するに凡ての點に於いて便利なのは能樂である。歌舞伎は能樂から直接に發達して來たものではない。能樂は全く發達の頂點にあるものであつて、あれはあれ以上に發達する餘地がないのである。歌舞伎は別な徑路を辿つて發達して來た。(尤もそれが能樂と全然關係がないとは云へない。)けれども能樂が完成後數百年間の長きに涉つて榮光を恣にし、今日も尚昔に劣らぬ隆盛を見せてゐるのは如何なる理由によるであらうか。この點を考察して見ることに依つて、私は歌舞伎の將來に言及する手がゝりを得ることが出來ると信ずるのである。

　勿論能樂は室町時代に生れたものであるが、反つてその完成は遠く德川時代に入つてからなされたものであるし、亦これが德川氏に依つて武家の式樂に選ばれたこと、即ち政權の手厚い保護を受けたことが、その生命を長く持續し得た理由の一つになるでもあらう。これは能樂の榮光を大分割引して數えなければならぬものとするかも知れない。けれども若し能樂が單に幕府の權力に保護されることに依つてのみ生命を持續したものとすれば、幕府瓦解と明治維新の後一端廢滅に瀕したものが、如何にして復興し、如何にして今日の興隆を見るに至り得たのであらう。之れは矢張り能樂それ自身に於いて充分に永續し得る立派な内部的な力を持つてゐたものと考へるのが至當であらう。然らば能樂をして今日までその榮光を續けさせた内部的な力とは何であるか、その力は何に依つて得られたか。これを考へることは當然歌舞伎の將來に對するよき研究材料を與へるに違ひない。

　能樂は室町時代應永年間に觀世世阿彌の手に依つて確立されたものである。然しながらその淵源する處は遙に長く、遠いこれは專門研究家の間にも未だ定說はないのであるが、私は大體に於いて奈良朝に唐から輸入されて、聖武天皇の東大寺大佛開眼には豪壯華麗、宇内にその盛大を誇つた所の彼の伎樂まで溯ることが出來ると思ふ。伎樂はやがて雅樂となり、民間に浸潤して田樂となり、一轉して猿樂となり、田樂法師等の專業的な新田樂となり、更に大和山城近江丹波等の神社佛寺に尊屬する咒師猿樂となり、次第に發展して劇的要素を強くし、遂に世阿彌の猿樂の能、即ち後代の所謂能樂となつたのである。先述の通り斯くして能樂は此の奈良朝に於ける外來の伎樂以降室町時代に至るまでの日本のあらゆる歌曲舞踊を大成し、發展の絶頂に位するものである。その歌曲方面には唐樂舞樂神樂歌から催馬樂の朗詠今樣郢曲宴曲聲明平曲等を收め、その舞踊方面には田樂に各地方固有の土俗的舞踊を取り入れた外、白拍子舞、延年舞等をも合せ抱擁してゐる。實に汪洋として對岸を見渡せぬ、海のやうに廣漠たる日本歌舞の大河流を形成するに至つたのである。然も能樂の内容となつたものは和漢古今のあらゆる文學を網羅し、殊に現實的出來事を取つて以て直に材料とするに躊躇して居ない。假へば「望月」「鳥追船」「藍染川」の如きがそれである。けれども能樂の作者はこれ等の作品に對して毫も寫實主義乃至浪曼主義の要求を持たなかつた。それは何處までも古典主義に終始してゐた。從つて德川時代に入つて後も只管にこの古典主義の完成に能樂自らが努めたのである。それは完全な

る形式美の世界である。そして完全なる形式美とは形式即ち内容であり、内容即ち形式であつて、その二つが一つに渾然と融合して引き離すことが出來ない。それこそ徹底純粹なる象徴の世界である。斯樣な形式美の完成はその藝術に永遠の生命を與え、その藝術的力感をして最高のものたらしめるであらう。能樂が今日に至るも尚我々に對して強く深き感謝を與へることが出來るのは一つにこの最高にして完全なる形式美の世界を確立してゐる結果に外ならぬと私は信ずるのである。

　以上の如き能樂の例は直に取つて我が歌舞伎の將來に當はめることが出來るのではなからうか。例へば歌舞伎も德川時代に於いて成立されたが、明治大正に入つてその完成の道を辿りつゝあること尚能樂の室町時代に成つて桃山德川兩時代に完成せると同樣とも見做し得るであらう。歌舞伎は德川中期の元祿から寶曆年間にかけて阪田藤十郎、市川團十郎、中村七三郎、山中平九郎・荻野澤之亟等の名優と並木正三、奈河龜助、津打治兵衞、櫻田治助等の劇作家に依つて大體成立されたと見ることが出來る。そしてその源流は普通阿國歌舞伎まで溯るものとされてゐるが、これは頗る外形的な見方である。成る程歌舞伎源流の根幹をなしてゐるものはこの阿國歌舞伎に違ひないが、その阿國歌舞伎の源を養つてゐるものは何であるか。この點を考へてゆけば丁度能樂が能樂以前の凡ての歌曲舞踊を集大成したやうに歌舞伎は能樂以後歌舞伎以前のあらゆる歌舞音曲を集めあらゆる歌舞の伎はこの歌舞伎の流れに落ちこんで來て、偖こそ今見る如き滔々たる大河流となつたものであると云ふことがうなつけるのである。能樂以後に發達したものには先づ幸若舞がある。十二段草子の原始淨瑠璃、千秋萬歳鳥追大黒舞等の賤者の歌舞諸種の民謠から來た小歌等がある。續いて隆達弄齋等の小唄、各地方に於ける田園舞踊から發達した風流踊の踊歌等がある。そしてこの民謠風の小歌や田園風の舞踊の發達には明かに中世期の田樂の影響があると信じられる。加之出雲阿國の念佛踊そのものには聲明和讃などと同じ系統を引いてゐる空也宗の融通念佛の影響の深いものがあらうし、又それには獅子舞大黒舞等の賤者の歌舞や盆踊豐年踊田植歌臼挽歌等の田園の歌舞が強く働いて居るであらう。同時に又歌舞伎それ自身と平行して發達して行つた人形操、義太夫節その他の上方淨瑠璃、半太夫節その他の江戸淨瑠璃等を悉く自身の中へ取入れて次第に大成し、現在の如き途方もない尨大な歌舞伎と云ふものになつたのである。

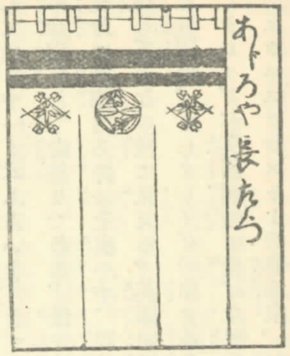
所で歌舞伎の源流は以上の如きものであり、以上の如き發達の徑路を踏んで來たものであるとして、その內容の構成分子は寫實主義と浪漫主義との混合である。然しそれが後代になる程浪漫主義の分子が寫實主義の分子を壓倒して來る。殊にその極盛期である文化文政に至つて歌舞伎は全く浪漫主義の勝利となるのである。けれども次の天保以後に於ける德川末期に入ると歌舞伎は次第に俳優の手に依つて古典主義に近よつて來る。一つは劇作家にも俳優にも創造的な天才が生れなかつたのにも起因するが、矢張り歌舞伎がその本質上、能樂と同じやうに古典化の完成の爲に自ら解體脫落して、浪漫主義の脫却を行ひつゝあるもの、自ら淨化作用を行ひつゝあるものと見るべきであると思ふ。

斯う云ふ風に見て來ると歌舞伎の將來と云ふものはその古典主義化の完成に依つてのみ可能であり得るであらう。それは偉大なる先行者の能樂が例を示して居る通りである。卽ち歌舞伎は德川時代に大成し、明治大正時代に於いて完全に古典化するべきものである。我々は歌舞伎を古典化することに依つてのみそれに永遠性を與へることが出來るであらう。

然も歌舞伎自身既にその古典主義化の道を辿りつゝある。それは續き狂言の段物から或る一段一齣が獨立して、舞臺に上演されることが現在の普通事となつてゐることの如き明かな例證であるではないか。內容の筋に重要なる意義を持たせる浪漫主義は茲に至つても早捨てゝ省みられなくなつた。そして脚本は不問に附されて獨り表現に對する俳優の技藝のみが批判の對照となる現代では、歌舞伎の浪漫主義は全く閑却されてしまつたのである。

斯くてそこに歌舞伎に於ける古典主義の勝利がある。例へば中車の「逆櫓」、羽左右衞門の「玄冶店」、梅幸の「累」、吉右衞門の「盛綱」、菊五郎の所作事、鴈治郎の「河庄」等は私の意見に有力な裏書をしてくれるであらう。それは能樂に於けるものと同じく完成された一つは古典主義の藝術であるべきである。

日本在來の民間に於けるあらゆる歌舞音曲をそれこそ文字通りに清濁合せ呑んで、尨大なる相となつた歌舞伎は今や自ら淨化作用を行ふべき時期に到達してゐる。河流にも自淸作用がある。歌舞伎も今尙そのうちに尠からず包藏してゐる餘計な浪漫主義の構成分子を悉く脫却し去つて、その古典主義化を完全し、完全なる形式美の世界の建設に進むべきであらう。然らばそこに能樂と對抗して、永生を得べき根據を確立することが出來ると私は信ずるのである。



明日の演劇

豐岡佐一郎

他の世界の事は餘り知らないが、今日『明日』を問題にされる事劇壇程はげしい世界は他にあるまいと思はれる。劇壇そのものにしても、問題の紛糾する事、今日より甚だしい時代はかつてなかつたであらう。而もその諸問題がいづれも暗い影を脊負つてゐるのだから情無いではないか。新派の凋落その將來はどうなるのか、歌舞伎劇は亡ぶべきか果たまたいかなる樣式に於て傳統さるゝものか、人形淨るりは果して、「能」の如き形態に於て保存さるべきや、一時隆盛を極めた歌劇の現狀はどうだ、劍劇もゝう飽きツぽい見物から見離される頃ではないか——一つとして明るい希望に充ちた前途を指示してゐるものはない。ではそれらの諸問題を一蹴して「明日の演劇が顯然と擡頭しつゝありや……成程それらしい勢ひは感じられる、併し劇壇の天下を支配するのはとうてい今日や明日の事には思はれない。

藝術は科學ではない。

一つの發見、一つの發明によつて、今日まで權威を持つてゐた說が忽ちに根底から覆されて、新說の世界となる事は科學上では望み得べき事であり、また敢て珍しい現象ではない處が藝術上の事はさうは行かない。演劇と云ふ狹い世界の事にしても、たとへ此處に大天才が忽然として出現して名戲曲を發表し、同時にそれを完全に演じ得る俳優が出現したと假定しても、明日から歌舞伎が消滅し、新派が生命を失ふものだとは思はれない。雜多な要素、まるで闇汁鍋のやうな『演劇』が、一朝にして生命の轉換を行へるものとは思はれない

處がしば〱科學的な奇蹟を眼前にする近代人は藝術に於ても、――演劇に於ても、矢張その奇蹟を要望してやまないのである。今日から明日への連續的な歩み――今日の演劇から明日の演劇への漸層的、聯關的な發展を手ぬるしとして、一足とびの飛躍を望み、且つその可然と論ずるのである。處が一方劇壇當事者――かりに俳優と興行家とをもつて代表させるとして――の態度はどうであらう？ これはまた臆病な細心な今日主義の現實派である。奇蹟など夢にも見ない。論ずるものと行ふものとのこの甚だしい距離、論ずるものは行ふものを常に罵倒し、行ふものは論ずるものを冷笑し、互に歩み寄る事を知らない。それでは今日の演劇が暗い影を脊負はされてゐるのも不思議はない。

クレイグは自著『新しき演劇へ』の表紙に「ローマは一日にして成らず」と云ふ古い金言をプリントしてゐる。彼の如き革命家にして尚然りである。保守的な英國劇壇はクレイグの充分に活躍する舞臺を與へず、眼前クレイグの理想は何等實現してゐない樣に見える。英國同樣保守的で懷古的で傳統的な我國に、よしクレイグの如き革命家が現れようとも、恐らくクレイグが英國劇壇に投げた程の影も投げ得ないであらう。スタニスラウスキーの藝術座、引續いてタイロフの室內劇場、メイエルホリドの芝居、其他の演劇革命が續々と實現された露西亞劇壇の現象を直に我國へ、英國へ移植しようとしてもそれは不可能だ。何ら傳統に支配されない處女地の如き、藝術座出現以前のロシア劇壇と、三百年傳統の日本劇壇とを同列に論ずる事は出來ない。かう云つて來ると日本の劇壇はどうして傳統の外へとび出して、新しい道を開拓する事が出來ない樣にきこえるが、私の云はうとする處は、たゞ一人の天才の出現によつて奇蹟の行はれるのを待たうと云ふのではなく、現在存在するもの、不幸にして今は暗い影を脊負はされてゐるが、今まで立派に存在し來つたものを、再び明るい世界へ再生させよと云ふのである。

今日のものを生かして明日の創造たらしめよ。「新劇」と云ふものを何も別の世界から呼び入れて一派を立てさせる必要はないのである。現在の歌舞伎畑、新派畑からでも新劇の芽は充分に成長して行く可能性があるのである。この新しい種をこれらの畑に植付けようとしない處に奇蹟を欲しない側の落度がある。まご〱してゐる時ではない、早く種をおろさないと、その中にいくら種を蒔かうが一向芽を出さない事になる。近來いくらかはその試みを始めかけてゐるものゝ、その態度が何處までも不徹底で、いつまでたつても試みの範圍を出ないので、かへつて畑全體の出來を惡くして了つた――これは畑質が惡いのでもなければ、種が惡いのでもない、種のおろし方の惡い結果に外ならない。この最初の惡結果におそれて種蒔きが自信を失つて呆然と立つてゐると云ふのが演劇界の現狀である。

此處に於て、新派畑、歌舞伎畑の境を撤して「新種」を一樣にばら蒔く大膽さはないか。ほつて置けばどうせ荒れて行く畑ではないか。今までの古い種を今更蒔直した處で、尚更どうにもならないではないか。

どうやら取とめのない抽象的な議論に終始して、自分自身奇蹟を待つ一人ではないかと云ふ疑ひが生じて來るが、自分は飽までも現實派で、具體的な意見を今少し披瀝したいと思ふのであるが、それは改めての事にして、たゞ需められるがまゝに、この粗稿をもつて責を果して置く。

文樂座燒失に際し

佛國大使クロウデル氏の貴翰

拜復本月十四日附貴書正に拜誦仕候

日本に於ける人形芝居の華麗なる藝術に對し、余は從來甚大なる嘆賞を感じ居候が、過日之を紙上に公にする機を得、衷心滿悅に存居候、然るに專らこの藝術の爲めに擧げられて居候、彼の文樂座先般不幸にして祝融の禍に罹り遂に烏有に歸し候段、痛惜措く能はざる次第に御座候

同座をして出來得る限り速に舊態に復せしめ、以つて在りし日の同座が有せし古き傳統を永遠に保持せしめられ候樣、特に御努力相成度切望に不堪候

終に臨み滿腔の誠意を呈し申上候　敬具

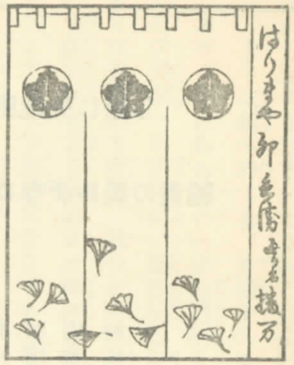
西曆一千九百二十六年十二月二日

佛國大使

クロデツウル

松竹合名社々長

白井松次郎殿



左傾劇の眞實性

山上貞一

大正十五年掉尾の道頓堀を人呼んで劍劇競演と稱した。卽ち新聲劇、新潮座、同志劇、更に第二新國劇が樂天地に據つた爲めではあるが、劍劇なるが故に競演なる語はいかにも相應しく、毎日の大入滿員の人數高に從ひ各座に優勝旗を持廻つたといふに到つては物凄い。

劍劇とは私はこれを日本劇道に於ける左傾劇と見做したいと共に今や左傾運動は輕調なりし時代を通過して、精神的にも運動方法にも正に實行の時代にある如く、劇壇の左傾運動も內容の充實を期すべき時にある。

今、左傾劇の過去を顧みると、決して新しく發明された運動ではない。歌舞伎劇にも從來殺陣なる一所作課目があつて殺陣師なる教師さへあつた。たゞ右と打てば左と開き左と突けば右へ外す程度のおだやかなる所作であり、俳優も自己の體質なり修養なりを基礎として、決して亂暴に墮せず過激に涉らず、却て優美なる物腰を失はずして、時には中心俳優の一擧手、一投足を持つて、多くの端役者は面白くも身體を轉がして、勝敗の數を定めた。それは恰も魔術であるかの感があつた。

然し、科學思想の發達した今日尙此の魔術を强うるのは寧ろ滑稽に過ぎる。一人がばつたり倒れるには、投げられるか斬られるか、いづれにしても確實性を認めないと觀客として首肯し得ない。それがより確實性を持ち、より現實的である場合に喝采が湧くことは眞實である。澤田正二郎は此の點の先覺者である。

俳優が事實疲勞を覺ゆるまで劍を振つて飽なく、觀客を十二分に滿足さしたのは卽ち澤田の新國劇の立廻りが最初であると言つている。歌舞伎にも此の意味の雄壯美を持つ狂言はないではない。福岡貢の人傷、佐野治良左衞門の百人斬その他一人對多數の勝敗まであるがそれは餘りに勝者が强きに過ぎた。所謂近代人の通有性である刹那主義の悅樂にはまだるきに墮する。澤田はまづ眞摯に長く火花を散らすことに留意し、次いで多數の人を倒した。新國劇出身の俳優が相次いで新劇團を組織なし 此種の劍劇を賣物とするに及んで、澤田は更に轉じて閃刄卽死の筆法を選んだ。拔けば玉散る氷の刄ではなく、拔けば血汐ふくなま臭き刄である『國定忠治』の花道の出合に電光石火忽ち三人は倒れる、あの形式である。

左傾劇にも變轉改良の跡は多く、琢磨の工夫は積れたが、その反影なるものも多い。雁治郎は『總角助六』で本身の刀に煙硝を塗りカチと刀を交へる度に火花を散らして間をごまかした。曾我廼家五郎は四條橋下で勤王佐幕の大立廻りにヤツと構へるや消燈して、後はかち〳〵と火打石を打ち續けていかにも激しき太刀合せを聯想さした。

さて今日、左傾劇も物珍しくなく、觀客の眼には劇としての必須條件の一つとなり、その場面が無ければ寂しく、あればまたかとさのみ喜ばない時代となつた。形式の左傾劇は正に民衆化して常道となつた。

×

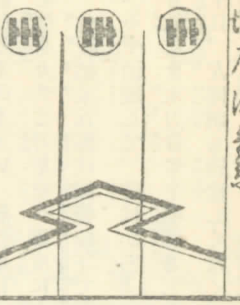
茲に於て左傾劇の眞實性を發揮すべき時代は來た。これを私は心で劍を拔くべき時と呼びたい。形式的な刹那主義はもう觀客に漫性である。

次はどうしても精神的なものでなくてはなるまい。それも『不如歸』『己が罪』の如く暗いものでは決してない。明るくそして大きく叫ぶべきものでなければならぬ。眞實性には感動といふ要素がゐる。

俳優の演技が劇作品を左右した時代は過ぎて、劇作品の言葉が觀客の肺腑を貫く時代は來た。卽ち左傾劇の向上は科よりも白を心がけるべきである。科の活躍期は昨日の夢で、今日は白の眞實性を發揮すべき時である。

脚本中心の劇壇は來た。形式的にも先覺者であつた左傾劇團の人は此の轉換期にあつて精神的にも先覺者であらねばならぬ。

卽ち左傾劇の眞實性は優秀なる新時代の劇作品の中より摑み得ることを私は斷言したい。



關ケ原について

朝生順三

こんど中座に上演さるゝ關ケ原は、高安月郊氏作、全三段に展べられた劇であつて、第一段は大阪城内前田邸と、奥殿及城外京橋口、第二段は德川邸、第三段は阿彌陀峰と六條磧となつてゐる。往年上演の時には關ケ原の戰塲の塲を加へて德川邸を喰つた樣であるが、今回はどういふ風になるか知らない。

さて序の段は、加賀の前田利家の死去前後から始まつてゐる。これまで石田三成といふ人物は、非常に奸智に長けた人のやうに傳へられてゐるが、それでは餘り皮相な觀があり、且つ三成自身にしても大變迷惑を感じてゐるだらうとも思はれる。月郊氏にしても、この大阪方晩年の爲に氣を吐いた人物の雪寃を主として書かうとされたのに違びない。全段を通じて、さうした心持が表れてゐる。

却說、前田利家が死んだといふ事は豐臣の社稷が危きに臨んだ初一歩であり、石田三成に不運のきざしが現れたのでもあつた。

一方朝鮮より歸國した荒大名達は三成に取つて敵同樣、折さへあらば「天下を亂る奸賊」と罵りつくす。卒直な武人と圓曲な才子、政所方と淀方、こうした關係がいよ〳〵三成と荒大名との間を離隔してゆき、前田沒後は憚もなく打取らうと城の内外を探しまわつてゐるけれども、三成にとつて荒大名は敵とするに足らぬ、目指すは江戶内府家康なのだつた。淀君も一切を疑ひの眼で觀てゐる憎い世の有樣、矢張自分を側室と見下て侮り、加ふるに日に月に内府の威勢は增し、遂には政所まで取入る樣子に心平ならぬ折も折、七大名がつけつ覘ひつする隙を三成は城内奥殿深く淀君に見ゐた、過去の榮華の夢まだ覺めやらぬを煽つたと同樣、負じ魂が二ツ三成ば旣に關ケ原の一戰を覺悟してゐたのである。

被衣に女性と身をやつして、京橋口より遁れ出た三成は、幸 逢ふた大谷刑部に大望を打明け、早々伏見へ急行して德川邸に參入し、家康の本心を知らうと企てる。所在を知つた七大名達、三成を出せと申入れたが、家康どうしてか容易に聞かぬ斗りか、寧ろ援けて佐和山迄警護して送るといふ。

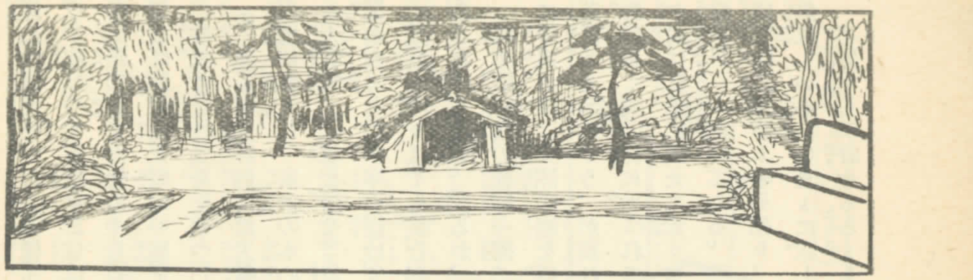
三成は内々ほくそ笑むが、却て其背後に家康の呵々大笑のあるを感じない。謀るか、謀らるゝか……。

關ケ原原頭の乾坤一擲、東西十五萬の貔貅の動き、さすがに智惠治部と太閤の寵を得た程の三成、凡庸の士では打てぬ芝居とも云へやう、が哀れ秀家の裏切に因つて敗北、身は山野に轟く閧の聲に追はれて伊吹の奥に逃れた。西山に落つる夕陽は紅葉に映えて赤々と血の滴るやうな東山豐公の墓前に淀君只一人額いてゐる。三成が捕はれの身となつて今日六條磧で仕置にあふ事を知り、せめてよそながらと此處まで來て焦立しい心持のまゝに伏して居る。

功罪半して評せらるゝも、三成には三成の本領があつた。野心のない純白な忠義ではなかつたにしても、男らしい痛快さをもつて、毀譽を超越し、爲すべき事をなしたに過ない。天地に怍ぢない三成であつた。

然しながら囚はれの三成には、もう己が天地はない。活殺は他の手に握られた。六條磧に坐した彼は、フト阿彌陀峰をのぞんで、ハツと其首を垂れた。豐太閤の墓前、流石に斷腸の思ひ禁じ得ず、兩手をついて淚ながら「お家の御運を身に引受け天下を堵けた合戰も却而御運を縮める端となつた。何と申譯仕 らう土民の子より一城の主とまで取立給ひ、天下の政務もお任せあつたに、御墓前にて斬られやうとは……イヤこりやお手打になるのであらう、敵の手にかゝりはせぬ。お目の前にて打たれるのぢや、お赦し下され」と、やゝしばし……。大名はもとより埒外の群集も、片唾を吞んで靜まりかへる。

あはれ一敗地にまみれし一世の快男兒、石田治部少輔三成に天運廻り合せず、六條磧の露と化してゆく。……太刀は閃いた。心あるものも、なきものも、榮枯盛衰の變を眼のあたりに見ては、偏に無常迅速の感に打たれぬわけにはゆかなかつた。阿彌陀峰は靜かに〳〵一人の女性を包んで東山の闇を深まらせて、初冬の冷は、いよ〳〵身に泌む。



中座初春興行上演臺本

中幕　敵討襤褸錦　一幕

大晏寺堤の場

春藤治郎右衛門　鴈治郎
同　治兵衛　福助
同　新七　長三郎
高市武右衛門　市藏
同　一子庄之助　政男
加村宇田右衛門　右團治
須藤六郎右衛門　齋五郎
彥坂甚六　箱登羅
寒念佛西念　鰕十郎

武　その方を呼び出せしは別儀でないがチト其方に、折入つて無心があるが、何んと聞いてはくれまいか

治郎　ハツ、見る影もない非人めに、御無心とは如何樣の儀で御座りますか。

武　聞いてくれるか。

治郎　身に叶ひました儀に御座りますれば。

武　聞いてくれるとか。

治郎　マア仰しやつて下さりませ。

武　かく夜中に我々が參りしは、余の儀にあらず、そちの身體が貰ひたい。

治郎　エ、——。

武　イヤサその驚きは尤も、今日あれなる御人と某詞の論より試めさにやならぬ刀がある、寝込みを切るは安けれども、得心させての上の事と存じ、夫れ故此處まで引出した、なんとそちが命を貰ひたい。

治郎　これは思ひがけない事を承はりまする、私も腹からの非人では御座りませぬ。一家一門皆歴々、身の不所存故勘當受け、非人と迄成り下がりました何卒今一度元の人間に立ち返りまして、人交りも致したいものと、明暮神樣佛樣天道樣を祈つて居りまする。只今承はればお刀の切れ味をお試しなされたいとの事、お大切なるお刀で、非人をお試しなされては、お道具の穢れにこそなれ、譽れにはなりますまい。假令野たれ死に會ふとても、死ふと思ふ心はいつかな〳〵只命が惜う御座りまする。どうぞお助けなされて下さりませ。そちらの旦那樣、只今もお聞きの通りで御座りますれば、どうぞ助けてお遣り下さいませ。申し旦那樣〳〵、ヘイそちらに御座る坊ン樣、どうぞ、お二人へお取りなしなされてお助け下さりませ。もうしお慈悲お情けで御座りまする。非人の命はお助けなされて下さりませ。

庄之助　段々申すを承はれば、不憫の至りお試しなされいで、かなはずば、近々の內仕置きの者も有ると聞く、非人めが命を助けてお遣りなされませ。

宇田右衛門　是さ〳〵氣の弱い、一家一門見放され勘當受けたとあるからは、どうせ碌な奴では御座るまい。念佛の一遍も唱へさせんと慈悲をたるれば附上りする、どう乞食め、ソレ引立てい。

仲間　ハツ。

宇田　手向ひひろぐ慮外者、ウヌ眞二ツに。

治郎　暫く。たつた一言申上げたき儀が御座りまする。

宇田　なんの一言聞く事ない、それへ直れ。

武　アイヤ暫く〳〵、コリヤ非人、詫れ、イヤさ、詫れ、先づ暫く、ハテ詫れ〳〵〳〵さゝあやまつてをらうがな。

治郎　重々あやまり入りまして御座りまする

武　それこの通りにあやまつて居りますれば、暫くお待ち下され。

宇田　無禮者めが。

武　ヤイ非人。そちは呑め込みの惡い奴ぢやかく多勢にて、取りまけば、逃ぐるとて逃がさうか。今の如く手向ひすれば、附く了簡も附かぬになるがや不調法者。ア、こゝな慮外者めが、さあ到底も助からぬ命なれども、只今承はればたつた一言申上げたき儀が有るとの事。その內に卒爾はない。何等の一言、サア早く申せ、どうぢや〳〵。

治郎　成程此上は命差し上げませう。さり乍ら私めは大切なる望ある身、その望だに叶ひますれば、私の方よりお試しなされて下さりませいと、お屋敷へ此身體を、差上げに參りませう。それ迄の所お暫くお延し下さらば生々世々の御高恩、此望み叶ひます迄は、命は惜しう御座りまする。望みさへ叶ひました後では、命をかばひます樣な非人では御座りませぬ非人の命は非人めにお預けなされて下さりませ。

武　ム、その大切な望みと言ふは敵討ちで有らうがな。

治郎　イヤ左樣な。

武　イヤお隱し召さるな。非人に似合はぬ武士も及ばぬ今の手の內。願ひの叶ふ迄の非人と睨んだ眼は違ふまじ、何んと敵討ちで御座らうがの。

治郎　ハツ、かくお目立ちまする上からは有り樣に申上げまする、必ず御他言下さるな成程親の敵を狙ひます者で御座りまする。

武　ムヽ左う見へる左う見えます。

宇田　ムハヽヽヽ。武右衛門殿が望みとは敵討ちで有らうがなと、仰せらるればよい事と心得へるどう乞食め、如何にも親の敵を狙ひますもので御座るといつはりを申すを、イヤ左樣見ゆる、左樣見えます等と、感心召された武右衛門殿、餘りと申せば其元は馬鹿。

武　ムヽ。

宇田　イヤ馬鹿々々しく存ずるてムハヽヽヽハ。やい此など乞食の大がたりめ、うぬ敵討ちとさへ言へば、陣の小口を通れるものと、心得イヤ御他言は御無用等と、誠しやかに申しても、いつはりの其の證據には、うぬ刄物たいしたものは勿論、小柄一本持ちもせず、今にも敵に出會ひなば、何を以て本意を遂ぐるイヤサ、何を以て敵を討つぞ、ア、聞へた。こりや爪でも延して、敵ののしやつつらを搔きむしろか、但し咽喉笛へぐつとくひつくか、ア、此ないつはり者めが。

治郎　御不審は御勿も、かく非人と迄樣をかへたれど、人目立つを憚り、一刀は此の竹杖に。

宇田　ムヽ、それが定なら、拔いて見せい。

治郎　イや御覽なさるには及びませぬ。

宇田　見せぬは愈々僞りもの、ソレ引立い。

仲間　ハツ。

〽承つて懲りもせず、立寄る者の鼻の先ずはと拔ひたる刄の光り

治郎　青江下坂二ツ胴、數腕、親重代で御座る。

宇田　ドレ。

治郎　イヤそれから御覽じ。ムハヽヽヽ。敵に出會ふはいつ何時か知れませぬ故、篤くより寢刄は合して御座る。よつく斬れます。ずんど斬れます。是非切れ味を試めさうと思召さば、御家來の内何誰なりと、どいつなりと、お出しなされ、切れ味をお目にかけん。敵討ちに相違御座らぬ、モウ大槪に了簡してお歸りなされたがよからうかと存じまする。

武　お刀拜見。イヤサお道具拜見、オヽ見事見事お刀お納め下され。

〽挨拶すれば治郎右衛門、刀を鞘に納めける

武　ハツかゝる大望ある御仁と存ぜず、慮外の段々眞平御免下されう、扨知行頂戴仕り帶刀致せば、武人侍ぢやと存ずれども武士の中にも御自分同樣なお人も有れば有るものか、イヤハヤ誠に感心仕りましたシテ敵をお狙ひなさるは、御自分一人で御座るか、御兄弟又外に助太刀の方でも御座るかな。

治郎　イヤ兄弟もなく又助太刀とても御座らぬ、拙者一人で狙ひます敵で御座りまする。

宇田　シテお狙ひなさる、敵の生國はいづく又姓名は何と申すな。

武　イヤ〳〵その儀はお尋ね御無用、

宇田　とは又なぜ〳〵。

武　左ればかく非人とまで身を扮し、附け狙う程の者が、たとへお尋ねあればとて敵の生國姓名を有り樣に申さうか、僞りを聞い

て扨てそうかと思召すは、餘りと申せばそこ元が馬鹿、

〽嘲笑ひ武右衛門は懷中より用意の金を取出し

武　近頃侮りがましうは御座れども、何かと御不自由勝、甚だ些少ながら路用の足しに拙者が寸志、

治郎　御深切は淺からねども國元出立の砌り少々用意仕り、今に事かきませぬお志しの段は受けたも同然、此儀は平に。

武　では御座らうが本の手前か。

治郎　イヤ是は御受け致すも同然、平にお納め下さりませう。

武　左程に仰せあるを達てと申すも却て失禮しからば兎も角もお心任せに。

〽宇田右衛門何ぞ挨拶言ひたげに

宇田　イヤ天晴近頃侮りがましいが、些少ながら路用の足しにと、お出しなされた武右衛門殿は誠の武士、又御深切は淺からねども國元出立の砌りより、用意仕りおりますと押戻された。どう乞食、イヤサお返しなされたお乞食樣も誠の武士、爭ふ物は中からと、取らぬ身共も誠の武士だ。併し武右衛門殿、モハヤ立歸らうでは御座らぬか

武　成程左樣仕らう。左樣ならば隨分御無事で。

宇田　お去らばで御座る。

〽去らば〳〵と禮儀をのべ、別るゝ武士の附き合は、よどまず濁らず川水の堤傳ひに歸りける。

治郎　ヤレ〳〵危い命の助かつたのも、此刀のおかげ、アヽ忝けない、一生懸命の場合故、痛みも忘れた。弟が居つたら見せて遣りたかつたわい。新七が戻らぬ事かいの弟が戻るまで寢て待たう、かう言ふ時に飮む酒、コリヤ弟許せ〳〵。

〽思ひもやみも果てゝ泣き藁屋の内へぞ入りにける。

〽無緣法界七墓を每夜サ廻はる修行者のいと物凄き風情なり、

西念　南無阿彌陀佛〳〵。アヽ寒い〳〵町中と違うて、ぐるりに家が無い故、こらへられぬわい。此三昧で回向したら直ぐに城下へ行つて熱い物を喰つて行かねばならぬわい。願以至功德施一切無緣法界出離頓生菩提南無阿彌陀佛〳〵

〽月なき夜半の夫よりも後ろ暗き宇田右衛門隱まい置きし須藤彥坂二人を引具し頰冠りに顏かくさせ、火繩の火を打ち振り〳〵道を伺ひ立寄て

〽身拵へ足音もせず藁屋の口欺し討所はしらず貳人が切先きしたゝかに切り込んだり

治郎　ヤア何奴なれば寢込みへ踏込み欺し討ち扨ては最前の侍よな武士に似合はぬ卑怯な奴め。

宇田　オヽ如何にも宵に參つて伺ひ置いたうぬは春藤次郎右衛門で有らうがな。

彥坂　コリヤ彥坂甚六。

須藤　須藤六郎右衛門樣だ。

治郎　ナニ須藤六郎右衛門よナ、親の敵觀念せよ。

彥坂　エヽ小まごとぬかさず。

三人　したばつてしまへ。

〽足音聞き附け宇田右衛門見附けられては叶はじとほう〳〵逃げて歸りける。
治兵衛　コリヤ弟。その方は誠に足が早い、モット靜かに行きやれ。
新七　左樣で御座りまするが兄者人の御氣病故それ故此の樣に急ぐので御座りまする。
治兵　それは身共も察して居る。遠方をかけまわり久々にて兄者人にお目にかゝりたいと心はせけど、何を申すも夜道と言ひ何やら胸さはぎが致すゆへ、心はせけどその方の足の早いので猶更に草臥れるてや。
新七　御尤もで御座りまする。
治兵　まだ先の方か。
新七　ハイアノ松かげの小屋で御座りまするサア〳〵お越しなさりませ。兄者人只今立歸りまして御座いまする。小屋の内には見えぬが、いづれえお越しなされたやら。
治兵　兄者人には何れえお越しなされしぞ。兄者人は見えぬか。
新七　ヤ兄者人。オヽ兄者人には切られて御座る。
治兵　何に兄者人が、コリヤ何者が手にかけた、今一と足早くば斯くやみ〳〵と、討たせまいものを、兄者人治兵衛で御座りまする。
新七　新七で御座りまする、御心たしかに。
治兵　お持ちなされて、
兩人　下さりませ。
〽兄弟共に涙にくれ、介抱如才なかりける
治兵　左るにても此治兵衛 春藤家之養子の身、孝養をつくさんと思ひし事も仇となり舅殿にはやみ〳〵と、毒刃にかゝりあえなき御最後、敵を狙ふその内に兄者人には此有樣
新七　よく〳〵武運につきたるか、
治兵　弟、
新七　兄上思へばはかなき、
兩人　有樣ぢやなあ。
治兵　それへ來るは須藤六郎右衛門、
新七　彦坂甚六。
治兵　返せ、
新七　戻せ、
〽言ふ聲にむつくと起き、
治郎　エヽ卑怯者返せ。
〽呼はり〳〵二足三足その儘そこへかつばと伏す、こなたに倒れし須藤彦坂 誘を伺ひ起上り、切込む切先を取りおさへ。
治兵　ヤアうぬは須藤六郎右衛門、
新七　彦坂甚六、
治兵　弟 拔るな、
新七　ハツ。
〽今こそ日頃の本望とどうとねぢ伏せのつかゝり、すでに止めと見えければ
治兵　兄者人をソレ。
〽手負ひの兄を抱きかゝへ刀持ち添へとどめの刀。
治兵　親人の敵、
新七　兄者人の仇、
二人　思ひ知つたか。
治兵　チホ……………。
〽その名は世々に

——幕——

中座初春興行上演

所作『青海波』と『卯の花』歌詞

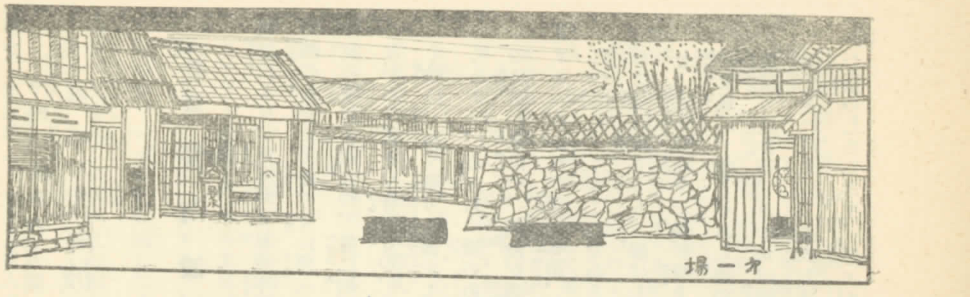
新曲 青海波

清元連中

〽神代より、光り輝く日の本や。干珠。滿珠の世がたりを、今に傳へて陸奥の、千賀の鹽がま煙たつ、霞に明けし松島の、ながめは盡きぬ春の日の、汐の干潟を行く袖に、移す薫りも懐かしき梅の花貝さくらかひ、みるめの磯のあかぬなる、花の跡踏む夏山の、筑波が覗く船の中。
クドキ「あふせの浦の私語、いつか浮名もたつ涙の、うちこんでゐる眞心に、待つとは戀は謎〳〵も、解けた素顔の夏の富士、清見の沖や三保が崎まつに本意なき青東風に、憎くやあし邊の片男浪、其の通路と星合の、なかかけ渡す鵲の、天の橋立きれ戸とは、裏表なる播磨潟、潮くむ蜑のしるしとて、戀とむかしのうたひもの。
二上リ「アラめで鯛は神の代に、赤めと召されそめしより、蛭子のかみの釣りあげし、二世のかための懸鯛に、ゑにしを繫ぐ諸白髪、若やぐ尉とうば玉の、闇の氣色は漁火の、ちらりちら〳〵、月の出潮に細引の、聲の、節も拍子も一樣に。
三下リ「ヤンラ月の名所は全所ほかに、ないて明石のはんま千鳥。ヤサホウ〳〵、ぬしに淡路は氣りかゝる、室のとまりを
ツレ「松帆のうらよヤサホウエンヤ〳〵面白や。波も靜かに青きが原を、なかはひかへて住よしと、名も高砂のめうと松、雪にも曲ぬ深みどり、榮く家の壽を、猶いく千代も延ぶるなる、直な心の清元とめでたく祝ふ泰平の、君が餘澤ぞありがたき。

清元 賑民壽万歳

〽卯の花の、雪で兎をつくるなら目にはほどよき花落ちの、茄子の走りに涙越へて
〽高直はまけぬ初松魚、迦にたんぜふゆびさせど、天にも地にもたゞ一本、一つばいのんだ酒きげん、まだ跡舟や日和下駄來るか來るかと川岸へ、出て見れば、ノンシ、船は家根ぶれ佃ぶし、チツトあぶれへ長箱の、さきへ二ほんのさんばしや是非に御げんと書く文は、筆のさや町か西川岸か、うまいなか町、中ぞらに、てつぺんかけたと鳴てゆく、時鳥過ぞ雨晴れて、千種の花の露しげみ、猶光りそふ秋の夜の、〽月の影さす隅田川、いざこととわん都島、あれの枯野の向島、たが庵崎か琴の音も、柴路遠し冬籠り、ふりの日脚も節季候の、合 さつさと御座れ年の暮、一千夜明ければおのづから、長閑けき春の朝ぼらけ、梅に來て鳴く鶯に、初音ゆづりて才若が、千代の小皷おつとりて、萬々歳と祝ふ壽久しけれ。



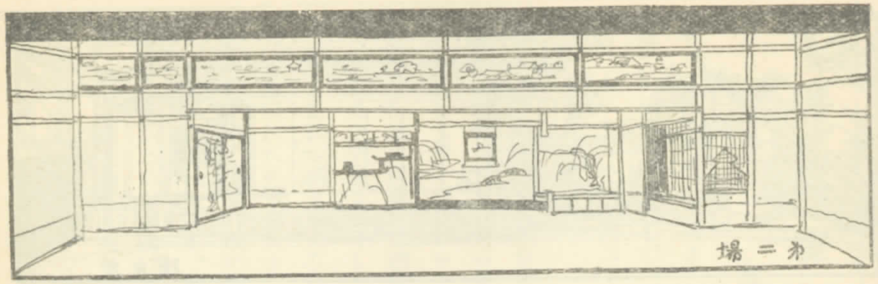
玩辭樓十二曲の内

芝居物語 椀久末松山

中座初春興行上演

南 蘇 生

新町九軒の場、平舞臺、遠見中央は石垣に櫻の木立、上下は町家の家並、本舞臺には茶屋床几に煙草盆などあり、流行唄で幕があくと、運座から歸る細川家の臣柴田定之進が出て來るが、折柄阿彌陀ヶ池へお詣りする茨木屋の女將おせいに逢ひ、扇屋の松山太夫に戀してゐながら、未だ一度も太夫に打ち解けられた事のない定之進は、これをいゝ機におせいに取り持ちを頼む、然し、帶紐解かぬで賣り出した松山太夫の氣心を知つてゐるおせいは、定之進の强つての言葉に身受けをすゝめる、引くに退かれぬ武士の意氣地と戀故に、萬事はおせいに頼むと、おせいは快よく引き受けて去る、定之進は金の才覺に思案の所へ機よく天滿屋喜之助と分銅屋金三郎が通りかかるので、うまく話を持ちかけ、金の才覺を依頼して一單は斷られるが、昨日殿の許に屆いた御用意金五百兩を、但馬の計らひで久兵衞に預けると知つた定之進は、又も兩人に、久兵衞から其の金を貸り受け、用立てゝ吳れこの難題を持ちかける、兩人は兄弟同樣の久兵衞に、後日の祟りを恐れて、それも斷る、定之進は景色を替へて怒るが、久兵衞に酒亂の僻があると聞いて獨り肯き、但馬主膳の邸から大金を預かつて歸つて來る久兵衞を待ち設け「以前と違ひ禁酒の身だ」と固く辭退す

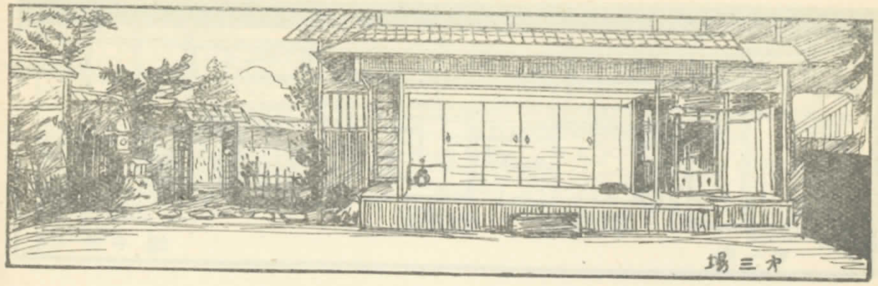


る久兵衞を、喜之助金三郎始め、幇間仲居大ぜいで、無理矢理連れて去る。

通り縋りにこの有樣を見た椀屋の番頭嘉右衞門は主の身を案じて追はんとするが、草履の花緖を切らし困る所へ、先刻のおせいが戻つて來たので「若旦那に酒をすゝめて下さるな」と頼み、商賣上手なおせいの愛想は聞き流して去る。

新町茨木屋座敷の場。　大廣間、正面は三間の床、地袋、上手斜に書院窓、障子を開けると中庭の拵へなど……中央に柴田定之進、上に脇息を控へ、久兵衞金三郎、喜之助始め藝妓仲居幇間大ぜいで酒宴最中、踊り唄ひ總ての興を盡した一座は、同じ樣に廿九歲の厄年揃ひと言ふ所から、幇間叶八の發案で、一年の五節句を一日で取り越し、後は豆蒔きで、厄年を越すと言ふ趣向をする事となり、その趣向をしないものは罰として桝盃で酒を吞ますと言ふ罰則附で、いよ〳〵正月は金三郎が踊り、三月は久兵衞の番となつたが、踊りを知らない彼は當然桝盃で酒をあふらねばならなかつた、一年の五節は通り越し、愈々豆蒔きとなると、定之進は、再び久兵衞に年男の役を所望した、これまで既にしたゝか吞まされてゐた久兵衞は持ち前の酒亂を起し、大切な小判の封を切つて立ちよると、定之進の顏に小判を投げつけ驚き怒る一同には眼もくれず、續いて座敷一面に蒔き散らさんとする時、おせいと一所に出て來た松山太夫は皆を押とゞめ「この松山が二世かけた一世かわらぬ殿御と言ふのは久兵衞だと齒切のいゝ太夫の言葉に、芝田はカツトなつて太夫の傍に寄らんとする、久兵衞は再び「鬼は外」と小判を定之進に投げつけ「福は内」と松山に手をとられる……

椀屋の別寮、常足の二重、三尺の廻り椽、上手の褄は茶立口、正面は屋根附の中門四ツ目垣、幕があく。　嘉右衞門は人拂ひを願つてお預かりの金子五百兩、今日中の刻までに差し出せよとの柴田定之進からの急な催促狀を



見せる、お金の都合は出來るが、豆蒔きの趣向から封印切つたその咎めは、お家の大事に關る事、例へその身は投げ出してもお家の祟は逸がれぬと、主思ひ家想ひの嘉右衛門は、唯この上は但馬様のお慈悲に縋るより道はないと、邸をさして出て行く。

入れ違つて心の憂さを酒に晴らす久兵衛は許婚のおさんに支へられて出る、醉ひ醒めに「お茶」といふおよしの言葉を「熱燗でグットー杯」と酒に氣を吐く久兵衛を母の手前におさんが心使ひ……およしはそれも制して「先代の三回忌酒は母が許した」とおさんに酒の支度を命じ、酒の用意の出來るまでと、細川侯から拜領の繻珠織、亡父久左衛門がお家の寶と秘藏した十德を出し「椀屋の暖簾に疵はつけてたもるなや」と行先々を戒める。折柄精進物で酒の用意が出來たので、久兵衛とおさんに內祝言をすゝめるが、茨木以來松山太夫に魂を打ち込んだ久兵衛には母が手づからの夫婦杯も氣に染まず、心にもない無法な詞を並べてゐると、立ち聞いたおさんの父壽德齋は、娘を連れて去り、何事か決心した、およしも跡を追ふ。久兵衛は起きあがり、二人の跡を伏し拜み、折よく庭の燈籠に火を入れに來た佐兵衛に本心を打ち明け名乘つて出ようとする所へ、嘉右衛門の知らせで、母親およしが、名乘つて出る途中定之進に繩目の耻を受けたと聞いて發狂する、松山も久兵衛の身を案じて來るが、淺間しい物狂ひに悲嘆にくれる、然し但馬主膳の情ある計らひで、椀屋一家の罪は赦され、柴田定之進は捕へられ、人々の手厚い介抱で正氣にかへつた久兵衛には、おさんを本妻に、松山を愛妾にと、主膳直々の媒介に人々歡喜のうちに……幕

喫煙室

蓼雨

「今、文樂座が燒けて居ますッ」

宇藤たか子は物凄く叫むだ。

干時、大正十五年十一月二十九日の正午前

F、K、Nの三氏と僕は自働車へ飛び乘つた如何に氣が燥つても、五六分はかゝる、運轉手を激勵して思ひ切りスピードをかけ他の自働車を追ひ拔く數臺、三四分で信濃橋へ來た確つかり者の宇藤さんでも、狼狽へて、附近のボヤと電話を聽き違えたのではあるまひか?、と自惚れて居た四人も、北の御堂さんの彼方にあたつて、黑い煙が渦を卷いて天を焦がして居るさまを見ると、胸にドキつと來て愕然色を失ひ二の句が次げなかつた。

京町橋では群集を堰き止む可く、つけし劔の査公が非常警戒線を張らむと綱を捌きつゝある名狀す可からざる大混雜の中を、拔けつ潜りつ泥靴の儘、正門前のお馴染の善積砂糖店と石田屋三味線店へ驅け込み、松竹本社との電話の連絡をとつた。

數十本のホースは空に向つて水柱を立てるが乾き切つた文樂座は煙の山、火の海と化し御靈神社の屋根へ南風が煙を吹きつける。境內に乾いたホースが一本、平素麵のやうに延びて居る、モウ外に水詮が無いらしい、火の粉が散らぬ間にと飛び込むで手繰りかけると、K氏が狗犬の前へ來て危險と遮る。

聽て檜皮葺の御靈本殿はヂリ〳〵焦げ、拜殿の八ツ棟の破風から怪火がチロリ〳〵舌を出す。

噫、無慘、遂に文樂の棟は地響立てゝ墜ち、同時に大勢の悲壯な叫び聲、寔に言辭の外に慘ましい光景。

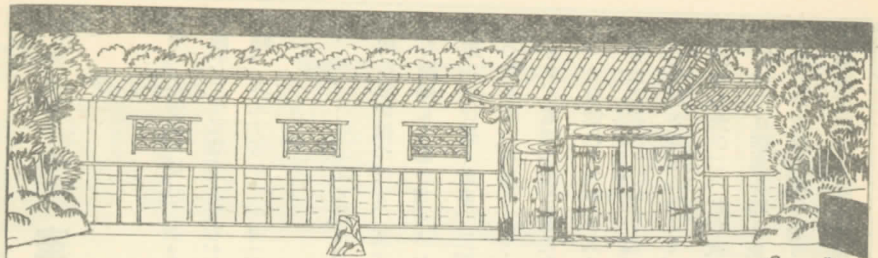
斯くて全市の各消防隊、警官、在鄉軍人、青年團及び附近の人々の決死の努力により午後一時過に鎭火した。

僕が引揚げる際、塒を失ひし無數の鳩が裏門へ文字通りの鳩首して餘燼を眺めつゝ、けふの遭難を語つて居た。

文樂座は大阪の名物である、文樂を有するのは大阪の誇りであつた、同胞の同好者は無論歐米から帝國を訪ふ人は、時間の都合で、假令、五重の塔、大阪城は御免蒙つても文樂のみは屹度觀て、松島、橋立、嚴島の風光は歐米にも求め得らる、唯、文樂のみは地球の兩牛球に無しと口を極めてお世辭をならべ、母國への土產に操人形の寫眞を求めぬと耻として居た。

この世界無二の我が文樂座は膠も無く燒けた什ういふものか、從來文樂座の收支償はず、松竹合名社は隨分久しい間幾多の犧牲を拂つて居る、されど日本特有の名物を此儘葬るに忍びずと白井社長は再築を言明した。

あゝ、此古典藝術殿堂の再現を待つものは啻に同胞にのみ止まらず、海の彼方にも待つて居る。



才一場

中座初春興行上演

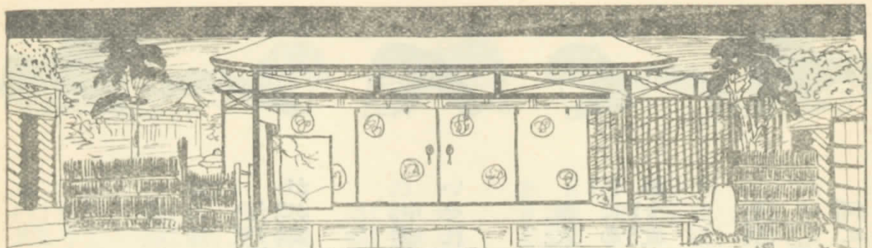
大喜利『嫗山姥』に就て

鮭之助

支那思想でいふ山姥（山姑）とは山中に住む鬼女の類で人の子女を盜むなど支那の書に傳へてゐる。佛敎で山姑といふは輪廻無窮の體の罰である。山とは世界、姑とは凡夫の意で、卽ち一切衆生輪廻止むことなく生死に沈淪するを『よし足引の山姥が山廻りす』と偶意したのである。謠曲で有名な『山姥』はこれから作られたものである。

この謠曲『山姥』に依つて、これに源賴光とその四天王の說話を附會して作られた狂言が正德二年七月大阪竹本座上塲の近松門左衛門作『嫗山姥』である。作者は當時有名な女形荻野八重桐の藝風を山姥の題材に採入れて、その役名まで荻野八重桐（後に山姥）と名づけられたのである。當時の女形の一つの法式として成るべく言葉少くすることであつた。その慣例を破つて口數を多く利くこの塲面を特にしやべりと云つたのである。『嫗山姥』の八重桐廓噺を歌舞伎に移入したのは嵐雛助が最初で、卽ち寛政七年三月大阪の角座と同年の八月京都龜屋座で演じて大好評を博してゐる。

この狂言は後の歌舞伎に多大の影響を及ぼしてゐる。第一に賴光四天王を世界とする顏見世狂言に種々の趣向を授けた粉本となつてゐる。第二には二段目の八重桐廓噺の塲は今日でも『嫗山姥』としてその儘に上演されてゐる。第三には四段目の切の山姥の山廻りの



才二場

振事は清元や長唄や常盤津の所作事『山姥』として獨立の進化を遂げて今日まで傳へられてゐる。

坂田藏人時行は親の敵物部平太を討たんと田葉粉屋源七と身を扮し、兼冬公の息女である澤瀉姬の館に來て三味線を彈いてゐる。處へ妻の八重桐が尋ねて來て親の敵を討つ迄と別れたのは男の浮氣で、その證據には若い女に交つて三味を彈いて遊んでゐると怨じる。親の敵は妹白菊が小夜の中山で討取つたと澤瀉姬の腰元になつてゐる白菊から知れたが、その白菊が自分の許嫁の澤瀉姬の許に隱まつたのを戀の意恨により正盛と右大將高藤が讒言した爲めに賴光公は勅勘の身になられたと聞いて時行は正盛、右大將を討たんと云ふが威勢盛で、討てぬと八重桐の言を聞き、三日以內に力は萬人に勝れた人間となつて汝の胎內に今一度生れて來て正盛、右大將を亡ぼすと言つて切腹する。そして其生血を八重桐に呑ました。その八重桐は直に懷胎、足柄山中にて其子を育てるに到る。

これが今度中座で上演される狂言の梗概であるがこの『嫗山姥』は『前太平記』を世界とする顏見世狂言の所作事として度々繰返された後、今日の獨立を見たのである。

山姥の所作事の最初は寶曆十二年七月江戸市村座の『織殿軒漏月』であると言はれてゐる。次いで安永四年冬京都早雲座に於ける嵐小六の山姥と雛助の快童丸が一世一代の所作とし評判だつたのである。

その後清元や長唄や常盤津や富本等の江戸劇塲音樂を伴つて今日になるまでには『山姥四季英』長唄連中、安永九年市村座、『四天王大江山入』常盤津連中、天保六年桐座『冴山路菊月富』富本豐前太夫、豐竹越後太夫、寛政十二年市村座、『月花茲友鳥』清元延壽太夫、文政六年市村座、『頭雪男山姥』岸澤連中、元治二年守田座等と徑路を踏んで來たのである。その歌曲で現存してゐるものには清元と常盤津がある。

定式幕に就て

食滿南北

江戸の定式幕を大阪が眞似してゐるのも見識がない、大阪は大阪で道頓堀の五座を色分けにするといつた事が必要だといふので、それを選定する事になつたのです。

×

中座が赤で赤座だなんてそんな不眞面目な事を云はないで、もつと／＼眞摯な態度でえらまなければならないそれでも何かよりどころが必要である。

×

辨天座は竹田だから青、浪花座は浪だからみどりといつた風に初めは一應標準をつけて行つて、それを又五色にあらはして見て、どうも思ふやうに配合が行かないので、又改めて見たりして、とう／＼出來あがつたのが今度の色分けになつたわけです。

×

三色といふのはおさまりがいゝが五色といふとちよつと複雜になりすぎるきらひはないでもない、しかし江戸の定式のやうに見馴れてくればこれも亦大阪の芝居情調の一つになり得られるだらうと確信してゐる。

何にしても道頓堀の定式といふものをこしらへたといふ事が大阪として一つの誇だと思ふ。

木谷蓬吟

江戸の常式幕を用ゐ始めた年代は不明なれど、市村座と河原崎座とは紺、柿、綠の三色幕を用ゐ、中村座だけは紺、柿、白の三色幕を使用したり、後には紺、柿、綠の三色幕が、江戸歌舞伎を代用する常式幕として一般的に廣く用ゐられ、大阪の劇場にまで波及したことは、現在の如くである。

何故、この三色を用ゐたかと云ふ理由も記錄には見付からぬが、理由と云ふやうなことなしに、配色のよいものを並べたに過ぎないのではあるまいか、獨り中村座が三色のうち綠の代りに白を用ゐたのには何か挿話がありそうにも思はれる。

×

東は東、大阪は大阪で、別な定式幕があつてもよい筈である、今日まで大阪が東京の定式幕を模倣して居たのは意義のないことである。

道頓堀五座の櫓に、各座專有の座色を定め、卽ち

辨天座は綠色　朝日座は茶色　角座は紺色　中座は燕脂色（赤色）　浪花座は藍色

と、各座その特色を持して、美しく競爭を見せるのも面白からう（但し此色分けには何の理窟も含んで居ない。）五座の五色を統一して、五色の定式幕となる、これが卽ち道頓堀を表象する五色幕である、換言すれば大阪の劇壇を表現する旗じるしである。

道頓堀に一つの新な情景が加はり芝居氣分を、より濃厚ならしめるに違ひない。

×

斯うしてクツキリと色分けされた各座の當局者は、これから一層その座特有の色彩を凡ての上に、外面的にも内面的にも表現することが出來れば更に一層有意義であらう。

竹本座の假屋興行

南木萍水

文樂座が燒てから、初春興行は取あへず道頓堀で操に最も緣故の深い辯天座、舊竹田の劇場で開演する事になつた。思ひ出の多い道頓堀に復つた事も懷古の一つではあるが、それより痛切に心附いたのはその昔、道頓堀にあつた竹本座が類燒して、文樂座と同じ憂目に遇ふた時の假屋興行の事である。これは今日迄誰もが書いて居らぬ筈であるから此際少し叙べて見ようと思ふ。

話題は私が藏する院本の中で珍しいものを見付けたのに始まる。それが竹本座の宣傳用として發行されてゐるから一層興味を覺えるのである。先づ時代からいふと、時は寶曆九年巳卯五月吉日、版行は正本屋山本九右衛門の手で・紙數なら僅半紙版で十五葉、表紙題簽には用明天王鐘入の段、竹本筑後椽直傳とある。たゞそれ丈けの說明ではなんの變哲もないから表紙を開けた第一頁の口上書を紹介する。

乍憚口上

此度芝居類燒仕候處町中樣御ひいきの御力を以て、人形衣裳小道具迄、つゝがなく殊に芝居ふしんの立て具等下し給り候によつて早速假屋芝居成就仕候事難有奉存候、右御禮の爲め且は御最負のあつき次第を遠國までも風聽つかまつりたく候に付、假屋芝居興行の圖を妥にしるし申候、尚御心かはりなく打つゞきはんじやう仕候樣に奉願上候　以上

その裏面の一ページには西川風の書で假屋普請中の小屋前の圖がある。建築材料が推高く積み重ねてある入口に立つて、宰領風の士が御祝らしい酒樽を馬に積ませて曳いて來た馬子に何か指圖をしてゐる。その後方には敷物らしい大きく卷いたものを二人の男がさし荷ひで來かゝつてゐる。丸太の材木を積んだ數人の馬力が車を止めて何か言合つてゐる。旅人らしい男女數人が立留まつてそれを眺めてゐるといふ構圖で珍しい口繪附きである。

その次のページから本文になつてゐる。用明天王鐘入の段竹本出雲椽と署名されてある。冒頭は「つくりし罪もきえぬべし、つくりしつみのおもたきを」からで、謠かゝりとなつて「是は此國のかたはらに、げす奉公のつとめを致す、まゝたきの女にて候」の出になる。この景事の本文は中々長くして、いよ〳〵鐘入の段となり「涙川戀の氷にとぢられて」の語り出しから最終の太夫と名付けそめけるも尾上の松のいはれかや迄が收錄されてある。そして末尾に左の挨拶が附記されてゐる。

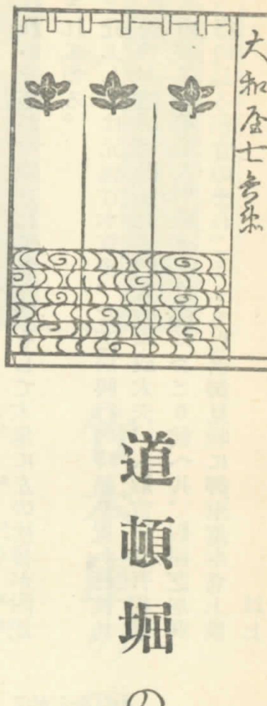
此ふし事は元祖竹本筑後、當芝居興行の時語り置かれ候共後竹本播磨相勤候此度門人竹本政太夫、人形吉田文吾相勤申候、淨瑠璃人形前々とは違におとり候へ共、假屋芝居興行のしるし昔のまねごとゝも思召御見物に御來駕奉希上候
以上

惟ふに寶曆九年は竹田出雲死後三年目に相當する（出雲歿年は寶曆六年十月）この時代は出雲の父近江が代つて竹本座を經營してゐたが、內部にゴタ〳〵があつて、稍衰運の兆があつた時代である。

末尾に斷書されてゐる通り、太夫も二代目政太夫であり、人形も吉田文吾である。名人吉田文三郎（文吾の父）は出雲死後、近江と意見が合はず脫退した後で座組の上にも凋落の色が見えてゐる。搗てゝ加へて類燒といふ御難に遇ふてゐるから、茲もと興行は捲土重來の覺悟を以て開場したものと見え特に一般の同情に訴へてゐるが、出し物も緣起を祝ふて、且つて寶永元年に出雲が義太夫から引受けて座本となつたときの紀念興行である『用明天皇職人鑑』を再演したものと見へる。

この更新興行の事が何處にも考證されてない。現在で批較的纒まつてゐる高野氏の淨瑠璃史にも揭げられてないのと、今度文樂が道頓堀に再擧の紀念興行とに因み、甚だ纒らないが一寸記して置く。

（十二月十九日）



道頓堀の初春興行

油屋久二

新春の氣分を濃厚に色彩るのは何を言つても道頓堀各座の初春興行のお芝居であらう。此度は中座と浪花座に關西大歌舞伎が久し振に二派に分れて大名題俳優を網羅するといふ素晴らしさ。尙燒失後の文樂座が取敢ず操人形に緣故の深い辨天座（舊竹田の芝居）を假屋に引越興行をしてゐる。また角座は新興新派を目標に奮起した喜多村一派が倦土重來の意氣で熱演を見せてゐる。そして道頓堀の初春の夜は心も躍る柝の音に明け暮て行く。

中座

中座の吉例大歌舞伎は鴈治郎大一座として福助、右團治、長三郎、魁車、莚女、吉三郎、市藏、我童、扇雀、鰕十郎、雀右衛門等を含む大顏觸れで、狂言は一番目高安月郊氏作「關ヶ原」二幕、中幕玩辭樓十二曲の内「敵討襤褸錦」（大晏寺堤の場）一幕、次は勅題に因みて「青海波」干支に因みて「卯の花」楳茂都扇性師振付・清元連中、二幕目玩辭樓十二曲の内「椀久末松山」二幕、大切「嫗山姥」廓咄しの場で鴈治郎が自家藥籠中の逸品二篇をもつて大活躍してゐる。

浪花座

浪花座の大歌舞伎は巖笑、扇雀、壽三郎、愛之助、荒五郎橘三郎、大吉、延若等の大顏合せで、こゝは新作物を主とした狂言にて晝夜二部興行となつてゐる。

晝の部は第一「七福神寶珠入船」常盤津連中、第二正宗白鳥氏作「勝賴の最後」二場（改造所載、田中總一郎氏舞臺監督）第二「近江源氏先陣館」盛綱首實檢の場、第三「紙子仕立兩面鑑」（大文子屋の場）となつてゐる。

夜の部は第一中村吉藏氏作大森痴雪氏舞臺監督「小山田庄左衛門」三場（新小說所載）第二篠山吟葉、大森痴雪氏合作・同氏舞臺監督、新作「蜂須賀と小猿」（サンデー每日所載）二場第三宮崎三味氏作・春陽堂發行「鳰の浮巣」三幕、第四「當干支杵の望月」長唄連中と盛り澤山である。

角座

角座は喜多村、花柳、英、藤村、柳、松本に梅田重朝等を加へた新興の意氣漲る新脚本揃ひで、第一吉井勇氏作瀨戸英一氏脚色（本誌所載）墨水十二夜「小春髮結」五場、第二菊池寛氏作「盆栽」一幕、第三瀨戸英一氏作「小猿七之助」二幕を上演してゐる。

辨天座

辨天座は文樂引越興行で東都淨瑠璃界の重鎭朝太夫、松太郎が入座し人形遣ひ簑助改め二代目桐竹紋十郎の襲名披露あり、紋下津太夫、土佐太夫、古靱太夫以下一座總出演である前狂言「繪本大功記」大序より十段目迄、中狂言には夕霧二百五十年忌に因む「廓文章」を据えて次狂言に「合邦ケ辻」合邦家の場を出してゐる。切はお夏淸十郎「湊町」であるが文樂座燒失後一般の同情を引いてゐる際とて一座の熱演が看客を呼んでゐる。

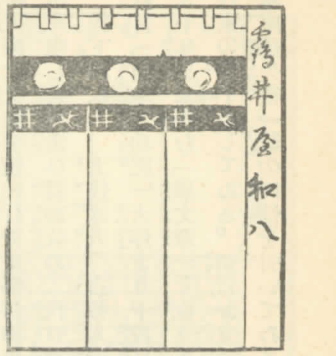
二代目桐竹紋十郎

文樂座專屬の新進の花形吉田簑助（本名磯川佐吉）は此の度初代桐竹紋十郎を襲名して、二代目桐竹紋十郎と改名した同人は泉州堺の出生で、當年廿七歲の靑年であるが、九歲の春南常盤座に、現在の師匠吉田文五郎を見たのが、當人が淨界に投ずる動機とも云ふべきで、兩親の反對があつたにもかかはらず、近隣に住んでゐた義太夫好きのさる人の紹介で、前記文五郎の門に入つた。

然しそのころ脊の低い當人は、人形の股の下に入らせられたり、かいかげうちに廻されたり、脊が低いために、人一倍の苦勞をしたが、その甲斐もなく、十一歲の時一旦文五郎の許を去らなければならないと止むなき破目に到つた。

以來二三年旅役者の群に投じ、ひたすら流浪の身であつたが、先年近松座が生れると同時に、歸門したのである

因に當人が文五郎の門に入つたのは、明治四十二年で、同年九月盆替り興行の市の川の堀江座が、初舞臺であるが、現在は道頓堀辨天座の文樂引越し興行に、襲名第一回の華々しい舞臺を見せてゐる。



大正十五年度の道頓堀

中井泰孝

道頓堀の大正十五年度は、殊に新派劇に於て、興行的効果の可否は別問題として、可なり潑溂な運動の展開された年だつた。進展遲滯、動靜甚だ不安な渦巻の中に、築地小劇場の來阪（道頓堀ではないが）井上澤田兩君の對抗戰喜多村花柳一門の旗擧、近くは山口一派の所謂捲土重來、時に花柳、英、藤村諸君の松竹座試演など、それ等は何れも、餘りにも深い惰眠に陷つて居た大阪新派劇に向つて亂打された警鐘であつた。今更此れを語つて新派劇の凋落を笑ひ、新劇の勃興を悅ぶには　餘りに時代は遠く過ぎ去つて居るが、然し悲しいかな、我大阪に於ける新派劇はその遠く過ぎ去つた時代から置てきぼりを喰つた浮浪者だつたのだから、萬止むを得ない次第である、然し新派劇が此れほどまで時代の下積にされ、まるで廢物視されるに至つた事は、之れを一言にして云へば、時代だと云ひ得るが、畢竟劇團それ自身が、餘りにも時代に對して不要意であり、餘りにも無能力であつたからである。要するに新派劇發生時代の民衆生活と民衆文化の發達した現代の精神とを混合する事に依つて當然生ずる時代錯誤を忘れて居たからである、此の間角座に上演された一本杉が好い例である、人物の服裝、台詞の云い廻し、各ゼスチュア、それ等は近代劇の演出と少しも變つた所はないが、此の劇の一つのテーマである飛行機製作所を五萬圓で建てたり、僅か東京から仙臺まで飛んで萬都を熱狂させた、と云ふ樣な事は、恐らく今日の子供でも嘲笑する程馬鹿氣た話である。然し此の時代錯誤劇を上演した事が愚劣だと云ふのでは勿論ない。或る時代の民衆生活をそのまゝ今の世に展開して見せると云ふ意味で、時に恁う云ふ物を上演する事は寧ろ興味ある事である。然し只徒らに古い物に現代の着物を披せて、折角の其當時の所謂時代精神を失つてはならないのである。卽ち之れが今日の新派劇が、民衆の欠呻を招起させた最大原因である。

　では新派劇と云ふものは、全く滅亡するかと云ふと、決してそうではない、新派劇は新派劇の行き方、卽ち徒らに新劇かぶれする事を愼んで、目を剝く可き所は大に目を剝き、怒鳴る所は大いに怒鳴り、聊かもその時代の心持を失はない事に依つて、十分存續させて行く可能性を持つて居る。

　然し劇の凋落と云ふ上から云ふと其の罪は一方一般觀衆にもあると思ふ、何故なら觀衆もまた演劇に對して甚だ不用意であり不眞面目だつたからである、演劇は勿論舞臺上に於てのみ成り立つものではなく、舞臺と觀衆との合瘤に依つて構成されるもので、要するに觀客の力瘤は直ちに舞臺の上の力瘤を生むのである、一般民衆の生活及權力の眞面目な發達に依つて演劇もまた昂上助長されるからである。

　恁う云ふ點から考へて、今度蹶然新派劇から足を洗つた。イヤ決然として大阪に於ける新派運動の先驅者として立つた喜多村氏の進行方針を聞くと、出し物の中に所謂新派風の物を組合すると云ふ事だが、それは折角の意義を損するだけで決して當を得た方針ではないと思ふ。勿論興行政策上、二た色の觀客を吸收しやうと云ふ、つまり狡猾な戰術でもあり、且つごつちに轉んでもと云ふ萬全を期した方針だと云ふのだらうが、それは全く杞憂に過ぎないと云ふ。則ち從來の新派劇が凋落して行くと云ふ事は、同時に新劇勃興の機運に近づいて來たと云ふ事なのだから、此處は一番斷然枯息な方法を止めて、遲くとも健實の一步々々を進めて貰ひたいと思ふ今更新派劇が生さぬ仲に依つて集めた人氣を羨むにも當るまい、その反面には新しい芝居に飢ゑて居る近代人が日に〳〵生れつゝあるのだから。

　大きな原野の開拓も先づ一鍬の光りから堀り起されて行くペンは此んな所へ來る筈ではなかつたんだ、ペンは大正十五年度に於ける收獲の桝目を量つて見るつもりだつたんだ。

　春以來上演された主なるものを擧げて見ると。

茲善小屋、嬰兒殺し、白狐の湯、磔茂右衛門、盜人、殉死、劍、富岡先生、地震、正體、隣家の夫婦、吹雪の町、次郎吉懺悔、幸運閃及悲話、海の勇者、狼その他の十數種と云ふ數である、そのうち面白いと感じたもの二三を擧げると狼。（築地小劇場）大阪への土產に最も適當なものとして撰んで來ただけあつて、大阪人にも相當感興を湧かした

然し一般觀衆には、まだ〳〵珍奇な品物として扱はれたらしい。

白狐の湯。(花柳、キチースラビーナ)舞臺の可否は扨て置いて、可なり自他共に反響があつた樣だ。

磔茂左右衛門。(井上一派)つまり東京の評判の餘波だつたに過ぎない。

盜人。(井上、花柳、山田)

殉死。(井上、花柳、大東)

此の二ツは一般に受けもよく、また誰が見ても、すばらしく面白いものだつた、特に大東の傑作を附け加へて置く。

劍。(澤田)その演出に興味を引いた、澤田と云ふ人は、どこまでも政界的で進む人だ、此の次には、どんな珍しいものを持つて來る事だか。

隣家の夫婦。(喜多村、小堀)田中總一郎氏の落着のある演出を先づ特筆したい、喜多村小堀兩君の眞面目な演技は見て居て氣持がよかつた、ひどく整つた芝居だつた、恐らく今年中の大きな收穫だつたらう。

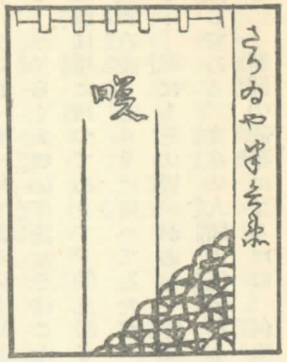
幸運。舞臺裝置が狼のそれとあまり似過ぎて居て、一寸妙な氣がした、然し面白かつた、英君の若者は特筆に價する。

次郎吉懺悔。(喜多村)今までと違つた次郎吉に出會した、兎に角うまいと思つた。

來年はどんな芝居を見られるかな。

◇中座初春興行役割一覽◇

春藤治郎右衛門、椀屋久兵衛(鴈治郎)石田治部少輔三成、春藤治兵衛、扇屋松山太夫(福助)加村宇田右衛門、萬歲、天滿屋喜之助(右團治)春藤新七、才藏、分銅屋金三郎(長三郎)侍女萩江、萩木屋おせい、腰元おうた(霞仙)淀君、中老、番頭喜右衛門(魁車)本多正信、須藤六郎右衛門、寮番佐兵衛(齋五郎)福島左門太夫正則、彥坂甚六、柴田定の進(箱登羅)饗庭の局、母親およし、妹白菊(蓮女)三玄院圓鑑國師、但馬主税、莨屋源七、實は坂田藏人(吉三郎)大谷刑部少輔吉隆、高市武右衛門(市藏)黑田長政、殿、萩の屋八重桐(我童)淺香庄次郎(扇雀)息女澤瀉姬(ひさし)細川忠興(政治郎)小早川秀秋、寒修行西念、爺親壽德齋(鯛十郎)許嫁おさん(雀右衛門)



「椀久」と「夕霧」の斷片

石割松太郎

◇……古い傳説の劇化されたものゝうちで、「椀久」の松山、「夕霧伊左衛門」の夕霧の如く數多い、いろ〳〵な方面に作を殘したものも少い。元來の傳説に劇の分子が豐であつたこと、相像を逞しうするだけの餘地が、それらの傳説にあつたとらが、淨るりなり、芝居なりにされる機緣を多く持つてゐたのだと思ふ。

◇……この二つの狂言の系統を引いた。鴈治郎の「椀久末松山」と「夕霧廓文章」とが、この正月の中座と、辨天座の文樂座假屋興行に出ることゝなつてゐる。

◇……「椀久」は、たしか鴈治郎の謂はゆる「玩辭樓十二曲」の一つであるが、渡邊霞亭翁の作で、鴈治郎に切はめて、理詰めで筋が運ばれてゆく、恐らく鴈治郎一代の作だと思ふ。──だとすれば「椀久」を主題の作品としては長唄の「二人椀久」などが、最も後世に殘る作であるかも知れぬ。と、私のいふのは、「二人椀久」がすぐれていゝ作だといふのぢやない、あの曲節が傑作なのだ、尤も「二人椀久」の趣向は、享保十九年の江戶市村座にある、長唄では松島庄五郎、阪田長四郎の掛合だつたといふが、今日長唄に行はれてゐる「二人椀久」は、初代錦屋總治の節付で、安永三年の市村座に出た所作だが、長唄の松永忠五郎が好評を博したといふ事である。

◇……錦屋總治といふ人の節付が、恐らく長唄中の最大傑作であつたらうと思はれる。一體に「椀久」の題材は、狂亂が付物で又この狂亂が賣ものゝ一つだとすれば、どうしても所作の題材だ、これを地藝ばかりでゆくのは考へものだ。

◇……「椀久」の敵唱が松山だ、新町で松の太夫だ、その新町の扇屋の抱へ「夕霧」も「椀久」の傳說同樣、いろ〳〵な說もあり、いろ〳〵な形に劇化された作があるが、これは何よりも、常盤津が一等流行してゐるやうだ、だが、この常盤津の、「夕霧」を、松尾太夫がやると、空氣が異つて來る、何としても新町九軒の樣子が淨るりに出てゐなければならぬ、「吉田屋」に江戸辯は禁物だ。

◇……私は、今の俗曲家のうちでは常盤津の松尾と長唄の小三郎が、一等好きな藝だが、それでも、松尾の「吉田屋」には感心しない、「九軒の吉田屋」でなくて、「吉原の吉田屋」だ、大阪の常盤津連中が、生れながらの上方辯を持つてゐながら、吉田屋を語ると下手な「吉原の吉田屋」をまねようとする、笑ふべきの一つ、分らぬ話の一つだ。

◇……分らぬといへば、吉田屋に珍藏してゐる夕霧の文だ、宛名が藤屋の伊左衛門になつてゐる、「由良之助」と書いた大石良雄の眞筆があつた、「由良之助」と書いてある、それが珍しいのだといふ落語のやうな笑話があるが同巧異曲だ。この文を鏡臺の抽斗に開いて見ないで藏しておくと着物がたまるといふことを、新町では言ひならはしてゐる、へんな迷信が生れたものだと思ふ。

◇……江戸の高尾、京の芳野と並稱された浪速の夕霧は、一代の名妓であつたことは事實であらう、その夕霧の死んだのが延寶六年の正月六日で、その二月に「夕霧名殘の正月」が、阪田藤十郎によつて演じられてゐるのだ、藤十郎得意の傾城買の狂言、大盡が「藤」屋であるのも故あるわけだ、この藤屋の旦那が現存の人らしくなつてゐるのが面白い。

◇……恐らく大抵の傳說などはこんなものだ、いつか鴈治郎が唐津屋榮三郎を演じた時に、去る泉州堺の人が、今でも唐津屋の跡は堺に殘つてゐます、榮三郎といふ人があつたか、どうかは分りませぬがといふ誠しやかな話だつた、鴈次郎がこの唐津屋實在說をしきりに傳へてゐたが、蔭で舌を出してゐたのがその作者である。

◇……私にもその經驗がある　嘗て某新聞社にゐた頃、衛生博覽會とその社の主催で催した、その出品のうちに大阪醫大に珍藏してゐる、文身の人間の完全なる剝皮を出品してもらつた、醫大ではこの皮についての何等の傳說がないといふ事だ。

◇……新聞の記事にするには、何等の傳說もないといふ事では興味がない、何でもかまはぬ小說をかくつもりで、この「文

身の皮」から、想像を逞しうせよといふのが、その時の社長であつた政友會の吉植庄一郎氏の注文だ。私は想像のつけようもなく、何かの筆拍子でこの文身の女を、長崎丸山の女郎屋の一人娘の小川お糸と捏造して、筋は談州樓燕枝が大阪屋花長と梅津長門の情事を當はめて續きものを執筆したのであるが、これが、どうしたのか、「傳說」となつて去る人の筆で堂々とその後出てゐたのに驚いた。

◇……驚いたのはそれのみでなく、源之助が、この小川お糸を淺草の芝居で演じてゐたのを觀たをりと、去る展覽會に右の文身の皮が「小川お糸」の生皮だと說明してあつたのを見た時とは、全く私は冷汗をかいたのである。

◇……夕霧が死んで、墓が諸所にある、伊左衛門宛の文があつたり、夕霧はすが眼であつたりする傳說は、どうせいゝ加減な事だと思つてゐる。ところで、その夕霧の二百五十年忌が、本年に相當するので、吉田屋ではいろ〳〵な催しものゝ、企てがあると聞いたが、木谷蓬吟氏の話に、吉田屋の記錄を調べると、五十年毎に夕霧追善の茶會が催されてゐる、その百五十年忌か二百年忌かに催された茶屋の記錄の一つに「藤屋伊左衛門通家なにがし」といふのがあるさうだ、蓬吟氏はこの「通家」に疑問を置かれて、「通家」は緣者の意味で、このなにがしこそは藤屋の緣邊子孫の人ではない?、すると藤屋は現存の大盡ではないか、だそれけでは薄弱だが、面白い問題だと、その新發見を語つてゐられたのを聞いた。

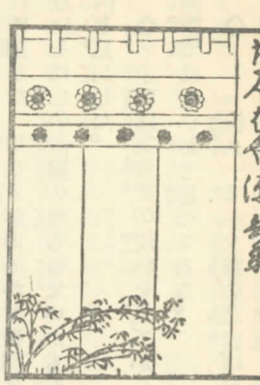
◇……私はその茶會の記錄の現物を見ないのであるから、何もいふ資格はないが「通家」といふ言葉に「緣者」若しくばそれに類した用ひ方があるかゞ疑問に思つて手近かなところを調べてみたが、「通家」に緣引きの意味の用語例が一つも見當らないそは私の詮鑿の至らぬせいかも知れぬが、分らなかつた。それよりも「通家」といふ言葉を「通人」と解釋していゝ用語例を見出した。

◇……私は茶會記の現物を見てからでないと何もいへぬが、洒落に場所柄「藤屋伊左衛門」と名乘る通人なにがしと戲れの洒落ではないかと思つてゐる。

◇……「椀久」と「夕霧の芝居ばなしを書かうと思つて、つまらぬ雜筆になつてしまつた、「吉田屋」もどきのだんだらの掛蒲團の炬燵にでもあたつて、日永の春の暇つぶしにでも讀んで下さい。（大正十五・一二・二一）

大晏寺堤漫談

富田泰彦



畏くも御惱みの、御小康の御容態を拜聞して、日夜御平癒の虔禱をつゞけて來た我々國民の、ホツと一ト息吹き返した心地のする日だつた。松竹の鳥江宣傳部長から『大晏寺堤』に就て何かを書けとの命令だつた。――恰度治郎右衛門が、「出ませい」「出をろう」と大勢の奴に引出された以上に、鳥渡狼狽せざるを得ない。――

何も敵討など云つた大望ある軀らだでは勿論ない。が、新聞記者と云ふ慌だしい職掌、而して慌だしい年の瀬に當つた此の非常事――迚も落着いた考も出ない。

『大晏寺堤』と、新春とは奈麼關係があるのか、初芝居には能く出る。三四年前にも出た。その時鴈治郎氏は「正月早早乞食を演らされた」と、不平を零したと云ふとが、私の小耳に狹まれてゐる。何うも俳優である以上、止むを得まい。況して玩辭樓十二曲の一つであり、仁左衛門、吉右衛門等に比較しても・ずうんと優れた折紙付の至藝、靑江下阪以上の腕の冴えを、おツと是れから見物さして貰ひませう。

『敵討襤褸錦』は大晏寺堤の前には、俗に正月場と云ふのが付いてゐるから滿更初芝居に緣故はないと云はぬ是れは穿鑿沙汰ながら。――

『非人の敵討』と云へば、隨分古い傳統を持つて居るとは云ふまでもない。歌舞伎から操り淨瑠璃へ、而して又復歌舞伎へと、還元された態になつてゐる。『淨瑠璃年表』では元文元年五月十二日竹本座上演で、作者は松田文耕堂と、三好松洛である。

歌舞伎の『大晏寺堤』の系統を逆叙すると、鴈治郎、中村宗十郎、尾上松綠、嵐雛助から中興の源が發しられてゐる若しそれを咀嚼的に云へば、今日の『大晏寺堤』の型が彼雛助から出てゐると云ふとに、誰しも見做してゐる。

鴈治郎氏のお手本となつたのは宗十郎であるとは、明治十七年一月二十五日の中の劇場の二の替りで、宗十郎の治郎右衛門、市川市十郎の加村宇田右衛門などに、弟次兵衛で出てゐる。加村方の奴の箱提灯が、隅切り角の三つ引、高市のは九枚笹と此時からきめられたさうな。舞臺に大勢な奴が出て賑やからしく箱提灯を差し出すに就ては、今の所謂氣分家には、兎角の非難もあるが、彼れは未だ今日の如く電燈設備の全くなかつた鯨蠟燭時代に於ける古名優が、考案した一種の照明法として、その頃では偉大な效果を齎したものだつた

宗十郎と云へば、彼も得意の出し物だつたに違ひない。既に明治十年東郡新富座の六月興行に左團次の高市武右衛門、芝翫の宇田右衛門で出してゐる菊五郎が、左團次の北向きの虎蔵で『孝士譽』の書卸しの善吉を出したのも此興行だつた。

『大晏寺堤』と云へば奈良附近にある關係から、高市とか宇陀右衛門とか何れも、此場の主要人物は、大和の地名を當箝めてゐるなどは、古い作者の常套手段と見える。――けふ不圖濱松國歌の『攝陽奇觀』八巻(浪華叢書)の一項に『近松半二名言』とありて、

「――前略――又近松半二敵討襤褸錦といふ戲文を書いたる時、道行對の花繇の文段に「備後の國はや立出て行先はあてども浪の吉井川(中略)急げばまはる車坂、いそがぬ顏でふら〳〵とのぼる兄坂 弟 坂親の敵を持し身は――と綴れるを執筆のものかの國の案内をよく知りたれば兄坂 弟 坂といへる所ありや我はしらざるよしいへり半二いふいかにも兄坂 弟 坂といふ地名今まではなし、もしやこの戲文發行なさば後世に至りて其名を呼ぶ坂も出來なんぞ、これ名言也道行の文段地名を委しく探るには及ばずたゞ聞とり安く風情ある名をおもい寄りて綴るべき事作者道の秘密也。

とあづた。天下茶屋安養寺に『紙治』のおさんの墓あり、逗子には浪子の遺蹟、熱海には『金色夜叉』の何々と總て此意味を事實に現してゐる。

『大晏寺』漫談は、とんだ横道に外れた私は此場に寒念佛を出さした作者の技巧には、いつも敬意を表する。彼の寒念佛は單なる仕出しとして片付けて貰ひ度くはない。彼の場の

三昧と云ふ情景に點綴された人物にして、而も時間的にも偉大な役目を持つてゐるからである。彼の寒念佛が、上手から花道の揚幕に入る間に、夜は更に深沈と更けたるとを、一度幕を引いた以上に意識さして居るではないか。

鴈治郎氏は、『石切梶原』の吉右、この『大安寺堤』の仁左の演出と對照しても、飽迄破綻を見出させないリアリズムを踏んだ、完璧の藝を見せて呉れる。その扮りの穢くした點から見ても仁左のは全然反對に非人の窶れをさへ見せぬ綺麗な顔で出てゐる。

――が此の仁左の綺麗扮りにも典據があるとだ。彼の『佐渡島日記』に　狂見の創始者荒木與次兵衛が――「其時の姿が病鬘にて、隨分黑々と油をつけ、顔のつくりも白粉濃くぬりうつくしく、……手足も隨分白くして」云々とある。要するに仁左は大時代にと覘つたのである。その代りに返り討になつて、傍の古地藏を斬り仆し、ソレに止めを刺すなどの珍型もあつた。

鴈治郎氏のはその與次兵衛以上の名人と呼ばれた姉川新四郎の系統を牽いてゐると云へる。『佐渡島日記』に、「宇田右衛門が敵討ちは命惜さに云ふとさん〴〵せめかける時、竹に仕こみし刀を抜きさし付青江下坂二つ胴に數腕、といひ聞かせさし付たる刀を兩手に持ちながら左の方へ引きよせ、調子を低くずんとよう切れます、へゝゝゝと會釋する」とある。

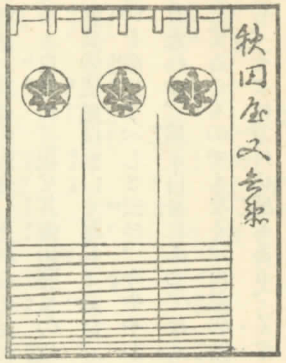
その演出は今の鴈治郎型とは凡ぼ似てゐると思ふ。

何しろ此處は、此狂言中の眼目の一つである。當て込まうと思へば、何うにでも出來る。鴈治郎氏のは『青江下坂二つ胴に數腕』で刀を左に取つて、宇田右衛門の鼻先へ突き出し更に調子を張つて「親」で宇田右衛門が「ム、」と詰るやうに聽き咎めると刀を裏返しに「重代でござる」と極まる、宇田が「ドレ」と右手を出すをおッ冠むせるやうに「イヤそれから御ろうじ」と刀を右へ取り「ハヽヽヽ」と大きく笑ふ此間の呼吸と云ひ、時代世話に落して行く擒縱自在な舞臺上の掛引や、その押出しの貫目や、非人ながらに品を持たした彼の演出には忽ち魅了されて終ふ。

何しろ『評判記』で『極上上吉』の位附で七回まで演じたと云ふその名優嵐雛助に比しても鴈治郎氏はその演出に最も警戒怠らざる殊に狂言の選擇に就てはいつも細心の注意を拂つてゐる東京劇壇に向つてすら既に前後二度も上演してゐる隨つて京阪其他の地方かけて、名譽の藝として幾度珍重されその觀衆の感激の渦の中に、この典型的な舞臺を展開されてゐるかは知れない。（一五、一二、一一）

新年劈頭の俳優觀

野村治郎三郎



◇初春を迎えて劇界の事ごもを思ふと所感尠からずあるとはいへ、先づ念頭に浮ぶのは、關西に於ける俳優の現在と將來に就いてゞある。

◇筆頭にあぐる中村鴈治郎には尙鑁鑠たる元氣あつて、若返り法の効果の顯著なるを思はせるが、その元氣さや若返りをば、所謂書き物と呼ぶ新しい脚本によつて、舞臺に活躍せしめることは、これまでは云はず、この後は成るべくはやめて貰ひたいものである。

◇それと云ふのは、今迄の新しく書かれた鴈治郎向きの狂言せは、相變らずのきれいさを利用して、色つぽい、若やいだ物になつてゐたのが、つまりはいつまで若い役でもあるまいこの考へによつて、氣を變へやうとして、老け役に持つてゆくのが即ち近頃の鴈治郎物の新脚本の覘ひごころになつてゐる。

◇それも幾度か見せられたが、演出者鴈治郎の拂つてゐる多大の努力と、慘憺たる苦心の割合には、その効果の作なはぬ憾みがあると思ふ。

◇まだ〳〵艶があり、色氣があり、若々しさがあり、元氣があり、きれいさがある、鴈治郎をして、舞臺に於けるその潑溂さを無視して、老け役をあてがうといふことは、いかに年齢から推しての役處であるとは云へ、その演技上の特徴を沒却し、年齢なしと謂ふ藝術家の得意さをも冒讀するものであつて、これが故に近時物せらるゝ鴈治郎に對する新しい狂言を忌避するの所以が生じて來るのである。

◇されば名優鴈治郎の今後は、同優に當て箝めて書いた名脚本狂言の出づるのを待つよりも何よりも、この上はもうこれ

までの當り藝であり、鴈治郎でなければならぬといふ折紙のついた所謂おはこ物を繰返しては上演して、その範を後世に殘すべきが、現在の中村鴈治郎の、當然採るべきみちであり且義務ではあるまいか。

◇それには特に擧ぐべきものゝみでも封印切の忠兵衛あり、天網島の治兵衛あり、引窓の十次兵衛あり、石切の梶原あり首實檢の盛綱あり、寺子屋の源藏あり、布引の實盛あり、廓文章の伊左衛門あり、等々の多きに及んでゐる。

◇此等の舞臺、卽ち型やら演出やらの好劇家を喜ばせる一面に、大いにこれを後進に傳へるといふ事は、眞に何かと意義あるものではあるまいか。

◇その鴈治郎そつくりのタイプをうつしたのに息子の中村扇雀がある、そこは父子の似るべきに決して不思議はなく、日常の起居　舞臺の動作、それらの始終の見聞よりして、たくまずとも自然に、親父其儘の藝風の現れるのを觀者にあつては、親父の模倣は面白くなしと云ひ、扇雀はよろしく扇雀たるものを發揮すべしと云ひ、今ややかましく云爲されつゝあるやうなれど、扇雀自身にあつてはわざとの擧でもなければ眞似してゐるものでもなく、自然の結果の然らしめるのであるから、そこに意外の感もあり、くすぐつたくもあるのであらう、それよりも扇雀たるもの、親父に似ぬやうの心掛よりも親父以上に演つて見るの心掛がなくてはならぬ。

◇その兄に林長三郎がある、關西に於ける舞踊の第一人者をもつて推されてゐる程に、賞揚たゞならぬものあれど、近來說を爲す者あり、長三郎としての癖が、舞踊に現れ來たやうであると云ふ、別に然うとは見えねども、他に痛切なる例のあることなれば、この苦言喜んで享くべきであらう、素直なる舞踊、洗錬された舞踊、これが舞踊手としての長三郎の生命である以上は、その生命を保持すべきこれも心掛を失してはならぬ。

◇そして扇雀にしても長三郎にしても、もつと／＼義大夫の練習に熱心せねばならぬ、……咽喉の鍛錬の上から。

◇中村福助にはこの上に、是非とも覇氣を持たしめたい、溫順、柔和、それもまことに結構なれど、引立役の鴈治郎のゐなくなれば奈何にする、一座を率ゐて權威を把持するなどの勇氣はとても望まるべくもなく、そこに心細さが頻である。

◇中村魁車の舞臺功者は今更ならねど、その巧者振いよ／＼極に及んでくさくもやればさらりともやる、所謂圓轉滑脫の藝とも謂はうが、然も所作事に熱中するなど眼先の利くことまた巧者である、この巧者づくめの魁車の將來には、何事か

の成すことを大いに期待されてゐる。

◇嵐巖笑の絕へず舞臺を動かうとする心意氣はうれしく、この心意氣の演技の上にも及べば、いかにうれしかるべきにと思ふ。

◇片岡我童の進境は、眼覺ましきばかりである、されど樂屋に於ける小言のなか／＼に激しく、一座する俳優の上下を擧つて眉をひそむるは何としてゞあらう。

◇實川延若の技倆の程も確實に認むとはいへ、達者にまかせて、役柄であらうと、役處であるまいと、更に夫等に頓着なく、只々當るを搆はずに演つゝける惡癖惡習は、くれ／＼もいたむべきところ、これが爲には時に、延若たるものゝ眞價を疑はしむることがある。

◇市川右團次の熱演振は近頃特に著しい、これによつて隨分の難役をも、意外にこなし得たる實例は一再にあらず、お家藝のけれんは遠慮なくどし／＼用ゆるがよい、次から次へと繰返して決して興味をうしなふ恐れはない。

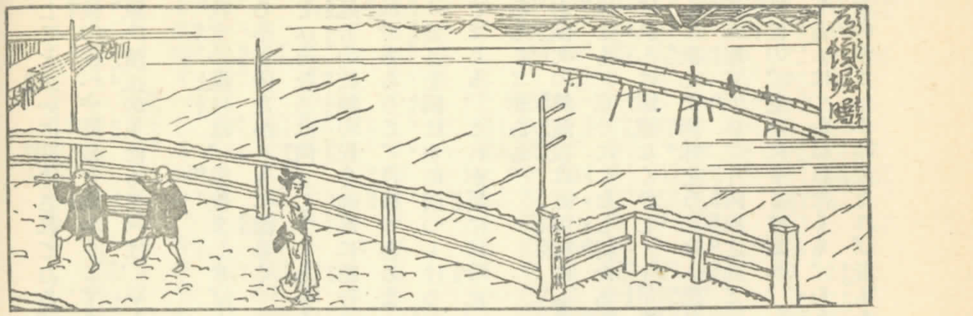
◇市川荒五郎と云ひ、片岡松之助と云ひ、つかへば充分につかへる俳優の、老ひたりとは云へ、一向に熱をあげぬのがある、蓋し當人はつかはれたくも、むかふがそれ程につかはねば止むを得ずといふ結果なれば詮もなし、それから云へば、淺尾大吉など餘りにつかはれ過ぎてゐる傾きがあり、扨つかはれ過ぐれば、また思つた程にもないらしい。

◇氣の變らぬのに尾上卯三郎がある、市川鰕十郎がある、片岡愛之助がある、中村飛鶴がある、嵐璃德がある、卯三郎の大成は別として、その他は進めば尙進み得るのであるから、ひと奮發を切望する。

◇巖頭に立つて、一歩をあやまれば墜落の危地に望んでゐるのに、坂東壽三郎があり、嵐德があり、片岡松太郎がある、まだ／＼昇るか、この儘に萎えこじけるか、正に覺醒すべきの大切なる立場にさまよつてゐる。

前途有望を以て目されてゐるのに、中村成太郎あり、中村霞仙あり、嵐橘三郎がある、新春の光輝はまぶしい。この機に際して成太郎や緊褌一番、霞仙や勇躍一番、橘三郎や心機一轉を要すべきであらう。

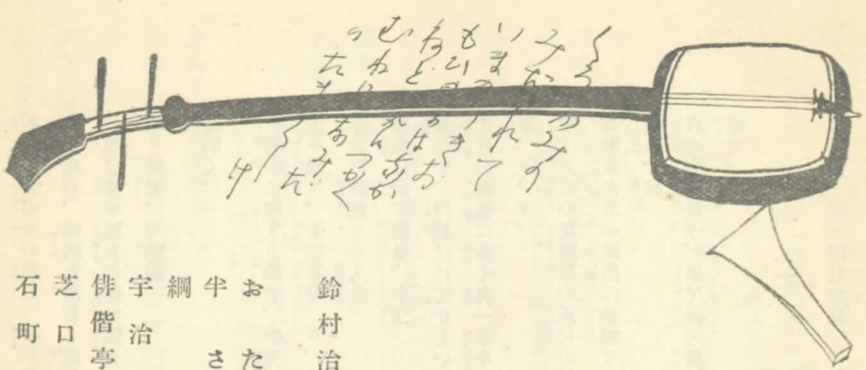
◇中村政治郎には、まことに將來を囑望されるものがある今見る度每の驚嘆すべき舞臺は蓋し異例と云ふべきもの片岡ひとしにも前途の光明は認められる、また新進として將來のあるは、中村鴈之助をはじめとして、片岡幸の丸あり、市川右若あり中村市郎がある、此等の前途や、洋々たりと落つくには餘りにそれが切迫してゐる奮ふべきは今この時である。



芝居の新年

川尻清潭

初がらす東太皷は浪花かな
春初日いつもの客の袴哉
破魔弓や座頭の子の初舞臺
舞臺から年賀申すや名弘めに
寶船矢の根五郎の鼾かな
荒事に出る弱虫や笑ひ初め
初富士や宙乘りとなる奴凧
湯上りを七くさ爪の女旦かな
藪入やおくれて來たる土間の末
仕切場の帳場簞笥や福壽草
松過ぎをよき女房や芝居茶屋
追羽根や茶屋の娘の黄八丈
獅子舞や黄昏近き芝居町



角座初春興行上演

墨水十二夜の中

小春髪結　五場

吉井勇氏原作
瀨戸英一脚色

一代の蕩兒鈴村墨水は、終ひに家産を傾け盡してしまつた。女房のおたかは自分が覺えた一中節で世帶を助けやうと、師匠になる爲めに零落した良人の苦しい生活の中で一中節の稽古を始める。其の心を知らない親戚からは盛に非難の聲が上つたが、之を斥ける墨水の眼には涙があつた。——梗概——

人

鈴村治之助（質店石屋の主人、號墨水）
おたか（墨水の女房）
半さん（墨水の弟）
綱次（日本橋の藝者）
宇治よね（一中節の師匠）
俳諧亭句樂（落語家）
芝口さん（住所が通り名）
石町さん（同）
新宿さん（治之助の親戚）
松子（綱次の友達藝者）
おふく（綱次の母親）
およし（綱次の家の女中）
川中さん（大屋）
其他

其の一

時　未だ自働車のさう流行してゐない頃、松の内
所　日本橋の數寄屋町と元大工町の間の通り

不意に女の子の歌ふ「年の始めのためしさて」の唱歌が聞えて來る、唱歌が濟むさ直ぐに「お芽出たう」「お芽出たう」ご呼び交す男女の聲が聞える。

通り神樂、三味線。

幕明く。

追羽振に興ずる藝者、半玉、娘、女中、お店者、小學生乃至中學生、年始客等、々、々。

年始の禮廻りの人達。

座敷に急ぐ藝者、半玉。

貰ひや、口掛けに忙がしい箱屋。

正月の祝儀に歩く丸一連中。

等、々、々。

總て東京の花柳界の正月の風俗を寫し出す。之等に就ては舞臺演出者の演出に依賴する。

稍長い間。

白襟姿の松子が車で通り過ぎる。

暗轉。

其の二

時　同じ日、殆ご同じ時刻。

所　上横町の綱次の家。

風呂敷を擴げて、其上に積み重ねられた着物や羽織の枚數た、頭髮だけは立派な丸髷に結つてゐるが、身體は寢衣に不斷着の羽織を引かけたゞけの綱次が査べてゐる、側におよし。

綱次　帶までは無理かねえ。

およし　さア、でも、これだけ品數があるんですから大丈夫でございましよう。

綱次　貸てくれるご可いがね、又、貸てくんなきや困つちまふけご（間）お前、濟まないけご、ようく事情を話してね、今晚中か、ごう間違つても、明日の朝は、朝の中に入れ替るからつて、番頭に、今夜のこの事情（間）まアそんなこはごうでもいゝ、ごうにでもして帶も一緒に借て來ておくれな。

およし　ハイ。

綱次　松も取れない中から、可厭なお使ひで濟まないけごね

およし　いゝえ、ごう致しまして。

綱次　何かもうなかつたかね、此指環を持つてゝやりや、一も二もないけご。

およし　そりやもう先方は大安心ですわ。

綱次　でも折角服裝が出來たのに、指環を箝めてないぢや何にもならないしね（間）此の羽織（間）いくらにもなりやしないね、まア、これだけで何こか話をして來ておくれな貸てくれなかつたらくれなかつたで、又其の時の都合にするから。

およし　ハイ。

綱次　ぢや、濟まないけご。

立上る、およしは風呂敷を包む、電話のベル。

綱次　ハイ、ハイ、さうです、ハイ。

間。

およし　行つてまゐります。

綱次　臺所からね。

およし　ハイ。

風呂敷包を持つて立上る、玄關からおふくが入つて來る、およしは出て行く、おふくは見て見ない振り。

おふく　お座敷かい。

綱次　いゝえ、自働電話ですつて。

おふく　旦那からだらう。

綱次　さア、あ、もしく、ハイ、ハイ、いゝえ違ひます、えゝ、さうです、いゝえ違ひます、えゝ、さうです、番號は合つてますけご家が違ひます、えゝ、いゝえ、ごう致しまして、左樣なら。

おふく　違ふのかい。

綱次　人を馬鹿にしてゐる、又炭屋さ間違へてるの。

おふく　炭屋さ藝者屋ぢや、これが本當の雪さ炭だ。

綱次　何處へ行つて被在つたの。

おふく　唯ブラくこね、景氣はごうだか知らないが、新春だけに、仍且戸外は賑だね。

綱次　家だけだ、お正月の來ないのは。

間。

おふく　ねえ、綱や、又、お前、私が之を云ひ出すさ忌な顏をするだらうけご。

綱次　あ、其の話なら止めて頂戴、私も考へてるところなんですから。

おふく　考へてるつて、唯、何時もく考へてるばかりぢやごうにも仕樣がないぢやないか。

綱次　（無言）

おふく　その、お前の考へてるつて事を、私に打明けて云つておくれな、二言目には考へてるつて云ふけご、唯考へてるこだけぢや、私には何が何だか、少くこも見當が附

かないからね。

綱次　ですから考へてゐるんですよ、お母さんにどう云はうか(間)まア、此の話は當分出さずに置いて下さい、そりや私だつてまつたく眞劍に考へてゐるんですから。

おふく　そりや、お前の考へてゐることは分つてゐるけどさ

綱次　まア、もう少し待つて下さい。

云ひ捨てゝ一間へ入る。玄間の隣で、往來に面してゐるが壁と襖で見物席からは見えない、おふくは歎息。

綱次の入つた室から、三味線の調子を合せる音が聞える。

松子が車で來る。

松子　（車夫に）一寸待つて、（云ひ捨て中に入る）綱ちやん、ゐる。

綱次　（蔭の聲）え、あ、松ちやん　）玄關と隔ての襖を明けて姿を見せる）ゐるよ。

おふく　（同時に茶の間から玄關を覗いて）オヤ、ようこそ、まア、此方へ被來い。

松子　えゝ、有難ふ（綱次に）一寸、お前さん、どうして來てくれないのさ。

云ひながら長火鉢の傍へ、綱次も共に。

綱次　だつて、行かれないんだもの。

松子　行かれないんだものゝだつて、あゝさう〳〵、お母さんにお目出たうでしたわね、明けましてはお芽出たうございます、舊冬中は色々御世話樣になりまして。

おふく　いゝえ手前こそ。

松子　今年も相變りませず。

（お福も同樣に挨拶する）

おふく　（綱次に）御祝儀だから、先きへ矢張りお屠蘇にするかい、それとも直お銚子（松子の顔を見比べながら云ふ。）

松子　私だつたら澤山、此の次ぎまでお預けにしときますわ今日は本當に御年始に來たんぢやないんですから。

おふく　でも少とぐらゐ。

松子　イエ、本當に、今日はさうしちやゐられないんですから、此次ぎ、ゆつくり伺ひますわ、これでもお座敷を拔けて來たんですから。

おふく　左樣ですか、併し、まア、何時もお忙しくつて結構ですわね。

松子　いゝえ、忙しいやうなら結構なんですけど、景氣程ぢやないんですよ(綱次に)どうして來られないのさ、一寸でいゝから來てくれない。

綱次　それが行かれないんだよ。

松子　どうして、頭髪だつて結へてるのに。

綱次　だつて、丸髷ぢやないか。

松子　なほいゝぢやないか、その方が必と岡村さんも喜ぶよ

綱次　岡村さんが喜んだつて。

おふく　岡村さんて、暮中に話のあつた、あの方かい。

聞かれて綱次は急に不快さうに默つてしまふ。

松子　えゝ、さうなんですよ、實はね、今日布袋家へ私のお約束で、親指と一所に見えてるんですよ、一寸でもいゝから顔が見たいつてね、大變なんだよ、そりやお前さんねえ、來てくれない、お目出たうだけでいゝから、さうすりや、私も、親指も顔が立つ譯なんだから。

おふく　一寸ぐらゐだつたらお前、松子さんもあゝ仰有るんだから。

綱次　だつてお母さん、今日はどうしたつて仕樣がないぢやありませんか。

おふく　だつてお前、未だ時間も早いぢやないか。

松子　オヤ、何處かへ行くの。

おふく　えゝ、吉原に旦那のお約束があるもんですから。

松子　今日、それで丸髷なのね、だけど、そんなゝの。

綱次　誰が。

松子　鈴村さんさ、吉原でお約束をつけるなんて、まア、こんな事を、人の旦那をつかまへて、私なんかゞ云つちやあ失禮だけど、色んな事も、お前さんからも聞かないぢやないからそれで訊くんだけど。

綱次　だつて、暮からの約束だもの。

松子　約束には違ひないだらうけど、家はよくなつたの。

綱次　（首を振る）

松子　さうだらう、何でも人の噂ぢや、暮まで持ちこたへられたのが不思議だつて云ふくらゐだからね、其の中で吉原でお約束、お前さんの旦那だけど、私には鈴村さんの了簡方が分らないね。

おふく　然も松子さん、どうでしよう、定孝さんだの何だの何時もの連中五人に、揃ひの羽織を作へておやんなすつたんですよ。

松子　へえゝ、ま、どう云ふんでしようね、そんな事をしたつて、もう大概、我々花柳界のものには、鈴村さんが今どうだか、分つてるんですからね、下らない見得だと思ひますけど。

綱次　そりや、下らないと云つてしまへばそれつきりだけど

これは旦那に限らず誰だつて、今まで散々遊んで來たものが堅くなつて遊びを止めたんなら、之は別だよ、多寡がお金の爲めに義理を缺いて、今まで贔屓にしてゐた藝者や幇間に、何か蔭で云はれるとしたら業腹ぢやないか私でも借金を質に置いても、するだけの義理はしたいね

おふく　其の義理が何だよ、これが家の爲めとか、親兄弟の爲めとか、そんな事の義理を缺いたら、そりや惡からうさ、世間へ顏も出せないだらうさ、多寡が遊びの義理ぢやないか、そりや出來る人だつたら結構さ、私だつて、斯うして藝者家で御飯を食べてゐる人間だから、さう云ふお客樣は、多い程結構さ、雖然自分の家の立つか、潰れるかと云ふ土壇場へ來て、然も自分の世話してゐる藝者の身の皮剝いでまで義理をしなくつたつて、いゝぢやないか。

綱次　身の皮剝いだなんて、お母さん、餘り旦那の外聞に關るぢやありませんか。

おふく　だつてさうぢやないか、お茶屋の拂ひにお前の着物を質に入れりや。

綱次　あれはお母さん、旦那がさうしてくれつてお云ひなすつたんぢやありませんよ、暮に桐尾張の勘定を綺麗にして置かないぢや、今日のお約束に對しても旦那の顏に關はると思つて、私が勝手にした事ですよ、あの時お母さんによくさう云つたぢやありませんか。

おふく　それは聞いたさ。

綱次　なら、今更そんな事、これが松ちやんの前だからいゝやうなものゝ、餘り旦那の恥になるやうなことは云はないで下さい、お酌の時からお世話になつて、旦那には恩も義理も深いんですから。

おふく　そりやお母さんだつて知つてるさ、お前にも何も、恩知らずになれの、義理知らずになれのと云ふんぢやないよ、だけど背に腹は替られないぢやないか、斯うしてゐる中にも、又旦那がよくおなんなさるといふ目的がありや、そりや私だつて何にも云やしないよ、雖然さういふやうな樣子は見えないし、それで、何時まで此の調子で愚圖つか〳〵やつてたんぢや、お前も私も餓死になるより仕樣がないぢやないか、私は決して自分の慾で云つてるんぢやないよ、お前が餓死になつても關はないといふなら、私だつて何にも云はないでお前と一しよに死ぬよ、だけど私は、お前にそんな死にざまはさせたくない未だ生先きが長いんだもの、もつと出世をさせたいと思

ふのが間違つてゐるかい。

綱次　お母さんの心持ちはよく分つてゐますよ。

おふく　分つてゐたら、お前、その考へてゐるといふ事を、斯う〳〵と打明けて、私に安心させてくれたらどうだい云やあお前も氣持を惡くするだらうと思ふから、なりたけ云はないやうにしてゐるけど、心の中ぢやそれが苦勞で、夜も碌々寢てやしないよ。

泣く。

綱次　（母に泣かれては流石に氣の弱く）濟みません。

共に涙。

松子　ねえ、綱ちやん、私は何方へ附くんでもないよ、お母さんの云ふことも道理、又お前さんが鈴村さんにはお酌の時から世話になつてゐるから、今急にどうする事も出來ないと云ふのも、これも道理、だから私は何方へ附く譯でもないけど、此處はお前さんが考へなきやならないところだらうと私は思ふね、と云つたところで、私は何も岡村さんの事があるから云ふんぢやないんだよ、雖然だね、聞いてくれるかい。

綱次　ウン、云つて、實のところは私も迷つてるの、旦那も大事だけど、お母さんも大事だからね、（おふくに）お母さんに苦勞をかけちやあ濟まないといふことは、私だつてよく知つてゐるんですよ、雖然ねえ、旦那のことを考へると（間）考へてる〳〵つて云つてましたけど、實は私、考へに詰つてゐましたの。

おふく　（泣きながら）さうだらうつてお前、旦那にお世話になつたことを考へりや、そりや迷ふのが當然だよ。

綱次　（松子に）濟まない、此方の話になつてしまつて、さう云ふことだから、お前さんにいゝ、考へがあるなら、何でもいゝから聞かして、聞くわ。

松子　さう改まられると此方も困るけど、今の話だねえ、旦那の世話になつてゐるといふ、そりやあ鈴村さんは隨分お前さんを世話をしてくれたさ、そりやあ私も、家の旦那なんかに比べて、何て親切な、好い旦那だらうと羨ましいくらゐに思つてゐたよ、雖然お前さんだつて鈴村さんに盡してゐるよ、今の吉原の拂ひのことだつてさうぢやないか、私は、落ち目になつた旦那に、そんなに盡す人は、恐らくあるまいだらうと思ふ、決してお前さんは世話になりつぱなしにはなつてゐないよ、世話になるから盡くす、盡くすから世話してくれる。五分々々ぢやないか、そりや世話してくれる人のあるのに、外にお客を

取つたり、浮氣をしたり、こりや悪いよ、雖然、世話されてゐるだけに盡くしたら、それで差引は附いてゐると思ふ、藝妓と旦那は夫婦ぢやないんだからね、夫婦ならどんなに貧乏したつて、零落したつて一所にゐるのが當然さ、尤も、近頃はさうでないのが多いがね、兎に角何と云つたつて旦那と藝妓、世話する人にされる人だもの多少は現金に考へなきや嘘だよ。

おふく　あゝ、うつかりしてゐて濟みません。

　云ひながら、鐵瓶の湯を急須に通して、茶碗に注ぐ。

松子　前座と眞打と二役兼てるんですから大した落語家でさね（茶を飲んで）綱ちやん、どうだい、私の考へは、餘り現金過ぎるかい、甚く考へ込んぢやつたね。

おふく　今、松子さんが云つて下すつたことは、お前、本當によく考へないぢや駄目ですよ。

松子　そこでねえ、今度は少し自分の用に取りかゝるけど、綱ちやん、お前さんさうして考へてる次序に岡村さんの事を考へてみない。

綱次　（無言）

松子　今日はまア、吉原へ行くんぢや仕樣がないけど、一二三日中に會はない。

おふく　これ。

松子　まアお母さん、綱ちやんも考へなきやならないでしようから、併し、これが私だつたら、そりや私と綱ちやんとぢや人間も違つてましようが、私なら考へることはないと思ふんですよ、岡村さんは鈴村さんのあるのを承知の上なんですもの。

おふく　御承知なんですか。

松子　えゝ、それはもう綱ちやんにもさう云つてあるんですよ、鈴村さんがあつても構はない、鈴村さんが來た時は何時でも引下る、鈴村さんの來ない時だけ大事にして貰へばそれで澤山だつて云つてるんですからね。

おふく　それなら何もお前。

およし　唯今。

　云ひかけたところへ、およしが歸つて來る。

綱次　あゝ御苦勞樣。

およし　（松子に）被來いまし、明けましてお芽出たう御座います、昨年中は色々お世話樣になりまして、又、暮には結構なものを頂きまして有難う存じます、本年も相變りませず。

　松子は輕く挨拶を返す。

綱次　どうだつたい、關はないよ、松ちやんだから、

およし　帶はどうしても駄目だつて云ふんです。

綱次　駄目だつてかい。

およし　いろ／＼事情を話してみたんですけど、あれだけぢや帶までは附かないと云ふんです、何時もの番頭だといいんですけど、今日はもう一人の頑固な奴だつたものですから、どうしても云ふことを聞いてくれないんです。

松子　なアに、質屋。

綱次　今日行くのにね、入れ替にやつたんだけど、着物だけで、帶は貸せないと云ふんだつて。

松子　私のぢやいけない。

綱次　貸してくれる。

松子　去年のだけど、いゝ。

綱次　結構、贅澤を云つちや罰が當る。

松子　と、云ふ程のもんぢやないけど、ぢやあ後でおよしさんを取りにお寄越しな、私、家の者にさう云つて出させて置くから。

おふく　どうも濟みませんでございますね。

　電話のベル、およしが出る。

松子　私かも知れない、私だつたら、今、其方へ歸つたからくから。

およし　ハイ、ハイ、左樣でございます、あ、今、其方へお歸りになりました、ハイ、いえどう致しまして、左樣なら、布袋家さんからです。

松子　どうも有難う、ぢや、私、歸るからね（立上り）今のこと、よく考へてみてくれない。

綱次　（同じく送り出す心で立上り）兎に角今日は、そんな譯で都合が悪いから。

松子　ぢや、何日なら都合がいゝ。

綱次　何日つて極められると困るけど。

松子　だつて、先方だつて都合があるもの。

綱次　いづれ私の方から知らせるわ。

松子　それがさ、何しろ待ち焦れてゐるんだからね、來られなきやせめて電話で聲だけも聞きたいと云ふ騷ぎなんだもの、美しい女には生れたいものさ、ぢや、左樣なら、お母さん、どうも失禮。

おふく　お關ひも致しませんで。

松子　檜さん、お待遠樣、ぢや家の者に出さして置くから、あ、およしさん、直お出でよ、どうせ私は車で先きへ行くから。

綱次　ぢやあお前、松ちやんの家まで行つて來ておくれ。

およし　ハイ。

松子　（車夫に）一寸家へ寄つて、左樣なら。

　これにて松子は去る、およしも出て行く、綱次とおふくは茶の間へ。

　間、一寸氣不味い沈默がある。

おふく　私、今の中にお湯へ行つて來ていゝかい。

綱次　えゝ、行つて被在い。

　これにておふくは錢湯へ出　けて行く。

　一中節の小春髪結が途切れ、途切れに聞えて來る。

　〽黒髪のみだれて今のうきおもひ、目には泣かれど氣につかへ、胸に涙の玉くしげ……。

　綱次は物思ひ、電燈點火。

綱次　オヤ、もう、こんな時間かしら。

　立上つて一室へ、緣起棚のある心にて、燧石で淨めてゐる音が聞える、玄關から、茶の間、神棚等へ、淨火を打かける。

　〽所詮この世は假髷の、戀にうき身を投島田、覺悟極めし心なば、主に何さぞ黄楊の櫛、合せ鏡さ泣く涙、落ちて流れて鬢水の……。

綱次　お歸んなさいまし。

　鈴村が默つて入つて來る。

鈴村　オヤ未だ仕度をしないのか。

綱次　え、つい、今まで人が來てたりしたものですから。

鈴村　お客樣だつたのか。

綱次　松ちやんが來てたんです。

鈴村　年始か。

綱次　いゝえ。

鈴村　用があつて來たと云ふ譯か

綱次　えゝ、でもないんです。

鈴村　兎に角早く支度をしたらどうだ。

綱次　ハイ

　妙に落着きなく、一室へ入る。

　鈴村に台所へ行つて、湯吞に冷酒を注いで來る。

　〽あはれ逢瀨の首尾あらば、これを互ひの命日と、名殘りの文を云ひかはし、もはや命も蜆川……。

　鈴村は長火鉢の前に坐つて耳を傾ける。

鈴村　今やつてるのは一中節だな。

綱次　（隣の聲）えゝ、

鈴村　小春髪結だらう。

綱次　えゝ、小そめさんがやつてるんでしよう。

鈴村　日本橋にも、未だ一中節を聞く客もあるんだな。

綱次　そりや貴方。

鈴村　もう世の中はラツパ節とサノサ節の世界になつてしまつたかと思つてゐたが、未だ日本にゐても氣が強いな。

　〽さりとは狭い御了簡、死んで花實が咲こかいな、樂しむも戀、苦しむも、戀といふ字に二つはない……。

　およしが歸つて來る。

およし　唯今（鈴村に）お歸んなさいまし、姐さんは。

綱次　此方。

およし　其方へ持つて參りますか。

綱次　あゝ。

　およしは一室へ入る。

　電話のベル。

鈴村　あゝ、モシ／＼、ハイ、さうです、綱次ですか、居ります、貴方は、布袋家さん。

　聞いて綱次が慌てゝ飛出して來て、鈴村の手から受話器を奪ふやうにして取る。

綱次　モシ／＼、私、綱次、あゝ、松ちやん、先き程は、帶をどうも有難う、えゝ、うん、うん、うん、あら困るよモシ／＼、引込んぢやつちや、モシ／＼、あ、暫く、明けましてお目出たう御座います。昨年中はいろ／＼、今年も相變らず、えゝ、えゝ、今日は濟みません、あらそんな事、えゝ、えゝ、えゝ、モシ／＼、今、一寸手の離せない事をしてゐるんですが、何れ私の方からお電話します、え、え、ですけれど、えゝ、兎に角切ります、左樣なら。

鈴村　何だ、變な電話だな。

綱次　變て、何が變なんです、變なことはないぢやありませんか、それとも何か變な事がありましたか。

鈴村　オイ／＼、何も、そんなにムキにならなくつてもいゝぢやないか、變な電話のかけ方だから變だと云つたゞけのことを。

綱次　ですから、何が變なんです。

鈴村　可笑な奴だな、唯變だと云つたゞけのことぢやないか

綱次　ですから、その變な譯を聞かして下さいと云つてるんです。

　再び電話のベル。

鈴村　又かゝつて來たぜ。

綱次　かゝつて來たつて關ひません。

鈴村　關はない奴があるか、蒼蠅くつて仕樣がない。
綱次　出れば、貴方は又變な電話だと仰有るでしよう。
鈴村　お前も變な女だな。
　　　電話を聞きに立たうとする。
綱次　私が出ます、モシ〳〵、モシ〳〵、ハイ、さうです、えゝ、松ちやんかい、困るよ、あの人なんかを出しちやだつてそれは困るよ、何しろ、今、これから吉原へ行くところなんだから、分つた、あゝ、今支度をして行くところさ、だから此方から電話をかけます、分つた、ぢや左樣なら。
鈴村　オイ、お前、今夜、行くのは止めたらどうだ。
綱次　えゝ、どうしてです。
鈴村　別に理由はないが、止めた方がいゝだらう、俺一人で行つて來る。
綱次　いゝえ、私も行きます、貴方、貴方は必と今の電話を變に思つて被在るんでしよう。
鈴村　お前がさう思つてゐるなら、さうにして置いたらいゝだらう、兎に角俺は一人で行つて來る。
綱次　いゝえ、私も行きます。
　　　間。
　　　おふくが歸つて來る。
おふく　唯今、お綱、未だ仕度をしないのかい。
鈴村　早く仕度をしろ。
綱次　行つていゝんですか。
鈴村　いゝから仕度をしろと云つてゐるんだ。
綱次　ハイ。
　　　一室へ、おふくは怪訝の體。
　　　暗轉。

其の三

時　同じ日、夜。
所　京橋八丁堀鈴村の質店。
　　帳簿、算盤等を載せたる机を前に、掛硯を側に、石町さんと呼ばれゐる當家の親戚を上座に、八丁堀さん、芝口さんなど親戚が五六名、座敷に居並んでゐる、土藏前の店には之等の人の外套、帽子、襟巻などが置いてある。鈴村の女房おたかが蕎麵を一同に進めてゐる。目星しい品物も見えない家の中はガランとして甚く寂しさうである。
石町　いや、どうかもう搆つて下さるな、今夜は御馳走にな

りに來たんぢやないんだから。
おたか　御馳走だなんて仰有られますと痛み入りますわ、寒さ凌ぎ、ホンのお茶受け代りで御座います。
石町　それよりも、治之助は一體何時歸つて來るんです。
おたか　もう歸つて來るだらうと存じます、今夜の事は承知してゐるんでございますから。
芝口　又存じないで家を明けられてちや困りますよ、正月だと云へ、これで我々相當に用事を抱へてゐる身ですからね。
おたか　御尤もでございます。
石町　一體何處へ出掛けたんです、日本橋ですか。
おたか　さア、眞逆今夜はと思ひますけど。
八丁堀　治さんの事だから信頼にはならない、大きに自暴の駄々羅大盡を極めてるかも知れない。
石町　一體、何と云つて出掛けて行つたんです。
おたか　どうしても今夜、一軒顏を出さなければならないところがあるから、直歸つて來ると云つて出掛けたんでございます。
芝口　行く先きを聞かなかつたんですか。
おたか　ハイ。
八丁堀　どうです、皆さん、折角取つたものを、置いといても詰らない、冷めない中に頂かうぢやありませんか。
おたか　どうぞさうなすつて、其の中には主人も歸つてまゐるだらうと存じますから。
　　　茶を進め替へる。
石町　歸つて參るだらうぢや困りますね、おたかさん。
おたか　ハイ。
石町　これはね、親類一同で相談したことなんだから、貴女も聞き難いだらうが、其の心算で聞いて貰ひたい。
おたか　ハイ。
石町　と云つたところで、別に難かしい問題ぢやない、唯、貴女にもう少し確かりして貰ひたいと云ふことなんです、八丁堀の石屋と云へば、質屋仲間でも有名な老舗が、今夜の相談で、潰れるか、潰れないかの土壇場へ來て、家を留守にする主人も主人だが、其の出先を知らない貴女も女房としては少し迂濶過ぎるやうに思はれますがね、それは或は、貴女が知つて、故意と秘してゐるのか、それは知りませんが、それにしても時と場合を考へてくれなきや困りますね、唯亭主に附いてゐればいゝと云ふ、女大學は當世餘り流行しませんからね。

芝口　つまり、もう少と氣に働きを持つて貰ひたいと云ふんです、治さんがあゝした道樂者のところへ、貴女にそれを意見するだけの力がないと來たら、鈴村の家は、もう治さん一代限りだ。
石町　（芝口を）そりやあ、云はずと知れたこと、斯うやつて整理委員會は開いてゐるものゝ、此の家だつて處分しなけりやならないんだし、どうにもする事が出來なくなつてゐるんだからね。
八丁堀　よく深川のお母さんの家へ手を附けなかつたね。
石町　そりや、何ぼ何でも治さんだつて、お母さんの家までは手を附けまい。
八丁堀　だつて浪花町の地所だつて、石町の知らない間に變つてしまつてるぢやないか。
石町　浪花町の地所だけは私も驚いたよ、實印を預かつてゐる私が知らなかつたんだからね、おたかさんを迂濶とばかりは云つてゐられない。
八丁堀　これが自分の印だからいゝやうなもの、罷り間違や私印僞造だ。
石町　（おたかに）私が確かりしてくれと云ふのは此處の事なんです、今、こゝが云ふやうな事は、眞逆治さんだつてしなからうが、切迫詰りや、又どんな悪い智慧を出さないとも限りませんからね、私達は年中側にゐる人間ではなし、浪花町の地所の一件だつて、側にゐて貴女が知らない筈がない、又眞實に知らないんだとすると、私達も治さんの前途を考へて、益々心細くなるばかりですからね。
芝口　これから先、どんな苦勞が被さつて來るか分らないのに、貴方が何時も床の間の置き物ぢや、どうしたつて夫婦共倒れですからね。そりや貴女も、乳母日傘で育つて來て、此處へ嫁に來た時は、此の家も未だ〱確かりしてゐた時ですから、今、こんな破滅にならうと思はなかつたでしようし、途方に暮るのも無理はありませんが、さうかと云つて、唯、手を拱いて亭主の零落するのを見てゐたんぢや、女房たるところがありませんからね。
おたか　私が至らないばかりに、皆さんに御心配をかけまして、何とも申譯が御座いません。
石町　いや、さう貴女に謝まられても困るが、元々こんな事になつたのも、治さんの道樂が根本なんだから、悪いのはもう治さんが一番悪いに極つてゐる、だが、その道樂

も、女房の揖の取りやうで、今までに、もう少しどうにかならなかつたものか、云つても此奴は愚痴だが、女つてえ奴は蒼蠅いものでね、鍵屋の叔母だの茅場町の妹なんかが愚圖々々云ふのさ、それもこれも皆此の家の爲めを思つて云ふことだから、どうか悪く思はないで下さい。
おたか　ハイ。

　入口の大戸の繰りが明いて鈴村が歸つて來る、大分醉つてゐる。

鈴村　オイ、おたか（其の儘上り框へ）
おたか　あ、歸つてまいりました（見世へ出迎へて）お歸んなさいまし、大層遅う御座いましたのね。
鈴村　うん

　云つた儘默つてゐる。

おたか　皆さん、先刻からお待ちになつて被在るんですけれど、眞逆お忘れになつたんぢやありますまい。
鈴村　忘れやしないよ、忘れないから歸つて來たんだ、兎に角、水を一杯くれ。
おたか　ハイ。

　奥へ行く。

　鈴村が歸つて來たと知ると、親戚一同も居住ひを直して默つてしまふ。鈴村も默つて淋しさうに店の周圍を見廻す。

　間。

　おたかがコップに水を持つて來る。

おかた　お待遠樣。

　鈴村は默つてそれを受取ると一息に飲み乾す。

おたか　あの、皆さん待つて被在るんですから、御面倒でしようけど、兎に角顔を出して下さいましね。
鈴村　うん、今往くよ、荷物は大略出しちやつたんだな。
おたか　ハイ。
鈴村　何だか、斯う家の中が淋しいやうな氣がするな、先祖代々とか、飛んだ城明渡しだな。

　輕く捨鉢に笑つて座敷へ通る、おたかは奥へ行く。

鈴村　どうも皆さん、お待たせして相濟みません、つい據ない用事があつて出掛けてゐたものですから、お忙しいところをお暇を搔かして濟みません（親戚の一人に）ああ貴方には新春になつて初めてでしたね、お目出たう、と云ひたいところだが少ともお目出たかありませんや、まア御年始は勘辯して下さい、何しろすつかり相變つちやつたんですからな。

石町　治さん、私は今、八町堀から實説だと聞いて驚いてゐるんだが、浪花町の地所を賣つたつて云ふのは本當なのかい。

鈴村　（暫く無言、軈て思ひ切つたやうに顔を上げて）えゝ、本當です、賣りました。

石町　仍且本當なのかい。

八丁堀　ごうです、私の云つた通りでしよう。

石町　仍且噂が本當だつたんだ。

鈴村　世間で、もうそんな噂をしてゐますか、早いもんですね。

石町　その噂を聞いた時は、最初は私も眞逆と思つたが、其後方々で噂を聞くんで訝しいなと思ひながらも、今夜、此處で實説と聞くまでは未だ疑つてゐた、私も可成り間拔けだね。

鈴村　ごうも濟みませんでした。

石町　併し、彼處の地所は、深川のお母さんに默つて賣ること は出來ないことになつてゐる譯だが。

鈴村　併し、背に腹は替られませんからね、苦しくなりや仕方がありませんね。

石町　だが印は私が預かつてゐるのに、それは一體如何したんだ。

鈴村　あゝ、印ですか、印は私が勝手に造りました。

石町　何。

鈴村　印のことでしよう、だから、あの印は私の印だから、私が勝手に造つたと云ふんです。

石町　ぢやあ何の爲めに私に印を預けたんだ。

鈴村　さあ、何の爲めだか知りませんが、預けろと云ふから預けたんです。

間。

芝口　治さん、お前さん、それぢや餘りだらう。

石町　（芝口を押し止めて）それで一體いくらで賣つたんだ。

鈴村　さうですね、すつかりで五千圓ばかりでしたよ。

八丁堀　五千圓まるで棄て値同樣だ。

石町　それで其の金は何に使つたんだ。

鈴村　さばさばと相場で取られてしまひました、直きで損をしたんだから、五千圓位一たまりもありませんや。

石町　堅氣の商人が相場に手を出すなんて怪しからんことを　それで先祖に濟むと思つてゐるのか。

鈴村　さア、濟むか、濟まないか、ごうも自分にや分りませんね。

石町が突然、擴げてあつた帳面を、パタリと音を立て、伏せ、机を彼方へ押遣り。

石町　治さん、お前がさう云ふ心がけぢや、いくら私達が心配したつて、とても駄目だと思ふから、深川へは私が話をする、私は今夜限り整理委員を辭職する。

鈴村　さうですか、ぢやあさう云ふ事に願ひましよう。

石町　何。

鈴村　石町さんも皆さんも、二言目には私の心懸けが惡いやうにばかりお云ひなさるが、私にすりや、これで私の方にも貴方がたにいろいろ云ひ分があるんですぜ。

芝口　ふうん、お前さんに云ひ分がある、面白い、聞かうぢやないか。

鈴村　えゝ、云ひます、そりや斯うして皆さんが寄つて整理して下さるのは有難いが、十二月の時はごうなつたんです、十二月と云へば外の月とは違ひますぜ、そりや貴方がたゞつて、商賣のある方だから、忙しいぐらゐのことは私にも分つてゐます、併し本當に私の家を整理し下さらうつて氣なら、ごんな事をしたつてちやんと顔を揃へてとつくり相談してくれたつて可い筈だ、それにごうでした、その日に來たのは此の男一人でしたぜ、これはお斷りして置きますが、家の親戚でも何でもありませんぜ、家にたゞ番頭をしてゐて、去年店を分けてやつた、謂ば赤の他人ですぜ、番頭をしてゐたと云ふ事で、今夜もさうだが、暮の忙しいところを來てくれたんです、それだのに親戚の貴方がたはごうでした、委員長の石町さんにしろ、何誰も顔を見せては下さらなかつたぢやありませんか、浪花町の地所のことだつて、私は十二月の寄合の時に、すつかり云ふつもりだつたんだ、それだのに誰も顔を見せないなんて、私にはもうあの時からみんなの心持が分つてゐたんだ。

八丁堀　私達の心持ちが分つたつて、ごう分つたんだい、各自に忙しい用を控へてゐる其間で整理をしてゐるんだ、十二月一月不參したぐらゐで愚圖々々云はれちや間尺に合はない。

此の以前からおたかが、奥から出て來て樣子を聞いてゐる此時、座敷の衝突を緩和する心持ちで座敷へ入る、おたかを見て、八丁堀に突掛らうとした鈴村も　稍　勢が攖む。

おたか　あの、お火はございますでしようか。

云ひながら座敷の一隅にあつた炭取りの炭を足ぐ。

間。

鈴村　オイ、用が濟んだら彼方へ行つてろ。

石町　いや、おたかさんにはゐて貰はう、此人ぢやないが、これだけ此方では盡してゐるのに、云ひ分があると云はれちや、深川へ聞えた時に申譯が立たない、おたかさんにも聞いて貰はう、その云ひ分といふのはごんな事なんだ。

鈴村　（無言）

おたか　お茶の熱いのでも入れてまいりましよう。

鈴村　まア、おたか、皆さんがあゝ仰有るんだ、お前も此處にゐるがいゝ、俺の云ふことが間違つてゐるかごうか、お前にも聞いて貰はう（親類に）第一、さうぢやありませんか、貴方がたは整理してやる、整理してやると、今も大層恩に着せて云つておいでなすつたが、皆な十圓だか二十圓だかの日當を取つて來てるんぢやありませんか、私に云はせりや、第一それからして氣に入らないんだ、ほんとに心から親切に、私の家の事を心配してくれるなら、この場合、日當なんか取れた義理ぢやないと思ふ。

おたか　貴方。

鈴村　だから私はもう厭なら厭でお止め下すつても、別に何とも思やしません、厭たといふものに、誰が整理なんか頼むものですか、他人は他人、自分は自分だ、なアに自分でやつたこつた、此の後始末くらゐ、自分一人でやつて見せらあ、整理委員〳〵つて、何だ御大層な、ハヽヽヽ。

淋しく笑ふ、と同時に、石町が立つて、默つて店へ出て行く、直ぐ續いて八丁堀、芝口、等、等、等、皆無言で外套を着、襟卷をし、帽子を冠り、手傳はうとするおたかには一切手を觸れさせず、「其處まで一緒に行きましよう」一寸貴に話があります」などと語り合ひつゝ、プリ〳〵して歸つて行く、其の間に鈴村は手拭を顔に忍び泣きしてゐる。これを見て、番頭と呼ばれた男は、慰めやうとして慰められず、皆が歸つてしまふので、自分も店へ出て來て、これはおたかの手傳ふがまゝに、恐縮しながら、外套を着帽子を冠り、無言で挨拶して出て行く。

間、おたかは座敷へ引返して、泣いてゐる鈴村の側へ坐る

間。

鈴村　（不圖顔を上げて、おたかのゐるのに心附く、涙を笑ひに紛らして）みんな怒つて歸つてしまつたね、ハヽヽヽ、併し、おたか、俺は本當にあゝ云はずにはゐられなかつたんだ。

おたか　えゝ、そりや私には貴方の心持ちはよく分つてゐますわ。

鈴村　さうかい、分つてくれるかい、よくね。

おたか　えゝ、ようく。

鈴村　さうかい（お前）、昨日だつたね、深川の家へ年始に行つてくれたのは。

おたか　えゝ。

鈴村　お母さんは別にお變りはなかつたかい。

おたか　えゝ、別に。

鈴村　さうか……何かお母さんは云つてゐなかつたかい。

おたか　（間）えゝ、あのう、貴方に會ひたいつて云つて被在いましたわ。

鈴村　俺に會ひたいつて。

おたか　えゝ（稍長い間　暫くして鈴村の目を瞶めながら）ですがもうお會ひにならなくつてもようございますの。

鈴村　ごうして。

おたか　ごうしてつて、お母さんのお會ひになりたいと云ふ御用は、もう大抵分つてゐるんですもの（と、云つて急に思ひ切つたやうに）お母さんは昨日私に、治之助には私からよくさう云ふと、こんな事を仰有いましたの。

鈴村　ふん、それでお前は何と云つて返事をした。

おたか　私、私は別に離縁なんぞして頂かなくつても宜しう御座いますと、さう御返事を致しました。

鈴村　さうか（間）お母さんはお前にそんな事を云つたのかい

おたか　えゝ、お前が本當に可哀さうだつて。

云ひかけて思はず泣く。

鈴村　（泣き聲になつて）本當に、俺もお前には、全く濟まないと思つてゐるんだ。この四五年といふものは、隨分お前にも苦勞をかけたからな、本當にお前には、何と云つて詫びていゝか分らない位だ（云つて不圖心附いた）あゝ、それでね、實は俺ももう槇町とも別れやうと思つてゐるんだ。

おたか　えゝ、お綱さんとですか。

鈴村　今の此の身分で、女を世話してゐるといふのが潜上過ぎた事なんだからな、それはもう疾くに氣が附いてゐたんだが、何しろ長い間のことだからね。

おたか　さう、今云つて、今別れられるものぢやありませんわ。

鈴村　いや、それが別れられるんだ、今なら別れるのに丁度

好い機會があるんだ、お綱の世話をしたいといふ人が此頃現れて來てゐるらしいんだ。

おたか　眞逆、そりやお綱さんだつて、あれだけの人ですから、商賣に出てゐりや何とか云ふ人もあるでしようが、貴方とこれだけになつてゝ、今更他の人の世話になるなんて、貴方が別れると云つても、お綱さんが承知をしますまい。

鈴村　ところがね、そりや俺だつて、こんな事を云つちやお前に濟まないが、今まで世話をして來たんだもの、人間に未練はなくつても、馴染んで來た年月が名殘惜しいやね、お綱のことは、お前も承知してゐてくれるんだから手放したくない事は本當さ、雖然それが彼奴を苦しめる基だと思や、考へなきやならないからね、今のまんまぢや、彼奴までが共に奈落だからね。

おたか　雖然それでお綱さんはどうなんです、其の人の世話になりたいやうな樣子なんですか。

鈴村　兎に角、何と云つても彼奴には母親があるからね、俺も最初變な素振を見せられた時は、一寸赫ともしたがね母親のことを考へりや、彼奴の身の爲めになるやうにも計つてやらなきやならないだらうと思ふ、それには今が丁度別れ時なんだ。

おたか　ぢやあ、どうしても別れておしまひなさるんですか

鈴村　さう覺悟は極つてるんだが、それには、實は少しお金がないと、俺として面目が立たないことがあるんだ。いやそれは別に手切れ、足切れといふ譯の金ぢやないんだ實は去年の暮に三百圓ばかりの吉原の勘定を拂はないで置いちや俺の顏にかゝるといふので、お綱が自分の着物や何かを質に入れて、酷工面をして拂つて置いてくれたんだ、內輪の苦しい事を知つてるだけに別れるとなりやどうにかして此の金だけは返してやらないと、當人は何とも思ふまいが、世間の奴に後指を差されるのが癪に障るからね。

たかお　貴方、その都合がつきますか。

鈴村　何處かで借るより外に仕方がないが、思ひ立つたが何とやらだ、俺は一寸金策に行つて來る。

おたか　何處へ被往るんです。

鈴村　角十の廣田に相談してみやうと思ふ。

おたか　駄目ですわ、そりやあ。

鈴村　でも、外に目的がないもの。

おたか　私、實家へ行つちやいけません。

鈴村　これからか。

おたか　えゝ。

鈴村　併し、其奴はどうも俺が氣が引けるな。

おたか　此の事は何にも云ひません、何とか、急に入用な事が出來たからつて云へば、貸てくれると思ひます。

鈴村　だが、俺の今までが今までだつたからな。

おたか　私の入用で借りることにすりや、貴方の名前なんか出やしませんわ。

鈴村　貸てくれるだらうか。

おたか　それは安心してゐて下さい、私が必と借りて來ますから、今までだつて借りに行かうと思つた事があるんですけど、貴方の顏を潰してもと思つて默つてゐたんですの、今度は貴方の顏を立てるんですもの、私、必と借りて來ますわ。

鈴村　だが、明日にしたらどうだ、今夜は大分遲いし、何だか底冷えがして來たから雪になるかも知れないぜ、これから三筋町まで大變だ。

おたか　明日にしたつて、仍且夜でなきや、商賣が商賣ですから、オチ〳〵話が出來やしません、電車で行けば雜作はありませんわ。

鈴村　濟まないな。

おたか　では、一寸行つてまいります。

鈴村　オヤ、お前、そのまんまか。

おたか　えゝ（淋しく微笑む）

鈴村　さうか、濟まなかつたな、併し風邪を引くといけない俺の外套を着て行つたらどうだ。

おたか　眞逆、大きくつて引摺つてしまひますわ。

鈴村　ぢや、襟卷だけでもして行つたらどうだ。

おたか　えゝ、拜借して行きますわ。

　鈴村の襟卷などして、

おたか　でもねえ、これがお綱さんを落籍すんだとか、何だとか云ふお金なら、借に行くにも張合ひがありますけどね別れ話に入用なお金だと思ふと、私、何んだか便りないやうな氣がしますわ。

鈴村　併し、お綱と別れてやることが、お綱を自由にしてやる方便だと思へば、落籍すのも同じ事になるだらう。

おたか　さうですね、さう思つて行つて來ますわ、いやな紙治のおさんですね。

　出て行く。

　風の音。

鈴村　濟まないな。

　ホロリとする。

　一點鐘。暗轉。

其の四

時　同じ夜更け。

所　京橋岡崎町通り。

　大概の家は戸を鎖してゐるが、一軒、二階の磨硝子の障子が電燈に映えて、中から歌留多を取つてゐる若い男女の打興じてゐる聲が一際、際立つて聞える。

　雪霏々として一面に白皚々。

　醉拂つた職人が鼻唄で通る、傘は差してゐるが、醉つてゐるので温く傘の必要を感じてゐないらしい。幌が眞白になつた人力車が通る。無論車夫の姿も眞白である。

　襟卷に顏を埋めて、其襟卷の凹みには、襟卷とばかりと云はず、着物の雪の溜り得るところに雪をくつつけて、頭髮も白くなつたおたかゞ、風に惱みつゝ、向ふから出て來る。

　歌留多は益々盛らしい。

　おたかは幾度か轉びさうになり、或る時は轉んで、漸くに彼方に去る。幕

其の五

時　前幕より數年を經たる正月下旬の晝。

所　本所新小梅の鈴村の侘住居。

　不思議なことには、間取りの工合が綱次の家に其儘である多少の相違はあり、綱次のそれよりも茅屋であるが、二階がないだけに、外は、次の家をそつくり持つて來たのではないかと思はれる程よく似てゐる。それに茅屋とは云ふもの、全體に「野に捨てた笠に用あり水仙花、霜除け程の侘住居」といふ俤だけは跡を留めてゐる。天井に釣つた繭玉が色つぽい。

　中川が居催促といふ形で玄關に腰掛けてゐる、側に手焙り中川に詫びてゐるやうに其の前に兩手を支いてゐるのがおたか、座敷に箱膳を間に挾んで酒を飲みながら聲を潜めてゐるのが鈴村と句樂。

　幕明く。間。

中川　今月の晦日は間違はないでしようね。

おたか　ハイ、今月の晦日には必と此方からお屆け致しますから。

中川　何時まで云つてゐても仕方がないから兎に角今月の晦日まで待つことにします。

おたか　どうも誠に相濟みません。

中川　これが一月や二月の家賃の滯りなら、私の方もこんなに喧しく催促はしやしません、半年以上になるんですからな。

おたか　何とも申譯が御座いません。

中川　旦那が歸つて來たらよくさう云つて下さい。

おたか　ハイ。

中川　今月又延びるやうだつたら、どうでも此の家は明けて貰ひますから、洒落や道樂で大屋をしてゐるんぢやないんですからね。

おたか　御尤もでございます。

中川　質なら疾くに流れてゐる時分だ。

おたか　相濟みませんでございます。

中川　お内儀さんが斯うして詫言を云ひなさるから、貴女に免じて待つて上げるんです、旦那にさう云つて下さい。家賃を滯らして酒を飲んでゝ何が美味しいつて、私が云つたとさう云つて下さい。

おたか　恐れ入りまして御座います。

中川　ぢやあ今月の晦日には間違なくね。

おたか　畏りました。

中川　延びれば店立てゞすよ。

おたか　ハイ。

中川　間違ひなく頼みますよ。

おたか　どうもお粗忽樣で、御免下さいまし。

　中川は歸る、おたかは手焙りを持つて奥へ、次ぎに座布團を。

鈴村　やつと歸つたね。

おたか　半年からになるんですもの、無理はありませんわ。

句樂　冗談云つちやいけません、家賃なんてものは溜るものに昔から定つてゐますとア。

おたか　又句樂さんが始まつたよ。

句樂　まつたくですよ、どうも私なんかは何ですね、酒を買ふ錢は惜しくないが、家賃を拂ふなア無駄なやうな氣がしますね。

おたか　こんな人に家を貸した大屋さんは堪まらないね。

句樂　大屋は堪まらないが、家賃は溜りますよ。

鈴村　丁度後連ぢやないかい。

句樂　はゝゝ、併し今の大屋は乙な事を云つたぢやありませんか、家賃を溜て酒を飲んで何が美味しいつて。

鈴村　彼奴は一寸痛かつたね。

おたか　私もハツとしましたわ。

句樂　そんな事ぢや、未だ此の方の修行は足りませんね、あんな時は斯う云つてやるに限りますよ、雖然何でござんしよう、大屋さん、人間は老少不定、明日ありと思ふ心の仇櫻、夜半に嵐の吹かぬものかは、今日家賃を拂つた爲めに酒が飲めないやうなことになつて頓死をしたら死に損でござんしよう、家賃を拂はないで酒を飲んで死にや、これ卽ち死に徳で御座んしよう、損と徳だから家賃は上げられない、又、此酒と云ふ奴は家賃を溜て飲む奴が一倍堪へられないんで、と斯うやるんですよ、大概怒るか呆れるかして歸つてしまひますよ。
鈴村　睨み返しの新手だね。
おたか　だけど、あんな事を云つてたんですけど、大丈夫でしようか。
句樂　御心配御無用、其奴は私が引受けました。
おたか　貴方が引受けてくれるんだつて。
句樂　私の手許には文久だつてありませんよ、手許にはないが（口を指して）此處にある、旦那、お頼みがあるんですが。
鈴村　何だい。
句樂　此の晦日に私に獨演會をやらして下さいませんか、獨演會でなくつても、小しんと焉馬と三人會でも構ひません、事情を話したら・彼奴等だつて喜んで出るでしようさうして其の上りを此方へ……怒つちやいけませんよ、怒つて下すつちや困りますよ。
鈴村　句樂さん、有難う。
句樂　承知して下さいますか。
鈴村　何にも云はない、嬉しいよ。
句樂　どうかまア失禮なところは御勘辨下さい、私も旦那には一方ならない御恩になつてゐるんで、何か御恩返しと思つても、御存じの通りの譯で、唯、斯うしてお見舞ひに上るだけで、それもそのたんびに御馳走になるんで、反つて心苦しく思つてゐるところへ、今、ヒョイとそんな智慧が出たもんですから。
鈴村　有難う、何分頼む。
句樂　ヘイ。

間。

おたか　まア、そのつもりで、如何。
句樂　有難う御座んす。
おたか　オヤ、失禮。

立つて台所へ、一升德利の酒を德利へ、酒が殘り少なになつてゐる。

おたか　（座敷へ戻つて來て、德利を銅壺へ入れて）一寸、私、酒屋へ行つて來ますから。
鈴村　もうないのか。
おたか　えゝ。
句樂　もう御新造さん、これで結構です、私もこれから、今のことで小しんと焉馬のところへ話をしに行きますから
おたか　まア御悠くりなさいな。
句樂　本當にもうお暇しますから。

押問答のところへ宇治よねが來る。

よね　今日は。
おたか　ハイ、あ、御師匠さん、被來い。

よねは座敷へ通る。

よね　旦那、今日は。
鈴村　毎日、お世話樣です。
よね　いゝえ、どう致しまして。
おたか　お師匠さん、一寸待つてゝ下さいね。
句樂　いゝえ、本當に私ならもう結構で、どうぞ其方のお客樣を。
おたか　お客樣ぢやないんですけど、宜う御座んすか（鈴村に聞く）
鈴村　ウム、お前は兎に角お稽古をして頂いたらいゝだらうお師匠さんをお待たせしてもお氣の毒だ。
よね　いえ、私など構ひませんよ。
おたか　ぢや、お師匠さん、此方へ被來つて下さいましな。
よね　ハイ。
おたか　句樂さん、一寸御免なさい。

よねと共に一室へ入る。

句樂　何誰でござんすい。
鈴村　一中節の師匠さ。
句樂　御新造がおやんなさるんで。
鈴村　俺ん處へ來るまでにやつた事があるんで、又稽古をさしてくれといふから、やらしてゐるのさ。
句樂　へえ。
鈴村　御沈落の身分で暢氣過ぎるだらう。
句樂　いえ、有難う御座んす、流石は御新造だ、有難い、御沈落に氣の怯げないところが頼母しい、江戸前だ、旦那も旦那だが、御新造の鷹揚なところが、堪らなく嬉しう御座んすね、小しんに話をしてやつたら、何て喜ぶか分りませんぜ。

〽黒髮の亂れて今のうき思ひ、目には泣かれど氣につかへ
胸に涙の玉くしげ……。

樂鈴　オヤ、もう吉原八景は上つたのかな。

句樂　小春髮結でございますね。

〽梳けど心のもつれ髮、むすぼれ解けぬ身のうへを……。

鈴村　俺は之を聞くと思ひ出すんだ。

句樂　何を。

鈴村　綱次の家でよく之を聞いたもんだ。

句樂　槙町さんは今、どうしておいでゞす。彼方の方のことは更に知らないんですが。

鈴村　御全盛らしいね、別れてやつていゝ事をしたよ、丁度別れやうと思つた時に此奴を聞いたんだ。

〽所詮この世は假髷の、戀にうき身を投島田、覺悟極めし心たば、主に何さぞ黄楊の櫛、合せ鏡と泣く涙、落ちて流れて鬢水の……。二人は耳を傾けながら、獻酬、酒が盡きる。鈴村は稍憂鬱になつてゐる。

句樂　旦那、私はこれから小しんの處へ參りますが、どうです、旦那もお出掛けになりませんか。

鈴村　さうだな、久し振で小しんに會つて見やうか、今の話にしても、俺の方で賴まなきやならないことだからな。

句樂　旦那が賴むと仰有つたら、必と小しんは泣きますぜ。

鈴村　出かけやう、おたか、俺は一寸これから、句樂さんと小しんの處へ行つて來るからな。

句樂　御新造さん、御免下さい。

鈴村と句樂は出て行く。

〽あはれ逢ふ瀬の首尾あらば、それを互ひの命日と、名殘りの文を云ひかはし、もはや命も蜆川…………。

間。

〽さりとは狹い御了簡、死んで花實が咲こかいな、樂しむも戀、苦しむも、戀といふ字に二つはない…………。

鈴村が弟の半さんと歸つて來る。

半さん　(途中で)いゝ處で會ひましたね。

鈴村　何しに來たんだ。

半さん　實は姉さんに意見を云はうと思つてやつて來たんです。

鈴村　何だ、おたかに意見を云ふ、何を意見しやうと云ふんだ。

半さん　これは私ばかりが思つてゐることぢやあないんです、阪本の鍵屋の叔母さんも、茅場町の姉さんも、みんなあれぢや餘り氣樂過ぎるつて云つてるんです。

鈴村　何を云つてるんだか、お前の云ふことは取りとめがなくつて分らないが、一體何が氣樂過ぎるつて云ふんだ。

半さん　だつて兄さん……姉さんは、今、兄さんがどんなに困つてるんだか分つてるんでしよう。

鈴村　そりや分り過ぎる程分つてゐるだらう。

半さん　さうでしよう、分つてゐないんなら仕方がありませんが、分つてゐるのならそんな中で、一中節の稽古なんぞしなくつてもいゝだらうつて、鍵屋の叔母さんも、茅場町の姉さんもさう云つてゐるんです、無論私も姉さんが氣樂過ぎると思つてゐます。

鈴村　何だい、そんな事か、氣樂過ぎるつて云ふのは(暗い顏)

半さん　そんな事かなんて、第一兄さんが此の苦しい中で、あんな一中節なんかの稽古をさせとく法がありませんよ、あんなことをさせて置くから、漸次親類のものが愛想を盡かして兄さんの云ふことを構ひつけないやうになるんです私は姉さんばかりでなく、兄さんもいけないと思ひます

鈴村　分つてるよ、半さん、俺にまで意見を云ふ氣か。

半さん　いゝえ、意見て譯ぢやありませんけど、あれは兄さんから姉さんにさう云つて止めさした方がよう御座んすよ。

鈴村　餘計なお世話だ、女房に一中節の稽古をさせやうがさせまいが、親類共の知つたことぢやない、お前もまた差し出た意見なんぞしに來なくつたつていゝ、さつさと歸れ。

半さん　ですけれど、鍵屋の叔母さんが、私に小梅へ行つてさう云つて來いつて、さう云ふんです。

鈴村　オイ、半公、お前もだらしがなさ過ぎるぢやないか、あんな狸婆にさう云はれたからつて、のこ〱出かけて來るなんて。

半さん　併し私も疾うから一度は姉さんにさう云はうと思つてゐたんです。

鈴村　何でもいゝ、俺の女房のしてゐる事に、親類や兄弟の世話は受けない、斯う零落してしまつて、おたかだつて樂みがなきや生きてゐられない、俺には酒はあるが、おたかには何にもないんだ、俺がさう云つたと、さう云つてくれ。

半さん　さうですか、ぢや歸ります。

鈴村　ウム、歸つてくれ。

半さん　左樣なら。

ブリ〳〵して歸つて行く、見送つて鈴村は我家へ力なく入る。

〽わたしも元は廓にて、面白いこと派出なこと、わけのありたけ盡して、戀と情の二つ櫛……

〽口と心のふた皮目、人まへつくる泪の笑顏、聞きそめた朝顏の、露を含むが如くなり……。

おたか　(聲)どうもお師匠さん、まだよく覺えられませんで

よね　いゝえ、大變結構ですわ、御新造さんの聲は、ほんとに一中節に持つて來いといふ聲なんですもの。

おたか　厭ですよ、お師匠さん、お師匠さんはほんとにお世辭がいゝんだから。

よね　いゝえ、本當にお世辭でなく。

おたか　お世辭でなくなら、少し小言を云つて下さいよ、それでなければ藝の修行になりませんから(間)ねえ、お師匠さん、私もうこれからどの位お稽古をしたら、兎も角も師匠としてやつて行けるやうになれるでしよう。

よね　さうですね、貴女は藝質がいゝんだから。

おたか　本當にお師匠さん、お世辭でなくですよ。

よね　えゝ、お世辭でないところ、もう一年もみつちりお稽古をなすつたらようござんしよう。

おたか　さうですか、ほんとに後一年ぐらゐで師匠になることが出來るんでしようか。

よね　えゝ、大丈夫ですとも。

おたか　師匠をしたら、どうにかやつて行けるでしようね。

よね　どうにかとは。

おたか　まア夫婦で食べるぐらゐのことは。

よね　オヤ、お惚氣ですか。

おたか　えゝ。

よね　貴方が師匠になつて、旦那を立て過ごしになさるんですか、ホ、、、………

おたか　ホ、、………

　其の笑ひ聲は淋しい、鈴村は耐らなくなつて泣く。人の出て來る氣配ひに、鈴村は玄關へ行つて、今、歸つて來たやうな振りをする、おたかとよねが出て來る。

おたか　オヤ、何時歸つて被來いました。

　今さ、タツタ今だ。

おたか　さうですか、少とも氣がつかなかつた。

よね　では、又明日、旦那、御免下さいまし。

鈴村　どうも御苦勞樣。

　よねは歸つて行く。

おたか　小しんさん處へ被在らなかつたんですか。

鈴村　其處まで行つたんだが、急に行くのがいやになつて來たんでね(急に言葉激しく)おい、おたか、お前には隨分苦勞をさせたなア。

おたか　何を云つて被在るんです。

鈴村　いゝや、まつたくだ、俺のところに來てから、ずつと苦勞のしつゞけと云つてもいゝ位だ、おい、濟まなかつた、許してくれ、みんな俺が惡かつた、ほんとに濟まない、堪忍してくれ。

おたか　いゝえ、貴方にそんなに云つて頂くことはありませんわ、私に氣に働きがなかつたからいけないんです、外の人ぢやない句樂さんですけれど、以前は最屓にして被在つた藝人に、花會をお頼みになつたり、嘸お忌やだつたらうと、私、ほんとに辛う御座んしたわ、私も、これから一生懸命やりますから、もう少し辛抱して下さい、ね。

鈴村　おたか。

　手を取つて泣く、おたかも泣く。

（幕）

◇浪花座初春興行役割一覧◇

和田兵衛秀盛、信濃屋傳七(扇笑)　日吉丸、鳴照太夫(扇雀)　竹の下孫八、吉阪吉右衛門、加治田孫左衛門、黒住平馬(橘三郎)　戎三郎、勝頼の御臺所、玉虫屋娘お安、蜂須賀妹梢(成太郎)　武田勝頼、大文字屋榮三郎、小山田庄左衛門、織田兵衛尉信賢、棟梁與吉(壽三郎)　侍女百合野、高綱妻篝火、嫁お松、日吉丸母親お仲、佐野屋與三郎(愛之助)　大黒天、横田又平、垂井藤太、毛利小左衛門、たいこ持梅八(廷藏)　辨財天、幸次郎妹おきぬ、毘沙門天王、藝者お米(福太郎)　稲田左馬之允、町人松吉、卯の松(松鶴)　北條時政、信傳寺呑海(荒五郎)　古郡新左衛門、講中伊八(卯十郎)　土屋惣藏、玉虫屋榮次、家人佐平(莚藏)　盛綱妻早瀬番頭傳九郎、女房お富、蜂須　孫左衛門、卯之助(當之助)　跡部大炊助勝資、母微妙、錣屋宗作、蜂須賀藏人正利、婆々お爪(大吉)　佐々木三郎兵衛盛綱、萬屋助右衛門、番頭櫟八、蜂須賀小六正勝、紙屑屋幸次郎(延若)

諒闇中に就き欠禮致します

御執筆者諸氏及び愛讀者諸賢の御幸福をお祈申上ます
併せて私共のために御報道の御聲援の程を偏にお希申上げて居きます。

昭和二年一月一日

雑誌『道頓堀』編輯部

鳥江銕也
成山桂三
大塚克三
姥谷愁

昭和二年一月一日發行
月刊雑誌『道頓堀』初春號 第五輯

□誌代は前金お拂込に願ひます。
□郵券代は一割増にて御註文を願ひます。

定價・金參拾錢

昭和元年十二月三十日印刷
昭和二年一月一日發行

編輯者 大阪市南區久左衛門町八番地 松竹合名社内 姥谷久一
發行者 大阪市南區鰻谷中之町三九 成山桂三
印刷者 大阪市南區鰻谷中之町三九 岡本省三
印刷所 大阪市南區鰻谷仲之町三九 中村盛文堂

發行所 大阪市南區久左衛門町八番地 松竹合名社
電南（一二四〇・六六八五番）

祝改題

株式會社 大林組

本店 大阪市東區京橋三丁目七十五番地
東京支店 東京市麹町區永樂町二丁目一番地（三菱仲廿八號館）
横濱支店 横濱市太田町二丁目四十番地（十五ビルヂング）
名古屋支店 名古屋市中區新柳町六丁目三番地 住友ビルヂング
小倉支店 小倉市米町二丁目三十二番地
京都出張所 京都市上京區堺町通御池下丸木材木町六七五番地
龍山出張所 京城府龍山漢江通八番地
工作所大阪工場 大阪市港區千島町六番地
工作所東京工場 東京市深川區鹽崎町一號埋立地

若く明るい顔になる
レート白粉
純無鉛專賣特許
東京平尾賛平商店大阪